小戸禊は勇者であったか？

加賀崎 美咲

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

神世紀３００年、人類の幾度とないバーテックスとの戦いが起きようとしていた。記憶喪失の少年小戸禊は友人の乃木園子のためその終わりない戦いに身を投じる。戦う内に聞こえる謎の声、失われた己の過去を知る夢の中にいる自分そっくりの誰か。全てを知った時、二年前の因縁を超え、禊は何を選ぶのか。

「行こう。痛みを消しに。もう君が苦しまなくていい世界を創りに」

目次

プロローグ　そこにいる君へ　1
第一話　動き出した君　8
第二話　触れ始めた君　前半　13
第二話　後半　23
第三話　名も明かさぬ君　32
第四話　触れ合った君　40
第五話　輪に加わった君　50
第六話　夢を見つける君　61
第1話　目覚めた僕　70
第2話　目を閉じていた僕　81
第3話　僕が君にあげられるもの　89
第4話　そして僕は暴かれた　101
閑話　俺／僕の記憶　116
第5話　そして僕は君を救う　124
第6話　僕の名を呼ぶ声　134
第7話　僕の名前は小戸禊　147
最終話　小戸禊は勇者になる　165

プロローグ　そこにいる君へ

小戸禊。それが僕を示す名前という名の記号であった。それ以外に僕を示すことのできる情報を僕は有していない。目をつむり、思いかえそうとも脳裏に思い浮かぶ最も古い記憶はぼんやりとした二年前の大橋近くの砂浜での記憶であった。砂浜で仰向けに倒れる僕を誰かが見下ろしている。薄く開いたまなこから見えるのは二つの輝き。かすかな感覚の記憶が僕が何か喋っている事を示していたがあの時、何を話していたかは靄がかかったように思い出せない。

その次に思い出せたのは病院での記憶。目を覚ますと仮面をつけた大赦の職員たちが複数人で僕の目覚めを待ったいたようだ。自分が誰かもわからず動揺していた僕はすぐにやってきたお医者様の質問にこたえ、そこで僕が記憶喪失であることが判明した。発見時の様子から海難事故でのショックによる記憶喪失だと予想された。病院のベッド傍の名前の書かれていない本来、名前が書かれてあるべきネームプレートがやけに印象的だった。名前がないのは不便だろうと大赦の人から小戸禊という名前が暫定的につけられたが、その後身寄りが見つからなかったことから僕の名前は少なくとも分かるまでは小戸禊になった。

その後、一緒に海岸で倒れていた乃木園子との面談が行われた。初めて見る彼女は衝撃の一言であった。左目以外の全身が包帯や病院着に包まれ、見えているのは左目と口元だけという有様。記憶喪失だけで済んでいる僕に対して酷く重い症状であった。話して見るが結局彼女も僕を知らなかった。

彼女は大赦で祀られる存在であったためか普段は誰も見舞いに訪れることもできないらしかった。それを示すかのように、病室はいたるところにお札が張り巡らされ、病室の中に鳥居は設置され、病室自体が一つの社の様であった。しかしどういうわけか僕だけはそんな彼女との面談が許された。少なくとも検査と身元捜索までの間、僕は病院に入院することとなった。その間は毎日のように彼女の病室に訪れた。大赦直営の病院であったため病院内にいる患者は僕と彼女

だけであったため自然と彼女に会いに行くことが日課となった。
　僕の退院が決まるまでの半年間、左目以外満足に動かせない園子とは多くのことを話した。通っていた学校でのこと、小説を書くことが趣味であったこと、ぼーっとしていることが好きなこと、そして今は会えなくなってしまった二人の友達のこと。一人は讃州の方に引っ越して、もう一人は遠くに行ってしまったらしい。二人目のことを話す時の彼女の目を見ていれば言わずともどうなってしまったのか察してしまった。それ以来彼女の友人について聞くことはなかった。
　病院にいる頃はいろんな事をした。園子の体が不自由なためできることは少なかったがそれでもできることはあった。映画やドラマなど見ることは体がうごかせなくとも一緒にできることだった。元々創作が趣味であった彼女にとって様々な作品を見て感想を交換したりし、毎回独創的な視点から語られる彼女の感想は僕にそれまでになかった視点をを示してくれた。映像媒体以外で言えば囲碁や将棋を始めとするボードゲームも多く遊んだ。体が動かせない彼女でも声で指示してくれればコマは問題なく動かせたためよくやる遊びになった。
　春になると包帯だらけの園子を車椅子に乗せて二人だけの花見をした。彼女は口では何も言わなかったが包帯だらけの自分を見られるのは抵抗があったのだろう、だから桜を見に行く時間を遅くして夜桜を二人で見た。病院から少し歩いたところにある小さな公園の桜は名所のものと比べれば貧相な桜の木であったが、二人で見たそれはとても綺麗なものに思えた。
　花見から少し経った五月、晴れて僕は病院を退院することが決まった。元々病院にいたのは体には記憶以外の異常はなかったが身元が分からなかったための処置であったが五月から大赦が身元保証人になるために問題ないとの判断だった。そこからは迅速だった。あっという間に讃州中学への編入が決まり、僕の通学が始まった。
　それからは大赦が用意したマンションから学校と園子のいる病院を往復する生活が始まった。それから一年が経とうとしている四

月の現在に至る。
　四月も中旬に入った木曜日、僕は園子のいる病院へ自転車を飛ばしていた。一年間通い慣れた道にはもう間違える様な場所はなく、３０分ほど飛ばしているとこれまた見慣れた病院が視界に入ってくる。病院に入り、彼女専用となっている病室に入る。あいも変わらずものものしいお札と鳥居の設置された病室で彼女はいつものようにベッドの上にいた。こちらに気がつくと彼女はその痛々しい包帯姿とは裏腹に呑気な声が発される。
「あっ！　みーちゃん。今日も来てくれたんだね～」
「うん。今日も来たよ。迷惑だった？」
「ううん、もちろんそんな事ないよ」
「そっか。ならいいか。今日はね…」
　こうして会うたびにそれまであったことを彼女に話すのが僕たちの恒例行事であった。学校での生活は病院の外にあまり出られない彼女にとっては新鮮なのか話題の弾むものであった。僕の学校生活を聞いている時のほころぶ顔を僕は嬉しく思い、つい饒舌になっていた。
「わっしーも元気そうだった？」
「うん。元気そうだったよ？　クラスが違いからそんなに接点はないわけだけれども」
　話しているうちに話題は東郷美森のものになっていた。東郷美森。園子が神樹館小学校にいた頃のクラスメイトだったらしい。その時の名前は鷲尾須美というものだったらしいが写真を見たところ間違いなく本人だと園子は言っていた。元々東郷のことに気がついたのは僕が学校でのことを見せようと写真を撮って彼女に見せていたことが原因であった。たまたま撮った写真の中で勇者部の面々が写り、その中の東郷に園子が気がついたのが始まりだった。その時の彼女の慌てようは酷いものだった。大赦の職員たちに合わせてくれとせがむ様子が鬼気迫り、少し怖かった。しかし結局は園子が折れて終わってしまった。それからは僕を通して彼女の事を聞く程度に抑えていた。

「そっか～。わっしー元気なのか～。みーちゃんはどう？」
「学校の方は問題ないよ。授業もついて行けてるし。でも記憶の方はさっぱり」
「やっぱり思い出したい？」
「どうだろう？　思い出してもやっぱり今の僕とは違う人だから混乱するのかな？　そう考えたらどっちでもいいかなって最近は思えてくるよ」
　僕の言葉を聞いた園子は少し悲しげに眉を下げた。
「もし記憶を思い出しちゃったら、やっぱりみーちゃんはそっちでの生活に戻っちゃうのかな？」
「どうかな。今の学校もあるし記憶を思い出してもしばらくはこのままかなって。もし家族がいるのなら会いたいって思うかもしれないけど」
「じゃあじゃあ。もし家族が見つかったらみーちゃんはもうこっちには来てくれないの？」
「どうしてそうなるのさ。君の調子が良くなるまではずっと来るよ」
「えへへ～、そっか～。ならまだしばらくはこのままでもいいかなって」
　嬉しそうに園子ははにかむがその言葉はあまり嬉しいものではなかった。
「そんな事冗談でもいうべきじゃないよ。早く治して一緒に学校とか行きたいって言ったのは園子じゃないか」
　少し語気の強くなった言葉に面食らったのか園子は目を丸くして聞いていた。そして言葉の意味を飲み込んで笑みを浮かべた。
「そうだったね。やっぱり早く治して学校、一緒に行きたいね」
　それは二人の共通の希望だと僕は信じていた。しかし出会って二年、園子の容体は悪くなることはなかったが一方で良くもなっていなかった。この病室の中の時間はまるで停滞しているかの様な錯覚をいつも僕は感じていた。
「でもその前にお役目を果たさないといけないね」
　そして話題は『お役目』に移った。神樹様からの予言により、も

うすぐバーテックスという敵が海の向こうからやって来ることが分かった。そのバーテックスと戦う勇者の役割を果たすため通常は穢れのない乙女が複数人選ばれるらしい。しかし今回その選ばれたものたちの中に僕も含まれていた。検査の結果、僕には神樹様の勇者となる資質が異常に高かったとのこと。そのため大赦の方から僕にその勇者の役割を果たす様にお願いがあった。元より危険こそあるが僕の身元や学校での生活の世話をしてくれる大赦からのお願いを断ることも難しいこともあったが、それ以上に重体の園子も同じように資格があることを聞かされ、僕は自分が出る代わりに園子はお役目から外しように交渉し、結果そうなった。

「本当に良かったのみーちゃん？　本当ならみーちゃんはやらなくてもいいことなんだよ？」

「いいんだ。知ってしまった以上放って置くこともできないし、僕がやりたいって望んだことなんだ」

大赦と交渉したことは園子には話していなかった。変に気を使わせてしまうと思ったし、それ以上に彼女には自分のことに集中してほしいとも思っていたから。

「だから任せてほしい。絶対無事に帰ってまた来るから。約束するよ」

「うん分かった。みーちゃんがそう言うなら信じるよ。約束だね」

彼女からの全幅の信頼から来る目線はどこか気恥ずかしくて思わず顔を逸らしてしまう。そんな僕の様子が面白かったのかクスクス笑う声が園子の口から漏れる。

「じゃあ、明日も学校があるから今日は帰るよ」

「うん。また来てね～」

そう切り上げて僕は家路へと帰った。これから始まる勇者としてのお役目、きっと大変なことだろうけどきっと無事に戻って園子の元へ帰る。それだけが僕の願いだった。

禊の帰った園子の病室。それまであった楽しげな雰囲気はなくなり、沈黙が部屋を支配していた。沈黙を破ったのは病室を開く扉の音であった。

入室したのは大赦の仮面を被った女性であった。最初禊が戻って来たのかと視線をそちらに向けた園子であったがすぐにがっかりした顔になる。仮面の女性は膝をつくと神さまにするように礼を行い、それを終えると口を開いた。
「乃木様。本当にあの少年をこちらの味方として信頼してもよろしかったのでしょうか。もしものことがあれば今世代の勇者たちに甚大な被害がもたらされる危険も…」
「大丈夫だよ～。二年間みーちゃんを見て来たけど、やっぱりあいつとは違う人、みーちゃんはみーちゃんだと私は思ってるよ」
「しかしあれが演技である可能性も」
「もしそうなら今私はここにいないと思うけどな～。もしみーちゃんがその気だったらいくらでも機会はあったわけだし」
禊を危険視する大赦の職員とかばう園子。両者の意見は平行線の一途であった。
「私を信じて。もしみーちゃんがひどいことをするならその時は私が直接止めに行くからね？」
言い終えると合計二十三体の精霊が園子の周りに顕現する。精霊が増えるほど強化される勇者システムにおいて二十三体の精霊を所持することはその強さを直接的に表していた。
「承知いたしました。大赦としては小戸禊を身柄を乃木園子様に一任する事とします。くれぐれもよろしくお願いします」
「うん。いつもごめんね先生」
先生。その言葉に一瞬大赦の女性は動きを止めるが、話を終えるとは部屋を退出した。また一人となった園子は唯一動く左目を天井に向け思索する。
「きっと大丈夫。私はみーちゃんを信じてるから」
遥かな空の向こう側。十二体の絶望の頂点たちがその時のために完成しようとしていた。完成していく姿が刻々と時間が迫っていることを表していた。
ただ彼女を守りたいと思って戦いに身を投じた。それがきっと僕を支えてくれた彼女への助けになると信じていたから。でもこの

時は何も理解していなかった。僕がここにいる理由、何のために生まれたのか。僕がいることそれ自体が彼女を傷つけるとはかけらも思わず、ただ身勝手な思い込みだけで僕はそこにいた。僕は知ることになった。ただそこに居る。それだけのことがどれだけ罪深いことになり得るのか。

第一話　動き出した君

まどろみの中、瞼の裏の暗黒に日の光が差しこむ。目覚まし時計の電子音と窓の外のスズメさえずりが頭を一杯にする。毎朝のルーチンに体が反応し、上半身が起き上がる。小戸禊にとって毎朝起きることは溺れる水中から逃げ出すことに似ていた。寒々とした水の中から温い日の下に出るような安心感が禊の目覚めの感覚であった。

目を覚ませばそこからは早い。パジャマを脱いで讃州中学の制服に袖を通し、洗濯物をカゴに入れる。台所に着くと冷蔵庫から冷えた卵を割りフライパンに乗せて焼く。それを待つ間にダッシュボードの上に置いた袋から食パンを二枚抜き、トースターにセットしてつまみを回す。出来上がったものから順に皿に盛りつけていくと朝食が完成した。後はそれらと冷蔵庫からマーガリンと牛乳を取り出して机の上に並べていく。調理がうまくいったことを感じながら食事をのどに通すと片付けて台所で汚れを洗い流して、食洗機に置いていく。

学生鞄をもって家を出る。通学路を歩いていると段々と他の生徒が増えていく。生徒の集団は校門を通って学校に入っていく。階段を上がり自分の教室に入る。もうすぐ始業のチャイムが鳴る時間のため、おおよその生徒は教室内にいた。友人と世話話に花を咲かせる者、読書をする者、スマートフォンをいじる者、三者三葉の装いであった。そんな中から禊に気づいた者の声が彼にかかる。

「おっ！　禊っちじゃん。おはよー」

「丸山くん、おはよう。今日はずいぶんとクマが濃いね。またゲームかい？」

刈り上げの少年は目の下に絵の具を塗ったかのようなクマを目の下に作っていた。一昨日の彼が新発売のゲームに興奮していたことを覚えていた禊にはその二つの事実は容易に結びつき、まぁそうなのだろうと結論づけていた。

「そうそう。また新作が出てさ。今日も徹夜でハッスルだぜ」

「やっぱり。徹夜もほどほどにね」

「わーかってるよ。かぁちゃんもお前も同じこと言うなよな」
「そうかい。何度も言うのも余計な世話か」
　禊が結論を出すとちょうど予鈴がなる。丸山が腕を九十度に挙げてこちらに手を振りながら席に戻るのを横目に禊も自身の席に着席する。暫くすると教師が入室し、朝のホームルームが始まる。起立、礼、神樹様への礼が終わり、一限目が始まる。
　一限目の授業は数学であった。禊にとっては得意科目であり、ただ黙って教師が黒板に書く数式やメモを自身のノートに書き写していく。若干、退屈を感じ視線を黒板と教師からずらすと丸山の背が目に入る。どう見ても夢の国へ旅立った後であった。禊がその様子に苦笑いを浮かべているとついに教師もそれに気づく。溜息を挟み、教師は丸山の席へ歩みを進めた。教師の立つ教壇は中が空洞であることもあって足音が大きく響く。
　ドン。ドン。
　足跡が二度鳴る。しかし来るべき三度目が続かず、不審に思った禊は教師の方へ振り向いた。先生は右足を中途半端に上げて、まるでパントマイムのように静止していた。真面目な人柄の教師が急にどうしたのだと禊は周囲を見渡すと、周囲の生徒、外の飛んでいる小鳥も同じように静止していた。
　少なくとも飛んでいる鳥が空中で静止するのは明らかにおかしい。周りの様子も相まって自身が世界から取り残されたような、うすら寒さを禊は感じ、禊は確信する。
　お役目の時が来たのだ。
　いつか園子に聞いた通りであった。「お役目の時が来るとね。時間が止まって勇者になる人以外は動けなくなるんだよ～。多分最初はビックリするけど大丈夫だよ～」
　できることもなく、窓の外を眺めていると遠い海の向こうの水平線上に変化が現れた。
　空間が割れ、色とりどりの輝きが溢れ出す。地響きが起こり、自身のように地面が揺れながら、水平線から溢れ出す輝きがコップのふちから水を流し込むように内陸部へと流れ込んでくる。流れ込む輝き

が目に入る大地のほとんどを覆うと直視することのできる限界を超えて輝きがあふれて思わず腕で視界を隠す。視界の隅で光の花びらが飛ぶのが見えながら、光が収まると禊は不思議な場所に立っていた。

周囲にあるものは樹木と地面だけであった。人も建物もなく、周囲にあるのはあり得ない太さの樹木が組み合う光景ばかりであった。何処か神聖な印象を受ける場所の中、禊ははるか先に何かが来ることを感じた。それと同時に自身の頭の中で知らない声が反響する。

……コロセ。　コロセ……。　コロセ！

頭に直接響くかのような複数の声に対し、禊は不快感に表情をゆがめる。響く声は怨嗟のごとくであり、声に老若男女の差はなく、そのすべてが混ざった不快の声が禊の背筋を撫でる。

「やる気のない勇者に対する処置か、何かかい？　それなら神樹様も随分と人が悪い。いや、そもそも神様に人格も何もないか。そんなに戦ってほしいのなら、そうしてあげるよ」

戦う意思を示す。変身に必要なのはそれだけであった。それだけで禊の周りには神の加護が現れ、光で禊を包みながら、その姿を変えていく。光が収まると神の戦士がそこにあった。もともと来ていた学生服は影も形もなく、花を模した色の戦闘用の衣装であった。西洋の騎士甲冑を模した蒲葡の衣装は首からつま先を覆い、頭部には冠のようなパーツから薄布が顔を隠すように垂れていた。

変身を終えると禊は自身の格好を確認する。

「これが神樹様の勇者か……。しかしこれどうやって戦うんだ？」

一通り確認すると禊は自身が武装らしい武装を所持していないことに気づく。振り向くと板状の何かが背後に三基浮いているのを見つけた。近づいてみると砲口があり、これが何かを禊は理解した。一見、武器らしくないこれが自身の主武装なのだと理解し、禊は感じた気配の方へ向かって跳ぶ。

蒲葡の影が樹海の上を飛び、三基の砲台が追随する。暫し跳んでいると視界の先に件の気配の正体を見つける。目に入ったのは巨大なナニカであった。生き物とも機械とも判断のつかない白いそれは

ゆっくりと神樹に向かって進行していた。禊はソレの名前を知っている。

『バーテックス』

旧西暦の時代、人類の多くを死に追いやった人類の敵であり、神樹に選ばれた勇者たちが倒すべき存在。あれらが神樹に到着する前に倒さねばならない。

「いくよ」

短く言うと禊は追随する砲台で攻撃を繰り出そうとした。その時、背後から絶叫が近づいてくるのを聞き振り返った。目が合った。反応する間なく、緑色の少女が腹に刺さる。当たったと思った瞬間、禊の両肩から二体の小さな人型が、緑の少女の背後から二葉に綿のついたような生き物が現れ、蒲葡色と緑色の障壁を張る。それにより二人の衝突によって起きた衝撃が緩和される。二人はそろってその場に転がる。

「ご、ごめんなさーい」

「僕の方こそすまない。怪我はないかい？」

「は、はい。大丈夫です。あなたは？」

「小戸禊。君たちと同じ神樹様の勇者さ」

「え？私たち以外の勇者がいるんですか？」

「そうみたいだね。無駄話をしていると時間が怖いから先に行くね」

言い切ると禊はバーテックスの方へと飛んでいく。大樹の塊を抜けるともう一度バーテックスの姿が見える。先ほどはいなかった黄色の少女がバーテックスと戦っていたる所であった。

禊は一度砲台を後ろに下げると、少女の横に着地した。少女の方も禊に気がつくとバーテックスから視線をそらずに問いかけた。

「今度は何？てかあんた誰？」

「君たちと同じ神樹様の勇者だよ。助太刀する」

「助かるわ。私は犬吠埼風。神樹様の勇者よ」

「僕は小戸禊。君と同じく神樹様に選ばれた勇者だよ」

「分かったわ。よろしく」

言い切ると二人は散会した。バーテックス・ヴァルゴは下部にある

器官から何度も巨大な種子のような形をした弾丸を発射する。それに対して禊は砲台を操作して撃ち落とすことで対処する。三基の砲台は原理は不明だが禊のイメージ通りに動き、禊の意思に合わせてレーザーのような怪光線を放つことのできる武装であった。

飛んでくる弾丸を撃ち落とし、残った一基で少しずつバーテックスを攻めていく。しかしヴァルゴの弾丸を撃ち落とすことに集中しすぎたため、禊は自身への注意が薄くなっていた。ヴァルゴはそれを見逃さず、長いリボンのような部位で禊を叩き落とす。二体の精霊が張る障壁によって直接的な場撃は防御できたが衝撃はそのまま残り、禊は下へ落下していく。

禊がやられたのを見た風と樹も驚いた隙を突かれ、弾丸の連射と爆発によって吹き飛ばされる。三人をひとまず退けたヴァルゴはそのまま神樹方向へと弾丸を放つ。

「まずい。あっちには友奈と東郷が！」

しかし風の叫びはむなしく、弾丸は放たれる。しばしの後、弾丸は神樹のかなり手前で爆発した。誰かが止めたのである。

少しの間。雄たけびを上げた桜色の閃光がヴァルゴへ一直線に飛んでいく。ヴァルゴはそれを撃ち落とそうと何度も弾丸を放つが桜色はそれを正面から打ち払っていく。

「友奈！」「友奈さん！」彼女を知る二人から驚きの声が挙がる。雄たけびはそれにこたえる。

「勇者パーンチ！」

雄たけびから放たれた一撃はヴァルゴ・バーテックスの中部の部位を抉り取るように破壊した。桜色の勇者は着地するとヴァルゴの方向へと向き直る。

「勇者部の活動はみんなのためになることを勇んでやる。私は讃州中学勇者部、結城友奈。私は勇者になる！」

その日、停滞した日常が終わり、運命は動き出した。

第二話　触れ始めた君　前半

「私は勇者になる！」
　勇ましき雄たけびと共に友奈の拳がにヴァルゴ・バーテックスの一部が粉砕される。砕かれた断面からが溶岩にも似た内側が露出する。粉砕された断面から時間が戻るように再生していく。バーテックスが単純な破壊では壊れぬことを示していた。
「そんな…。治ってる？」
　一度距離を離し、ヴァルゴの全体像を見ながらつぶやきが漏れる。友奈の声に困惑と不安による震えが混ざる。
「どうやってこの怪物を倒せばいいんですか、風先輩!?」
「バーテックスはダメージを与えても回復するの。封印の儀式を踏まないと絶対倒せない」
「手順って何？お姉ちゃん」
「よけながら説明するわ。来るわよ！」
　ヴァルゴは下部から延びるリボンのような触手を手近にいた風と樹に振り下ろす。怠慢なその動きは神樹によって強化された身体能力をもつ勇者たちにとって容易にかわせるものであった。ヴァルゴもそれを当然認識し、飛び上がった勇者たちを狙って尻尾のような器官からゆうに人間大の弾丸を放つ。いかに身体能力が優れようと空中で人は自由意思で移動することはできない。
「落ちろ！」
　掛け声とともに禊の砲台は不規則な軌道で移動しながら砲口は常にヴァルゴの放つ弾丸を追いかける。ヴァルゴの放つ弾丸に焼き印を刻むように砲台からは光線とも熱線ともいえる光が射出され弾丸は撃破されていく。
　ヴァルゴを取り囲むように四人の勇者はそれぞれの位置に立つ。風の指示に従い友奈と樹は自身の持つスマートフォンに表示された祝詞をぎこちなくも読み上げていく。スマートフォンを今持っていない禊は手が空いていることを利用して、ヴァルゴに攻撃を仕掛け注意を自身に向けさせながら、その場に釘付けにする。

「おとなしくしろ！」
　風波声を張り上げて手にしている大剣を振り下ろす。精霊の様子からそれだけで祝詞と同じ効果がある事が明らかであった。
「ええ!?　それだけでいいの？」
「要は魂込めれば言葉は問わないのよ」
「それを早く言ってよー」
「それを聞いて安心した」
　風からの情報を聞いた禊はヴァルゴに向けて右手をはがす。すると手の先に二体の騎士の格好をした精霊が現れる。勇者たちの出した精霊から花びらが舞い、ヴァルゴを拘束するようにのその周囲を包み込み、ヴァルゴはその一切の動きが封じられる。行動を封じられたヴァルゴの頭部が開き中から逆さまの四角錐の形をした物体が出現する。
「なんかベロンと出た！」
「封印をすれば御霊がむき出しになる。あれを破壊すればこっちの勝ち」
「それなら私が行きます！」
　聞くや否や友奈は強化された脚力で跳び上がり、空中の御霊に近づき、壊すために拳を叩きつけた。しかし先程ヴァルゴの一部を削ることと同じ結果は現れず、硬い物と硬い物が激突する音が響くだけであった。
「かっ硬ーい！　これ硬すぎるよ！」
　あまりにも御霊が硬すぎたため、殴りつけた友奈が拳を痛めただけとなった。そんな友奈の様子を見ていた樹はふと足元の封印に目を向けた。よく見ると封印には漢数字が書かれており、それが毎秒減っていることに気づいた。毎秒減っていく数字に樹は直感的に危機を感じた。
「お姉ちゃん。なんか数字が減ってるんだけどこれ何？」
「それは私たちのパワー残量。それがゼロになるとこいつを押さえつけられなくなるの！」
「ふえええー！　ってことは」

「こいつが紳樹様にたどり着いて世界が終わると。友奈代わって！」
友奈と代わるために風が跳ぶ。同じように御霊に近づき大剣を力任せに振り下ろす。同じく金属がぶつかる音がするが御霊が傷つく様子はない。堅牢な御霊に風はたじろぐ。
「くっ…いきなりまずいかな。こうなったら私の渾身の女子力を込めた一撃を～」
予想外の御霊の硬さに決めあぐねる風は焦りからか自分でもよく分からない発言をする。決め手に欠けるなか背後から蒲葡の影が飛び出す。禊は御霊に飛びつくと三基の砲台を御霊に密着させ、ゼロ距離射撃から焼き切ろうとする。
「これでもダメか…」
御霊に密着した砲台たちからは鉄すらも容易に溶かす熱量の光線が出続けるが溶ける様子もない。みな決め手に欠け焦りばかりが募っていく。
「他に何かないのか？」
火力不足を感じた禊は済んだ砲台や自身の装備から何か使えるものがないか見渡す。ふと禊は腰のハードポイントに筒状の物体が付いていることに気づいた。手で握ってみると容易に外れる。見れば機械的なデザインをした刀の柄を連想する部品であった。握りこんでみると空いた穴から光線が伸びる。光線が1メートル強まで伸びるとそこで固定され、光線で刃が構成された刀が完成する。
「これなら！」
手に持った柄を手の中で回して逆手に持ち、両手で掴んで御霊めがけて全力で振り下ろす。光刃の切っ先が御霊に触れる。それでも容易には貫通せず、光刃を押し付けると火花が飛び散る。1秒、2秒と続けると少しずつ刃が進んでいく。
「あっ熱い！」
火花が散るほどの熱量を間近に受けた蒲葡の鎧は熱を帯び中の肌を焼く。少なくもこのガスバーナーのような使い方と装備が噛み合っていなかった。しかし少なくとも拳大の穴を御霊に開けることは出来た。

「これで締めだ！」
待機させていた三基の砲台のうちの一基の砲口を開けた穴に押し付ける。内側に抉り込んだゼロ距離射撃は外層部分の強固さを無視し光線は浸透する。一拍を置いて御霊が内側から爆発する。それを受けてかヴァルゴは一度仰け反るように痙攣すると少しずつ形が崩れ、砂となって崩壊した。
「やった。倒した！」
離れたところから勝利に喜ぶ３人の声が聞こえる。極度の緊張からの解放ゆえか禊はそのまま地面に仰向けに倒れこむ。胸にたまった熱を放ち呼吸が荒ぐ。各々勝利の余韻に浸っていると周囲から樹海に入って来た時のように花びらと光が舞って光が強まり、視界をふさぐ。光が収まり、視界が開け、周囲を見渡すとそこは学校の屋上であった。
「あれ？ここ学校？」
自身のいる場所を見て学校にいることに気づいた友奈。それに対して風からの補足が入る。
「神樹様が戻してくださったのよ」
「あっ！　東郷さん！」
戦いの最中、後ろに下がっていた友人の姿を見つけ友奈がそこへ向かって駆け出す。
「無事だった？　ケガはない？」
「友奈ちゃん…。　友奈ちゃんこそ大丈夫？」
「うん！もう安全。ですよね？」
友人の安否を確認する。互いに無事である事を認識し、安堵する。先ほどまでの非日常が終わり帰ってきたことを確認する。二人のそばまで来た風は友奈に応ずる。
「そうね。ほら見て」
言い放ち、学校の外、普段見る街へ視線を促す。そこにはいつも通りの街並みがあった。非日常の象徴たる太い幹の樹海は何処にもなかった。その光景は戻ってこれたのだと勇者部の全員に気付かせるのに十分なものであった。非日常なものが一切ない、普段通りの木曜

日がそこにはあった。そんな何でもないものが彼女たちの守ったものであった。
　風が言うには時間は止まったまま、誰も気づくことはないとのこと。当然彼女たちは急に授業中の教室から消えたわけなのだが、そこが大赦からの手助けが入るのだという。何とも閉まらない終わりに緊張感の解けた面々。緊張の糸が切れたからか、それとも単に涙もろさから来るのか樹は声に安心と涙が混ざる。
「怖かったよ、お姉ちゃん。もう訳が分からないよ～」
「よしよし。冷蔵庫のプリン半分食べてもいいから」
「あれ元々私のだよ～」
　犬吠埼姉妹らしいやり取りに友奈は自身の頬が緩むのを自覚する。そこでふと気づく、そういえば一緒に戦ったその少年は何処へ行ったのだろうかと。薄布によって顔は見えなかったが確かに企画にいたはずである。周囲を見渡すと仰向けになって顔だけを犬吠埼姉妹に向けている禊と目が合った。顔を見て気づく、見知らぬ少年であった蒲葡色の騎士は隣のクラスの小戸禊であった。友奈は禊へ話しかけるために彼の下へ歩いていく。スカートの友奈が近づいてくるのを見た禊は慌てて状態を起こす。体に異常はなかったが妙な気怠さから倒れていたがこのままではマズいと慌てる。
「隣のクラスの小戸君だよね？　私結城友奈。勇者部やってます」
「えっと小戸禊です。はい。君たちも神樹様の勇者なんだよね？」
「そうだよ。小戸くんもだよね？　よろしく！」
　禊からすれば園子に頼まれてよく様子を見ていたために一方的に彼女らのことは知っていたが、面と向かって話すのは初めてのことであった。このまま話してボロを出すのはまずいとその場を離れようとする。
「それじゃあまた今度…」
　踵を返し帰ろうとする禊。出口を向いたところで左肩に重さが掛かる。動かない。掴まれている。油の切れたブリキ人形のように首を回しながら禊は重さの法へと振り返る。イイ笑顔の風がいた。
「それで？あんたは何者なのかしら？説明がないまま、はいそうです

かって帰れると思ってる？」
「えっと…。ほら僕今日は用事があるんで」
少なくとも風にとって禊は大赦からも何も聞いていない謎の勇者。そんな怪しい彼を放置することは始めから選択肢には入っていなかった。事と次第によっては大赦に彼を引き渡すことも辞さないつもりでいた。
「世界の危機より大事なこと？」
「あー…。うんと…。多分大赦の方から説明があると思うのでそれでは…」

「それで帰って、こっちに来たの？」
ベッドの上から疑問の声が聞こえる。あの後禊は引き留めて話を聞こうとする風を振り切り、明日勇者部においでという友奈の声を背に屋上を駆け下りていった。呆れた視線に禊は肩をすぼめるしかなかった。いたたまれなさから脱出するために話題を変えた。
「そうだ。やっぱり勇者に選ばれたよ」
その一言に園子の目尻が下がる。声色も下がる。
「ごめんね。みーちゃんに負担を掛けてばかりで」
首を横に振り否定する。
「いいんだよ気にしなくて。少なくとも何もしないのはいやだったから」
「やっぱりみーちゃんも勇者に選ばれたんだね…」
「勇者適性だったっけ？」
「うん。みーちゃんのそれも高かったんだよ。だからきっと選ばれるのは間違いなかったんだ」
「なら頑張るよ。何もない僕だけどこれなら君や大赦の人たちにお返しができるし」
禊にとって記憶喪失の自分を養ってくれる大赦や友人の園子へできることはやっておきたかった。
「そっか。なら…うん。もうこれについては何も言わないよ。ただ…

頑張りすぎないでね？」
「ありがとう。今日はもう帰るよ」
「うん。またいらっしゃーい」
少しおどけた声を園子は出し、禊は微笑む。そのまま禊は病室を後にする。
残された園子は天井を見上げて一つ溜息を漏らす。最も恐れていたことは起きていないようだ。少なくとも禊がいつも通りにここに来て、何事もなく帰っていったことが何よりの証明であった。大丈夫、きっとみーちゃんはいなくならない。園子は自身に言い聞かせるように、祈るようにただ胸の内に思いを秘めた。

次の日禊は家庭科準備室の中の勇者部に来ていた。正しく言えば連行された。最後の授業が終わって帰ろうと準備していると風が直接教室に襲来、そのままここまで連れ去られたのである。
「小戸。あんた大赦から派遣された勇者だったのね。昨日大赦の方から連絡が来たわ」
「あー…うん。そういうことになるのかな？」
「なんか歯切れ悪いわね」
「僕の場合、勇者適性が高かったからほぼ確定みたいだったし、結果的には派遣って形になるのかな？」
「あんたにもあんたの事情があるのね」
納得した様子を見せる風。そこに横から友奈がプリントを一枚差し出す。
「はい。小戸君」
差し出されたプリントを受け取るとそれは部活動の入部届であった。
「うん？」
「入部届だよ。ようこそ勇者部へ」
禊は察した。どうやら勇者に選ばれた事と勇者部に入ることはイコールらしい。そもそも彼女らは適性のある子が勇者部に集められたと禊は聞いていた。順序が逆になるが勇者である禊も勇者部の一

員になるらしい。いかように返事したものかと悩んでいると禊に関係なく、風による説明会が始まっていた。黒板によくわからない線の塊を描き終えると話が始まった。
「戦い方はアプリを見るとして、今はなぜ戦うのかを説明していくね。こいつバーテックス」
　指で黒板に書かれた絵を指す。なんでもバーテックスは合計十二体いて、海の向こう側からやってくる。
「あっ！それ昨日のやつだったんだ」
「奇抜なデザインをよく表した絵だね」
　妹の樹と友奈のそれぞれ遠慮ない言葉とフォローが入る。風の顔がぐぬぬと歪むが気にせず続ける。禊にはしっかりと伝わっていた。そんなに分かりづらいだろうか口には出さずにおく。
　説明が続き、以前は追い返すことが精いっぱいであったこと、今は神樹の力を借りて勇者に変身し戦えるようにそのシステムが作られたこと。ちょくちょく風の絵の下手さに茶々が入り、だんだんと禊にはあの絵はダメなのかと思い始めていた。思索にふけっていると美森が発言する。
「この勇者部も先輩が意図的に集めた面子だったというわけですよね？」
「そうだよ。適性値が高い子は分かっていたから。私は大赦から指名を受けているから…」
「知らなかった」
　家族の知らない一面を知った樹から驚いたとつぶやきが出る。
「次の敵はいつ来るんですか？」
「明日かもしれないし、来週かもしれない。そう遠くはないはずよ」
「なんで勇者部の本当の目的を早く話してくれなかったんですか」
　攻めるような声が美森から出る。自分や友奈の居場所であった勇者部にこのような目的があったことに裏切られたような感情が沸く。
「友奈ちゃんも樹ちゃんも死ぬかもしれなかったんですよ？」
「実際にバーテックスが来るまでどのチームが当たるかは分からなかったんだ。むしろ変身しないで済む可能背のほうがよっぽど高く

て」
　場の空気が不穏になっていくのを禊は感じた。どうやら勇者関連のことを風以外は知らないことであったらしい。
「こんな大事なことずっと黙っていたんですか…」
　それだけ言うと美森は俯いたまま車いすの車輪を回して勇者部を後にする。友奈もそれを追いかけて出ていく。後に残った禊、風、樹も間にも無言が流れる。出来ることもないので禊は無言で入部届を見ていた。ふと横を見ると樹は何やらカードを並べ始めた。
「それはタロットカード？」
「え!?　はい…どうやったらお姉ちゃんと東郷先輩がどうやって仲直りできるかカードで占ってみようかと…」
　急に禊に話しかけられて驚きながらも樹はしどろもどろに答えた。カードで未来を占えるらしい。初めて見るタロットカードに禊は関心していた。へぇと感嘆すると黙って樹の向かい側に座り、カード占いの結果を固唾をのんで見守る。
「えっと～。説明足りなくてゴメンね♪」
　何やら軽い調子の謝罪が聞こえる。どうやら風は自身のネコ型の精霊を相手に美森に対する謝罪を練習しているらしい。
「軽すぎてもっと怒っちゃうかな？」
　自己分析できる程度には冷静らしい。
「本当にごめんなさい。…低姿勢過ぎるかな？　困ったどうやって仲直りしよう」
　その後もいくつかの試行錯誤が続くがなかなか結論は出ないらしい。助け舟を探して風は樹にカードの結果を聞く。
「樹～どうしたらいいか占えた？」
「今、結果出るよ！」
　初めて聞く樹の強い自信を感じる声に禊の期待も高まる。一枚目をめくり『恋人』のカードが出る。
「なんかモテそうな絵じゃない！」
　どうやら風の価値判断はそこにあるらしい。禊は一つ賢くなった気がした。

「他のは？」
「えっと」
一枚一枚、並べられたカードがめくられていく。どの様な結果が出るのかと三人の視線がカードに釘付けになっていると樹の手が止まる。いや正しくはカードが空中で固定される。同時に風と樹の携帯から警報のようなアラームが鳴る。瞬間的に理解する。また来たのだ。
「まさかの連日？」
静止した世界から光があふれ、神樹の加護で世界が満ちる。まばゆい光が収まるとまたあの樹海へと禊たちはいた。

第二話　後半

視界を封じるまばゆい光が収まると、視界が徐々に戻っていく。目に入る景色は昨日も見たもの。樹海化した世界に禊はいた。周囲を見渡すがそばにいたはずの風と樹の姿は見えない。水平線の向こう、樹海の境界が揺らめくと三体のバーテックスがゆっくりと進行してくるのが見える。遠目で三体のバーテックスを眺めていると頭の中に熱がこもる感覚を得る。遠くから響くように声が聞こえる。

コロセ。タオセ。シメイヲハタセ。

男とも女とも判別できない複数の声が頭に響く。命じる様に聞こえる声が熱となり痛みに変わる。熱が頭を焼く。あまりの痛みに立っていられず頭を押さえたまま膝を屈っしうずくまる。分からない。誰の声？何の声？熱の痛みと共に思考が混沌とする。

『アーアーミテラレナイナァ。』

それまで禊に頭痛を与えていたのとは別の声が聞こえる。幼い少女の声。聞いた記憶のどの声とも一致しない懐かしい声。その感覚に矛盾した声が聞こえてくると、いつまでも続くように感じた痛みがすっと引いていく。異なる二つの声が聞こえる。禊を責める様な声とそれに対して呆れた様な声が禊の中で拮抗する。そこに第三の声が響く。少年の声どこかで聞いたような声。導く様に声色が鳴る。

『オマエハシッテイルハズダ。ドウスレバイイノカ。ソレニシタガエバイイ。』

第三の声が聞こえてくると不思議とどうすればいいか理解する。

「変身…」

体の全てに火が通っていく。火が全身を包むと熱で炭になってしまうような錯覚を覚える。そして熱の中から熱を追い出す様に涼やかな風と共に花が咲く感覚が体の芯から放たれ、熱が霧散し体を蒲葡

の鎧が包む。
　変身の一連の動作が完了すると聞こえていた声はいずれも聞こえなくなっていた。体の奥から力がみなぎる感覚。身に纏っていたのは先日纏った勇者の装備であった。よく見ると手首のあたりから前回には見られなかった三尺ほどの細い布のようなものが伸びていた。意識するとそれは自在に動くようであった。

「こうしてはいられない」
　自分がどこにいるのかを思い出し先ほど見えた、三体のバーテックスの下へ向かって跳躍することで移動を始める。勇者装備を纏うことにより禊の身体能力は飛躍的に上昇しバッタが行うような跳躍を人間大の規模で再現していた。少しの間跳んでいると遠くに見えていたバーテックスが見えてくる。跳んでいるとすでに変身を終えた三人がいることに気づき近くに着地する。

「小戸？随分と遅かったわね。なんかあった？」
　一人だけ到着の遅れた禊に対して風は安否を問う。聞かれた禊は先ほどの声たちについて言うべきか逡巡する。しかし口は思いとは裏腹に答える。

「随分遠くの場所に出ちゃったみたいです。もう大丈夫です」
　嘘を吐いてしまった。何故かは分からなかったが言ってはいけないような気がした。それだけを聞くと風は深くは問わずバーテックスに向き直り、全員に指示を出す。

「手前の二体から封印の儀に行くわよ！」

「はい！」

　指示に従い三人はバーテックスの方へ飛んで行く。全面に出ていた二体のバーテックス、それぞれスコーピオンとキャンサーに接近す

る。友奈と禊の二人は蠍座のバーテックス、スコーピオン・バーテックスに接近する。巨大な数珠状の尾を振り回し接近する二人を追い払おうとするスコーピオン。友奈は大きく跳ぶことで回避する。しかし大きく飛んだことは悪手であった。

二体のバーテックスとは大きく後方に離れた三体目のバーテックス、射手座のサジタリウス・バーテックスはその口を大きく開くと中から無数のビーム状の矢を射出する。放たれた矢は放射線を描きながら空中にいる無防備な友奈へと殺到する。

「あわわ！」

襲来する無数の矢に対し友奈は拳で撃ち落とすことで対応する。通常の人間であれば撃ち落とせるはずもなく、数も対応しきれるものではなかった。しかし神樹の加護によって強化された身体能力はその無理を可能に変えた。拳で矢を撃ち落とし、間に合わないものは妖精のバリアによって弾いていく。矢の勢いと重力に従い友奈は下へ落ちて行く。

着地するかしないかの瞬間、足元から友奈目掛けてスコーピオンの尾が突き上げる様に友奈を刺す。幸い精霊のバリアがあるため直接的な接触はなかったが友奈は突き上げられながら上昇して行く。

「まずい」

友奈が上へ吹き飛んで行くのを見た禊は慌てて追いかける様にスコーピオンの尾を走って登って行く。横からはそれを妨害する様にサジタリウスの矢が飛来する。飛んでくる矢を精霊のバリアと移動砲台を盾がわりにすることで防ぎながら登って行く。左側を見れば蟹座のバーテックス、キャンサー・バーテックスが自身の三組の反射板を用いてサジタリウスの矢の軌道を変えて風と樹を襲っていた。

「届け！」

右手を伸ばし、さらにそこから新たに装備された手首の布を伸ばす。思った通り布は禊の意思を反映してリボン状に伸びると友奈の胴に巻きつく。布が巻きついたことを確認すると思いっきり布を釣りの要領で引き、身動きの取れない友奈を手元に引っ張る。引き寄せた友奈を抱えると横に構えた移動砲台の砲撃で牽制しながら下へ落

ちて行く。
　着地するとスコーピオンは尾を何度も振り上げては叩きつけ、二人を潰そうとする。もはやゲリラ豪雨の様に飛来するサジタリウスの矢をキャンサーは反射板で操作し、四人の勇者を襲う。四人とも遠距離への手段を持たないため対抗する手段がなく、妖精のバリアによってかろうじて守られ身動きを取れずにいた。精霊のバリアがそこまで耐えられるか、そこに四人の生命はかかっていた。
　勇者とバーテックスの戦いから遠く離れた場所、小高い丘のようになった樹海の上で東郷美森はその様子を見ていた。知り合いの四人が訳の分からない化け物に蹂躙されようとしていた。美森の中にあったのは未知の状況に投げ出された恐怖であった。怖い。恐ろしい。でもそれ以上に悔しかった。大切な自分の友達、友奈が化け物に攻撃され、怪我をしてしまうかもしれない。もしかしたら死んでしまうかもしれない。悔しい。友達を傷つけるバーテックスが許せない。でもそれ以上に何もできずただ見ているだけしかできない自分がもっと許せなかった。足が不自由で見知らぬ土地に引っ越してきた自分を親切に助けてくれた友奈。今度は私が助けるんだ。
「友奈ちゃんをいじめるな！」
　戦う意思が示された。
「今度は私が勇者になって友奈ちゃんを守る！」
　スマートフォンの画面に表示されたボタンに指が触れる。戦う意思に神樹が答え、威光が美森を包む。光が治ると勇者装備が美森を纏っていた。首の後ろのリボン状の装備が地面へと伸び、足の不自由の美森を支える。自然と両腕を前に出す様に構える。精霊が反応すると両手には大型の狙撃銃の様な装備が構えられていた。構える。自然と冷静になれていた。
　引き金を引く、弾丸が当たる。神樹の加護が与えられた銃弾はサジタリウスの表面を削る。不意打ちの様に横っ面を殴られたサジタリウスは矢の供給を止める。
　矢の雨が止めばあとは簡単であった。好機と見た風が手に持った大剣を大きく振りかぶり、バッティングの要領でキャンサーをかっ

飛ばす。友奈もそれに続き、渾身の拳でスコーピオンを殴り飛ばし、吹き飛んだキャンサーにぶつける様にスコーピオンを飛ばす。巨体同士がぶつかり、二体のバーテックスはもつれて後ろへと倒れこむ。

危機を脱した勇者たちの元へ美森が跳躍する。東郷の姿を見つけた樹の喜びを含んだ声。

「東郷先輩！きてくれたんですか？」

「遠くの敵は私が狙撃します」

「東郷…あんたいっしょに戦ってくれるの？」

返事は一度のうなずき。理解した風は安堵の息を漏らす。バーテックスの方へと振り返り、指示を出す。

「手前の二匹から行くわよ！」

「オッケー！」

樹と友奈の声が重なる。禊もうなずき肯定を示す。美森は腹ばいになり先ほど用いた大型狙撃銃を顕現させ、遠くにいるサジタリウスを狙う。再起したサジタリウスは美森を狙い、もう一つの口を開き、先ほどまで放っていた矢の雨とは違い、大型の長いレーザー状の矢を構えて発射した。戦車砲の様な轟音と衝撃波を放ちながら矢が美森の元へ迫る。対して美森は冷静であった。接近する矢に対して正確に狙撃することで対処する。撃ち落とされた矢は空中で爆発する。サジタリウスは何度も矢を放つがその全てが正確無比な狙撃で潰されて行く。

「大人しくしてて」

美森は己の技術を用いてサジタリウスを抑え込んでいた。一方、倒れ込んだキャンサーとスコーピオンの元へときた四人の勇者たち。前回と同様に封印の儀を発動し、二体のバーテックスの動きを封じる。二体のバーテックスはその体の一部を開けられ、中から御霊が現れる。二つの逆四角錐を破壊しようと四人の勇者が動き出す。

まず動いたのは友奈であった。

「私行きます！」

接近し、拳を振るう。しかし御霊は友奈の動きに合わせて動き、その拳を避けて行く。

「あ、あれ？　この御霊絶妙に避けて行くよ！」
　素早い御霊の動きに困惑する友奈の後ろから禊が飛び出す。
「手伝う！合わせて！」
　腰のハードポイントから光刃の柄をつかんで抜き、刃を形成する。踏み込みと切りつけを行う。これに対して御霊は友奈に行ったようにするりと回避する。しかしそこは織り込み済みであった。回避した先でそれまで姿が見えなかった三基の移動砲台が御霊の逃げ場所を無くす様に接近して御霊に衝突する。逃げ場のなくなった御霊を禊は手首の布を伸ばし、御霊全体に巻きつける。御霊自体が丈夫であるからか、それとも樹のワイヤーの様な攻撃力がないためか布は決定打にはならない。
「だからこうだ！」
　禊は体を翻し、布を背負う様なポーズを取ると一本背負いの要領で友奈の方へ向かって御霊を投げる。
「任せて！」
　布によって固定された御霊は身動きを取れず、御霊に向かって跳んだ友奈の拳が御霊に当たりそのまま撃破した。
　一方で風と樹はもう一つの御霊と対峙していた。攻撃されることを悟った御霊は分身の様に見た目の同じ分身を無数に発生させる。
「数が多いなら！」
　増え続ける御霊に対して樹は自身の武器を発動させ、ワイヤーを展開する。展開したワイヤーは広がり、無数に増えた御霊全てを囲み、そのまま一つに纏める。そこに大剣を巨大化させた風が迫る。
「面の攻撃なら！」
　ワイヤーに捕まり切り刻まれまいと抵抗する御霊を力ずくで叩き潰して破壊する。破壊されたそれぞれの御霊に連動する様に二体のバーテックスはその体を砂に変えて崩壊して行く。
「あと一つ！」
　二体のバーテックスが砂になるのを確認した美森は風へ向けて通信を発した。風はスマートフォンを取り出し耳に当てる。
「風先輩。部室では言い過ぎました。ごめんなさい」

「東郷…あんた」
　美森も理解していた。神樹のお役目を果たすための勇者部であったっとしても。勇者部を作った風には悪意などはなかったことを。ただ運悪く勇者部のみんなが選ばれてしまったのだと。だからこそ自分のできることを精一杯行う。それが自分の意思を示す方法であろうから。
「精一杯援護させていただきます」

　そんな美森の心境は風にも伝わった。
「心強いわ、東郷。私の方こそ…」
　言い終えるのと当時に美森は狙撃を開始した。その規模はもはや狙撃というよりも砲撃に近いものであり、先ほどまでサジタリウスのいた場所にすでに死に体のバーテックスがいただけであった。その怒涛の攻撃に思わず風は閉口する。勇者部で最も怒らせてはいけない人物が決まった瞬間だった。
「えっと…本当にごめんなさい。はい」
　怒号の狙撃を受けたサジタリウスは無事でなく、最早形を保っているのも限界の様子であった。足元には美森の封印の儀が発動され、サジタリウスはその御霊を吐き出した。最後の抵抗だろうか吐き出された御霊は高速で動き回り、攻撃を避けようとする。目では最早追いかけられぬほど加速する。
「この御霊早い！」
　しかしいかに早く移動しようとも無意味であった。一拍をおいて弾丸が飛来、御霊の中心を正確に撃ち抜く。正確な射撃に勇者部の面々は驚く。御霊を破壊されたサジタリウスもまた他の二体の様に砂へと還った。
「　状況終了。　みんな無事でよかった」
　全てのバーテックスが倒され、神樹による樹海化が解除され世界が光に包まれる。光が明けると全員学校の屋上にいた。美森がそばにいることに気づいた友奈は彼女の方へ駆け寄る。
「かっこよかったなー東郷さん。私ドキっとしちゃったよー」

「友奈ちゃん…」
　お互いの無事を確かめ合う様に友奈は美森に抱きつく。そんな友奈の行動に美森は困った様な嬉しい様な表情を作る。そんな二人に風は話しかける。
「でも本当に助かった。東郷。それで…」
「覚悟はできました。私も勇者として頑張ります」
「ありがとう。うん。一緒に国防に励もう！」
　嬉しそうな面々。そんな彼女らを禊は見つめていた。どうやら丸く収まったらしい。　嬉しそうな彼女らに自身も嬉しく感じる禊。会話がひと段落し、風は禊の方へと向き直った。
「小戸。あんたもありがとう。あんたがいなかったら危ない所が沢山あった。これからも力を貸してくれる？」
　「うん。きっとまだまだ大変だろうし、こちらこそ力を貸して欲しい」
　一度勇者に選ばれてしまった以上、最後までやり通すべきだろう。やめてしまえば多くの人々が大変な目にあってしまうこともある。それ以上に園子からのお願いを守りたいのもあった。
「なら決まりね」
　そういう風の顔は綻んでいた。そして何かを思い出し手を叩く。
「なら昨日渡した入部届けを書いてもらわないとね」
　入部届という単語に禊はポケットに入っていた物を思い出した。ポケットに入れた四つ折りにしたプリントを取り出す。開くとそれは昨日貰った入部届けであった。必要事項には全て記入がなされていたが結局出すかを悩んでいた。それまでとは違うコミュニティに入ることに禊は躊躇していた。俯く禊を見て風はその手に持った入部届が目に入った。
「あれ？なんだ、もう書いてたのね。それ貰っていい？」
　禊が入部届を書いてくれていたことに笑う風。
「あっ！小戸くんも勇者部に入ってくれるんだね！」
　風と禊のやりとりを見ていた勇者部の面々は歓迎の空気を作っていた。一緒にお役目を果たす禊に対して仲間意識が生まれていた。

ただ禊にとって自分がそこにいていいのか、迷惑になるのではと考えてしまう。
「これからよろしくね！」
元気よく差し出される友奈の右手。朗らかな笑顔。そんな様子が何となく、似ていないはずの園子を連想させた。見惚れる。気づけば禊は促されるまま握手を返していた。
「こちらこそ。よろしくお願いします」
自然と口が動く。ためらってしまう気持ち以上に口は素直であった。
「よし。今日は小戸の歓迎を兼ねてうどんひっかけに行くわよ！」
「その前に授業ですよ風先輩」
「あっ！　宿題まだ終わってないよ。アプリのテキストばっかり読んでたから」
「もう友奈ちゃんまで。そこまでは守れないわ」
「そんな～」
戦いが終わり一時の平和な日常が帰ってきた。その後なんとかいなくなったことをごまかしながら授業に戻り、放課後に勇者部一行と禊は風いきつけのうどん屋に向かい食事を共にした。
食事を終えてそれぞれが帰路に立つ。自宅に着き、身支度を終えて禊は布団の中に入る。布団に入るとあっさりと眠りにつく。バーテックスとの戦い、そして勇者部の歓迎会。その両方が禊にとっては一大事であった。微睡み、水の中に沈む様な眠り独特の感覚の中、禊は思う。
あぁ。きっとこれから楽しくなるのだろう。
『ユメノナカデシカツナガレントハ。ズイブントヨワッテイルノダナ』
夢の中で目がさめる。目の前には人型のもや。聞こえる声は少年の声。どうやら非日常はまだ終わっていなかったらしい。

第三話　名も明かさぬ君

　底も見えない水の中。頭上は陽のあたる水面で足元は深い水底。いつも見る一人でいた夢の中。今は誰かがいた。足場などない水の中、二人は向き合って立っていた。禊の眼前には黒い靄が立つ。靄は人型のようだが顔は見えず、輪郭だけがぼんやりと認識される。
「ヨオ。ヤットアエタナ」
　眼前の靄に禊は呆然とする。靄は樹海で聞いた少年の声であった。己の夢の中で見知らぬ存在に触れることは誰もが経験のないことだろう。目の前の以上に対して呆然とする禊に対して靄は実に軽い態度で接する。
「君は一体？」
　禊の中を満たすのは困惑であった。見知らぬ存在が気軽に接してくること自体が未知への恐怖を呼び込む。未知のものに警戒する禊の様子を見て靄は笑う。
「アー、ソウカ。ヤッパツナガリガウスインダナ？　ショウガナイナ」
　靄は軽い足取りで禊に近づき手に手を合わせるように触れる。触れ合う手を軸に二人は鏡合わせになる。触れる手から禊は己から力が抜け体が軽くなるような感覚を覚える。脱力と反比例するように目の前の未知から靄が晴れて行く。ぼんやりとした靄が晴れていき、禊の顔は驚愕に染まる。
「これなら見やすいだろう」
　完全に靄が晴れた時、禊の目の前には禊がいた。禊に触れていた靄は姿を変え、鏡のように禊が立って、はっきりとしない声も明確なものへと成った。自身の顔が目の前にあることに禊が驚愕の表情をする一方で、靄だったものはいたずらが成功した悪童の顔に口角を上げていた。
「君は何？　どうして僕と同じ顔をしているの？」
「同じ顔をしてるのはお前に合わせたからだよ。　俺が何だっていうのは難しい問題だな。　お前は自分をなんだと思ってるんだ？」
　質問をしたはずが逆に質問で返され禊はたじろぐ。

「ぼ、僕？　僕は小戸禊……」
　それ以上繋がらない。記憶喪失である禊にとって自身を定義できる方法は限られたものであった。それ故、突然の質問に答えられる言葉はなかった。
「な？　自分なんて自分で説明できないだろう？　まあお前の場合記憶喪失のせいで余計に言いにくいだろうけどな」
　自身の声で言われた言葉は禊にとって衝撃であった。二年間探し続けた記憶を失う前の自分。一切の手がかりのなかったそれがいとも簡単に言及された。今までなかった手がかりに禊は動揺する。
「記憶をなくす前の僕を知っているの？　何か知っているのなら教えてほしい！」
「いや？　知らないが？」
　あっけんからんと偽の禊は答えた。表情から読み取れる。嘘をついている。話す気は無いと態度が語っていた。
「だいたい、どうして俺が答えなくてはならないんだ？　そんな義理もないだろう」
「知りたいんだ。自分が誰なのか。分からないままなのは嫌なんだ」
　話す気は無いという偽禊に対して禊は食い下がる。そんな禊の様子に辟易だと言わんばかりに偽禊がうんざりだと表情で語る。
「まあ、なんだ。俺に聞くより自分で見つけろよって話だ。　じゃあ寝な。夜更かしはお肌の大敵らしいぞ」
　話を切り上げると偽禊は手のひらを虫を払うように下ろす。それに連動するように同じ位置にいた禊は抵抗できず、水底に向かうように沈んで行く。
「待って！　まだ話は終わってない！」
　しかし、いかに抵抗しようにも体の自由は利かず、禊は偽禊を見上げるように沈んで行く。手を伸ばすが無意味に終わる。見上げた偽禊は手を振る。沈んでいき、周囲が暗くなっていくとそれに比例するように意識がまどろんでいく。
　誰もいなくなった水の中。沈んでいった禊を見送りながら偽禊は笑う。

「まあ？　俺が答えちまったら賭けにならないからな。頑張って結論を出してくれや、片割れ」
　眼が覚める。周囲は寝る前と同じ状況。先ほどまでは夢であったようだ。夢にしてはたちの悪い夢であった。不思議と現実感があり、感じた感覚が本物であったように感じる。服は濡れてはいなかったが息苦しさはあった。両の手を握り、放す。何度か繰り返し、自分がここにいることを確かめる。目覚まし時計を見ればいつも通りの眼が覚める時間であった。外を見れば明るくなって、種類の分からない小鳥たちが囀っていた。１度目をつぶりなんとか同じ夢を見ようと試みる。しかし
「あぁ。行かなくちゃ」
　時間を見ていつも通りの準備を始める。着替え、朝食を食べ、登校するため外に出る。見た夢に引っかかりを感じ続けるができることもなく、いつも通りの一日を続ける。
　授業が終わり、帰りの用意をする。昨日から勇者部に入った訳であるが考えてみればどこで活動を行なっているかなど聞いていなかった。困ったと思いながらカバンを持ち上げると教室の後ろ側の扉が開く。
「小戸禊はいるかー！」
　元気よく、若干芝居のかかった言い回しで犬吠埼風が現れる。風は禊を見つけるとニヤリと口角を上げる。突然の風に禊は思考が停止する。
「おっ！　いたいた。勇者部行くわよ！」
　サムズアップ。思わず禊もサムズアップで答える。風について教室を出る。振り返ると丸山が笑うのを我慢した顔で手を振っていた。
　風に連れられて二人は家庭科準備室に向かう。廊下に付けられた表札には家庭科準備室と書かれており、その下には同様に勇者部部室と明記されていた。入室すると禊と風を除く勇者部の三人が待ち構えていた。
「あっ！　二人とも来た。待ってたよー」

「二人とも待っていたわ。　さあこのぼた餅をどうぞ」
「待たせてごめんなさい。よく考えたら部室の場所とか知らなかったよ」
　机の上にぼた餅が二人分置かれる。とりあえず手に取り食べてみる。すっきりとした甘さに優しい後味が口の中に広がる。
「これすごく美味しいね。こんなに美味しいぼた餅は初めて食べたよ」
「まだいっぱいあるから好きなだけ食べてちょうだい」
「東郷さんのお菓子は世界一だからね！」
　カバンの中からタッパーを取り出し、中にはこれでもかとぼた餅が綺麗に並べられていた。出されたぼた餅咀嚼しつつ、禊は先程から黙ったままであった樹と眼が合う。
「えっと…、一つ？」
「は、はい。いただきます」
　ぼた餅を渡し、樹はそれを食べる。会話が続かない。どうやらお互いに会話の切り出しを失っているようで、これではいけないと禊は切り出す。
「えっと、小戸禊です」
「いっ、犬吠埼樹です」
　会話が終わる。樹は人見知りゆえに、禊は口下手ゆえに。会話が続かず嫌な汗が背筋を伝いはじめる。
「趣味はテレビを見ることです！」
「趣味は占いです！」
　元気の良い自己紹介が連鎖して沈黙が戻る。二人を見かねた美森が口を挟む。
「二人ともまるでお見合い見たいね」
　そんな美森の発言に聞き捨てならないと風が反応する。
「ちょっと？　うちの可愛い妹を嫁に欲しいなら、まずは私に話を通してもらわないと」
「でも風先輩から絶対許可出なさそうだよ？」
「友奈ちゃん。それは言わないお約束よ」

美森のちょっとした冗談で会話の流れがおかしな方へと流れていっている。どうしたら良いかと禊があたふたしていると意外にも声をあげたのは樹であった。
「もう、お姉ちゃん！　小戸先輩が困ってるよ」
「うう。うちの妹が嫁に行ってしまう。　よよよ～」
風は真面目なのかふざけているのか分からない泣きを始める。周囲はそれを無視して会話を続ける。
「なんだかすまない、犬吠埼さん。僕が口下手なばっかりに」
「いえ、いいんです。お姉ちゃん私に過保護だから…。あっ！小戸先輩。お姉ちゃんと紛らわしいから私のことは樹って呼んでください！」
「えっと…樹さんでいいのかな？」
「はい！」
「これからよろしくね？」
「こちらこそよろしくお願いします！」
風の犠牲こそあったものの上手いこと着地した会話。区切りがいいと見た風が復活し勢いよく立ち上がった。
「よし！　色々言いたいことはあるけど、とりあえず打ち解けて来たところで今日の勇者部の活動行くわよ！」
言い終えると風は横の机に置いてあったゴミばさみとゴミ袋を一人一組ずつ渡して行く。
「それじゃあみんな一つずつ持ったわね？　今日は通学路のゴミ拾いよ」
「ゴミ拾い？　勇者部は普段何をやっているの？」
勇者部という部活の名前だけでは実際には何を行なっているのか予想できず禊は疑問を口にする。
「勇者部はみんなのためになる事を勇んでやる部活だよ」
「具体的に言うと勇者部に来た依頼をやっていくわ。具体的には地域のお手伝いや部活の助っ人とか。毎回やる事は違う事が多いわ」
禊の質問に友奈が答え、美森がそれを補足する。
「へー。そんな事をしてるんだね」

ボランティア活動を積極的に行う勇者部の彼女らを素直にすごいと思う禊。思わずほおけた声がもれる。
「今日からはあんたも勇者部の一員なんだから、がんばりなさい！」
「了解です」
会話が一段落し、勇者部一行は通学路に向かい、学校の正面門の前に全員が集合した。
「それじゃあ、通学路のゴミ拾い始めるわよ。勇者部ファイトー！」
「ファイトー！」
「ふぁっ、ファイトー！」
風の掛け声に禊以外の三人は揃えて声を上げる。若干遅れて禊もそれに続く。掛け声を終えた勇者部通学路を逆走しながら道路に落ちたゴミを拾い、ゴミ袋へ納めて行く。
「しかし、こうしてみると意外と通学路にゴミが落ちているものだね」
「普段から使う通学路だし、やっぱり綺麗な方が気持ちいいよね」
「そうだね。こうして自分の手で綺麗にして行くのは気持ちがいい」
初めて行うボランティア活動に充実感を感じる禊。ゴミ拾いを続けて高かった日が落ち辺りは少し暗くなり始める。ゴミ拾いを続けていた風が声をかける。
「暗くなって来たし、今日はこの辺りで切り上げましょうか」
「はーい。　結城友奈ゴミ捨てに行って来まーす」
「禊、あんたも半分持っていって」
「任された」
友奈と禊は全員分の膨らんだゴミ袋を両手に持って校舎裏のゴミ置場に向かう。ゴミ置場に向かう中、友奈は禊に笑って振り返る。
「今日は初めての勇者部だったけど、どうだった？」
「うん。大変だったけどいいことしたって感じかな」
「そうだよね！みんなのためにできることをやってると嬉しいよね。これからもみんなで頑張っていこう！」
その後二人はゴミをゴミ置場に置き、部室へと帰還する。入ると皆が待っていた。全員がいる事を確認して風が
「よし、二人とも帰って来たわね。じゃあ今日はここまで。解散にす

るわ」
「みんなお疲れー」
「お疲れ様でした」
　口々にお互いの疲労を労わり合う。それぞれ自身のカバンを持ち、それぞれが帰路にたつ。デイサービスの送迎車に乗る美森と友奈を見送り、犬吠埼姉妹と別れ、禊は帰ろうとする。そこで禊は時間的にまだ園子のところへ寄る時間があることに気づく。気がつけば行動は早く、自転車に乗り、スピードを上げる。
　自転車を飛ばす。道路が空いている事もあり、三十分ほどで園子のいる病院に到着する。時計を確認すると面会時間までまだ三十分ほど余裕があった。階段を上がり、見慣れた通路、見慣れた扉まで行くと禊はその扉を開いた。もう見慣れた物々しい病室に入る。大量に貼られたお札や鳥居を無視して進むと園子が禊に気がつく。
「あっ！　みーちゃん来てくれたんだ～。今日は来ないと思ってたよ～」
　あいも変わらずのんびりした調子の声で園子は顔を綻ばせる。
「今日は勇者部があって来られないと思ってたんだけど、時間があったから来たんだ」
「わーい。そっか～、みーちゃん勇者部に入ったんだったね。どんな事したの？」
「今日は通学路のゴミ拾い。初めてやったけど結構楽しかったよ」
「そっか～、みんなでゴミ拾いか～。みんなでやったら楽しいんだろうな～」
　自分も勇者部の活動に参加している光景を想像しているのか楽しげに瞳を喜色に染める。しかし包帯だらけの自身が目に入り、自身の状況を思い出したのか視線を下げる。そんな園子の表情に禊は慌てる。
「大丈夫だよ！　体が良くなったら園子もきっと…。みんないい人ばかりだから、園子もきっと勇者部を気に入るよ」
　慌てる禊の様子が面白かったのか気落ちしていた園子はころころと笑う。

「そうだよね。体が良くなったらきっとね…。わっしーにも会いたいし、早く体直さないとね」
「その調子だよ」
目標ができたためか園子にはまたいつもの楽しげな様子に戻り、禊もつられて笑う。他愛のない映画の話や、禊の学校での出来事など世話話が続く。
しばらく話続けていると禊の腕時計が七時を知らせる電子音が鳴る。もう少し話していたい気持ちもあったが面会時間や夕食を運んで来た看護師と目が合い、禊は帰る準備を始める。
「もうこんな時間か…。じゃあ帰るよ」
「うん。久しぶりにこんなに長く人と話せて楽しかったよ～。また来てね、みーちゃん」
「もちろん。また来るよ」
やってきた看護師と会釈しながら禊は病室を後にする。帰り道の途中にスーパーに寄り、夕食の食材を購入し、マンションの部屋へ帰る。
こうして小戸禊の日常は進んで行く。未だ残るバーテックスの存在を脳裏に残しながら禊園子の体が治って勇者部の楽しい日々が続いていけば良いなと思っていた。
少なくとも今は。

第四話　触れ合った君

僕が勇者部に入部して一ヶ月がたった。新しい勇者部での日常はそれまでなかった生活の一幕を僕に与えた。学校と園子の病院を巡回する日々に平日の放課後の何日かは勇者部での活動が加わった。特筆して得意のない僕は写真を撮る記録係の地位に落ち着いた。勇者部の活動は多岐に渡る。部活の助っ人、子猫の里親探し、子供会のお手伝いなど様々だ。しかしその多岐に渡る活動の他にもう一つ、勇者部には重要な活動があるそれが神樹様のお役目。人類を滅ぼすべくやってくるバーテックスを倒す勇者としての仕事。そんなお役目が一ヶ月の間を挟んで再びやって来た。

「というわけで僕らは樹海化した四国にやってきています」

「なにそのリポーター風のナレーション？」

「いえ部長、こういう時は言っておかないと思って」

一ヶ月ぶりの樹海化の中勇者部一同はそれぞれの勇者の戦装束を身に纏い、やってくるバーテックスに備えていた。

「久々の戦いだから忘れてないかな？」

「友奈さん、これです。これ」

友奈と樹の二人はスマートフォンの説明画面を二人で覗き込み、そんな二人を見た風が緊張感の無さを脱却しようと叫ぶ。

「成せば大抵なんとかなる！ビシッと決めるわよ！」

「狙撃体制入ります」

大声の風に対して淡々と落ち着いた様子の美森は少し離れた高いところに自身の体を固定して狙撃銃を構える。こんな状況でも普段通りの様子である勇者部に安心感を覚えつつ禊は前を見る。少し離れた地点、五体目のバーテックス、牡羊座のカプリコーン・バーテックスがその姿をゆっくりと表す。最近加速器としての使い方を思いついた固定砲台を用いて禊は飛び出す。

「小戸禊、鉄砲玉いきまーす」

今回の戦いから固定砲台に追加された装甲がジェット噴射のように炎を吹き出し、禊は一気に高速に移行する。カプリコーンまで数

十メートルというところで嫌な予感がして急停止する。頭上を見上げると三本の日本刀がカプリコーンの頭部めがけて飛び、そのまま突き刺さる。突き刺さった日本刀はそのまま爆発し、衝撃で禊は後ろへ転がっていく。
「ちょっと！　禊大丈夫？　今のは東郷？」
「いえ、私じゃないです」
　正体不明の攻撃の出所を探す風と美森。友奈と樹の二人は転がってきた禊を回収する。
「いてて、今のは何？」
「ふっ！　ちょろい！」
　爆発の衝撃に飛ばされ混乱する禊をよそに謎の声が上から全員の耳に入る。
「え？　誰あれ？」
「新しい勇者⁉？」
　混乱する犬吠埼姉妹の声をよそに赤い装束の戦装束をはためかせて謎の勇者は己の武器を振るう。次々と新しい日本刀を出現させてはそれを適切に投げてカプリコーンにダメージを与え、瞬く間に封印の儀まで実行する。急なことに固まる禊たちを尻目に謎の少女は封印の儀を終えて御霊を吐き出させる。
「思い知れ！　私の力！」
　吐き出された御霊は最後のあがきに毒ガスのようなものを吹き出し、周囲の視界を封じる。幸い、精霊のバリアによって勇者部はダメージを受けることはなかったが視界は完全に封じられていた。しかしそんな状況に臆することなく赤の少女は前へ出る。
「そんな目くらまし…。気配で見えてんのよ！」
　視界の封じられた中、少女は正確に御霊の位置を探り当てて一刀のもと両断する。
「殲…滅…」
　御霊を二つにされたカプリコーンはなすすべもなく、そのまま砂へと帰った。五体目のバーテックスを一気呵成に討伐した少女は振り返ると勇者部の面々の方へと振り返り、してやったりな顔のまま切

り出した。
「揃いも揃ってボーッとした顔してんのね。あんた達が神樹様に選ばれた勇者ですって？」
「あの…？」
「何よちんちくりん？」
「ちんちく…！」
　ちんちくりんと呼ばれ、友奈はショックを受けて固まる。一方で禊はぶつけた頭を気にしていた。
「いてて、あー、なんか腫れてる？」
「あっ！　禊先輩。頭の後ろちょっと膨らんでます。帰ったら湿布貼ります？」
「うーん、氷水の方がいいかなこれ」
「じゃあ、そうしましょう。保健室から氷もらってきますね」
　ぶつけた頭を気にする禊の後頭頭を見る樹。見れば後頭部が膨らみ始めていた。そんな二人を傍目に少女は自己紹介を始めた。
「私は三好夏凛。大赦から派遣された完成型勇者よ」
「完成型　？」
　聞きなれない枕詞に夏凛以外の全員が首をかしげる。そんな皆の様子を気にせず夏凛は続ける。
「つまりあなた達は用済みってことよ。お疲れ様でしたー」
「…はい？」
「えぇー⁉？」
　突如現れた自称完成型勇者の夏凛の放った突然の爆弾発言に勇者部の声が驚きで重なる。後に残ったのは驚きで呆然とする勇者部、後頭部を手で冷やす禊、そして得意顔の夏凛出会った。
　翌日、三好夏凛は讃州中学へと編入した。
「友奈と東郷と同じクラスだって」
「僕だけクラスが違うので寂しさを覚えます」
　翌日の放課後、勇者部一同は部室の黒板の前へと集合していた
「編入生のフリなんてめんどくさい。でもわたしが来たからには安心ね」

「友奈さんが言うには編入のテストも満点だったとか」
「ほうほう。それはすごい」
「そうよ、すごいのよ。完成型勇者が来たからには完全勝利よ」
　出されたブドウジュースを飲みながら転入して来た花凛の話を聞く。聞けば彼女の勇者システムは勇者部の実戦データを基に改良の加えられた特別性であり、援軍として大赦から派遣された勇者であるそうだ。
「それで夏凛ちゃん、ようこそ勇者部へ！」
「いきなり下の名前⁉？　ていうか誰が勇者部に？　部員になるなんて一言も話してないじゃない」
「あれ？　夏凛ちゃん、もう勇者部に来ないの？」
「また来るわよ。監視のお役目があるからね」
「それなら部員になった方が話が早いよね」
　なんだか気の抜ける二人の問答を眺める。黙って見ているのも飽きて来たのか風が口を開く。
「監視、監視ってまるで私たちがサボるみたいじゃない」
「トーシロが大きな顔すんじゃないわよ。いい？　大赦のお役目ってのはおままごとじゃ…ってあんた何してんのよー⁉？」
　風の文句に対する花凛の得意げなご高説が中断される。自身の精霊である義輝が頭丸ごと友奈の精霊である牛鬼にぱっくり美味しくいただかれていたからである。慌てて義輝のまだ食われていない部分を掴み、牛鬼から引き離す。
「なんてことしてくれるのよ。この腐れ畜生！」
「外道じゃないよ、牛鬼だよ。ちょっと食いしん坊なんだよねー」
「お腹すいたの牛鬼？　よかったらタコス食べる？」
　牛鬼を外道と呼ばれ、心外であると友奈が牛鬼にビーフジャーキーを与えながら抗議する。
　合わせてポンチョを着込んだ禊はカバンの中からタッパーに入ったタコスを一つ取り出し、牛鬼に食すか問う。目の前に差し出されたタコスの匂いを少し嗅ぐとそのまま牛鬼は元気よくタコスを食べ始めた。

「自分の精霊の躾けもなっていないなんてやっぱりトーシローね！ていうか誰も聞かないからスルーしたけど小戸、あんたのその格好は何⁉？」
「あぁ、これかい？　これは遠い海の向こう側にあるメキシコって国の伝統衣装のポンチョって言って…」
「そんなことを聞いてんじゃないわよ！　どうしてそんな格好をしているのかって聞いてるのよ」
「え？　だって今日は君の歓迎会をするって風部長から聞いたから」
「なんであんた達はどいつもこいつもわたしが入部するって前提で話が進んでるのよー！」
　部室に響く夏凜の絶叫。特に気にせず樹が気になったことを禊に聞く。
「禊先輩そんなのどこで売ってるんですか？」
「あぁこれ？　イネスってところで売ってたんだよ。　そのうち新入部員が来た時に使おうって思って。日の目を見れて嬉しいよ」
「そのマラカスは何ですか？　見たところ降ってもならないみたいですけど」
「これかい？　これもすごいんだよ」
　ウキウキした様子で禊は腰につけたマラカスを軽く振る。本来であれば中の小豆などが擦れてマラカス独特の音を鳴らすはずであったが聞こえて来たのは水が揺れるあの音であった。思っていたのとは違う音が聞こえ、首をかしげる樹と風をにこやかな表情で見ながら禊はマラカスの手元を捻る。するとマラカスが半分に割れ、中からうどんと汁が姿を現わす。すかさずどこからか取り出したどんぶりでそれをキャッチする。
「どうぞ。出来立てです」
「どう見たって作り置きじゃない！　てか何そのマラカス！」
「樹ちゃんの入部の時に東郷さんがマジックを披露したって聞いたから一発芸をだね…。あっ！うどん早く食べないと伸びちゃうよ？」
「いらないわよ…」
「じゃあ私が食べちゃうわね」

せっかく用意した一発芸も夏凜から不評のようで禊はしょんぼりする。うどんは風が責任を持っていただきました。味は「まあまあね。かめやのうどんには負けるわ」とのこと。
「そうだ夏凜ちゃん！　これから一緒にうどん屋さん行かない？」
「必要ない。行かないわよ」
そのまま夏凜は部室を後にする。後に残されたのは夏凜の出て言った扉を見る勇者部と禊のうどんを食べる風であった。
場所は変わってかめや。讃州中学からそれほど離れていないうどん屋さんに全員いた。晩御飯のうどんを食しながら話題の中心は大赦から来た勇者夏凜であった。
「こんなに美味しんだからくればいいのに」
「頑なな人でしたね」
「フッフッフ。あーいう頑ななタイプの方が張り合いがあるってもんよ」
「張り合うの？　お姉ちゃん？」
新たなメンバーの参加に不敵に笑う風。
「おかしい。絶対面白いと思ったんだけどなー」
「ちょっと厳しいと思います」
ソンブレロを膝に置き、何がいけなかったかを考えていた禊に樹の冷静なダメ出しが刺さる。
「どうやったら仲良くなれるのかな？」
友奈のそんなつぶやきも店の喧騒にかき消されて食事は進んでいく。全員が食べ終わり、それぞれが帰路につく。もういい時間なため、禊は明日の朝食と夕飯などの食材を買うためにスーパーに寄り、外に出ると見事に夕焼けの眩しい時間であった。時間短縮のため、普段は通らない海岸線の道を自転車で走る。しばらく走っていると砂浜で見知った人物が目に入る。
「あれ？　三好？　こんなところで何してるんだい？」
自転車を止め、話しかけるととても面倒くさそうな顔が禊に向く。
「小戸？　あんたこそこんなところで何してんのよ？」

「僕かい？　買い物帰りさ」
　禊はスーパーで購入した買い物袋を自転車の荷物カゴから引っ張り上げ見せる。
「男のあんたが料理？　そんなめんどくさいことよくやれるわね」
「慣れてくると意外と楽しいものだよ。体が不自由な友達がいてね。いつか退院したらご馳走するって約束したから、それまで修行さ。東郷さんとか風部長には負けるけどね」
「ふーん。まあわたしには関係ないわ。こうして勇者として鍛錬を積み重ねる方がもっと大事だもの」
「それでこんな時間まで？　大変だね」
「もう帰るところよ」
　そういうと夏凜は自身の自転車に乗り走り出す。禊もそれに追随するように走り出す。
「まだなんか用？　付いてくるなんて」
「いや？　僕も帰り道こっちだから」
　会話を短く切り上げ、二人は夕焼けの道を進んでいく。しばらくして二人は同じマンションの駐輪場に自転車を止めていた。そのまま一緒にエントランスに入り、一緒にエレベーターに乗る。同じ階で降りて廊下を進んでいく。
「本当にどこまで一緒についてくるのよ！」
　これまで黙っていた夏凜がついにしびれを切らして叫ぶ。叫ばれた禊は先に歩いていたため振り返る。
「いや、僕の部屋がここなんだけど」
　そう言って禊は一室の扉を指差す。二人の間には扉と扉の間の壁一つ分の空間が空いていた。言い換えればお隣さんであった。
「あー最近引越しのトラックが前に来てたけど君だったのか。　あっ！　少し待ってて！」
　何かを思い出し急いで禊は自分の部屋にもどる。中でがたがたと物音がなり、しばらくすると慌てて禊が戻ってくる。腕の中には大きめの箱を抱えていた。
「これ引越しうどん。よかったら食べるといいよ」

「あんたね、引越し祝いって普通引っ越して来た側が贈るものよ。大体わたし料理しないからもらっても腐らせるだけだからいらないわ」
「あーそっか、逆だったかーって三好料理しないって晩御飯はこれからどうするんだい？」
　間違えた贈り物をしてしまったことを指摘され禊は恥ずかしそうに頭をかくがそれ以上に料理をしないという夏凜の発言に驚きの声を上げる。
「いいのよ。これからコンビニ弁当買って来るから」
「一人暮らしの中学生がコンビニ弁当⁉？　青少年の何かが危ない！　ちょっと上がって行きなよ」
「ちょっ！　待ちなさいよ！」
　夏凜の腕を引っ張り、禊は自身の部屋に上げる。リビングにまで案内すると椅子に座らせ、先ほど持っていた引越しうどんの箱を開けて調理を開始する。
　連れ込まれるような形になってしまったが禊が料理に夢中になっているのを見てしまい、何をしていいか分からず夏凜は部屋の中を眺める。部屋の中は物が少なく、まるでモデルルームのようであった。しかし殺風景な部屋の中机の上に置かれた折り紙と折り紙教本が色が浮き立つように自己主張していた。
「小戸。あんた折り紙なんて趣味あるの？」
　料理をしていた禊は手元から目を離さず答える。
「それは来週の幼稚園の時ためのやつだよ。多分男の子たちのドッチボールの的になりそうだけど一応折り紙も練習してるんだよ」
「あんた達勇者部って変なことやってんのね」
「そうかい？　やってみると案外楽しいよ。人のためになる事を勇んでやる。結構な事じゃないか」
「あっそう」
　再び二人の間に沈黙が降りる。十分ほど経つとうどんが一人分出来上がる。黙って座っていた夏凜の前に出来立てのうどんが出される。
「どうぞ」

「…いただきます」
今日初めて会う人に何故自分が料理をご馳走になっているのか大いに疑問であったがせっかく作ってもらった好意を無為にはできず、夏凜は差し出されたうどんを食べ始める。
「…美味しい」
「でしょう？」
「ちょっ調子に乗らないで！　まあまあよ。まあまあ」
「そうかい。　まあ実際東郷さんや風部長の方が美味しいとは思うよ」
自分を卑下するような言い方ではあったが禊は実ににこやかであった。キツイ口調にも笑って流す禊の態度に夏凜はどうしていいか分からずただ黙ってうどんを平らげる。
「…ごちそうさまでした」
「おそまつさまでした。あぁ、どんぶりはそのままでいいよ」
カリンは荷物を背負い部屋を出る。玄関で靴を履き、扉に手をかける。半分ほど開き、振り返る。振り返った顔は照れによるものかほんのりと朱に染まっていた。
「…ありがと」
ボソリと言う小さな声であったが禊にはしっかりの届いていた。今日一日で彼女の不器用な性格を認識し始めていた禊は少し面白くなって吹き出す。
「なっ何笑ってるのよ！」
「いやちょっと面白かった。また来てよ。いつでも料理くらい出すからさ。コンビニ弁当なんて味気ないだろう？」
人の好意になれないのかまた夏凜は難しい顔をする。少し悩んで今日のようにまた勝手に作られるのかと思い。諦めのような気持ちと嬉しく思う気持ちが心の中で相反する。そして自分が嬉しく思ってしまった事がなんだか恥ずかしくなって思わず声が大きくなる。
「まあ？　気が向いたらまた来てあげるわよ！」
部屋に戻り、買っておいた煮干しの袋を開けてかじる。食べ慣れ

た煮干しの味が口の中で広がる。
「何なのよアイツ。今日あったばっかりのやつにわざわざ料理作ったり。勇者部のやつらもそうよ。へらへらして緊張感のない奴ら」
口では色々と言うが口元はニヤケていた。ただ一つ思い出し、スマートフォンを取り出し、大赦から送られて来たメールを開く。
Ｆｒｏｍ　大赦
三好夏凜、あなたの任務は勇者達の監視とお役目が滞りなく遂行されるように監督する事です。また監視の際、小戸禊については特に細心の注意を払い、もし些細な変化があるようであれば即時報告なさい。
「大赦にこんなにまで言われるなんてあんた何したのよ」

第五話　輪に加わった君

「というわけで、あんた達あんまりにも呑気だから情報交換と共有よ！」

　あくる日の放課後、勇者部の面々は部室に集合していた。黒板の前の夏凛は黒板に書かれたバーテックスの現れる周期の表を叩いた。夏凛を除く五人は椅子に座り、美森の用意したぼた餅を食していた。禊と風の皿にはそこに昨日禊が作ったのと同じようなタコスが加えられていた。

「何がというわけなの？」

「あんた達を見てて、あんまりにも緊張感がないから私がビシって言ってやろうってことよ」

　突如始まった夏凛主催による説明会とそのセリフに疑問符を頭につけた勇者部を代表して禊が問う。それに対して夏凛はイラついたように煮干しを食みながら答える。部室の一角には煮干し特有の匂いが漂っていた。

「なんで煮干し？」

「知らないの？　煮干しはね完全食よ。ビタミン、ミネラルが豊富で……」

「あーごめんごめん。続けて」

　これまた突如始まった煮干しのプレゼンテーションに風は新種の地雷を踏んだ事を察した。気持ちよく煮干しについて語っていた夏凛は本来の趣旨から離れている事を思い出し、咳払いする

「フン！　話を戻すわ。いい？　本来バーテックスの襲来は周期的なものなの。それがこの一ヶ月間で完全に乱れているのはあんた達にも分かるわね？今後も相当の混戦が予想されるわ」

「確かに。一ヶ月前も複数体が一気に現れましたし」

「私ならどんな事態でも対処できるけどあなた達は気をつけなさい。命を落とすわよ。それともう一つ。勇者は戦闘経験値を重ねる事でレベルが上がって強くなる。それを満開と呼ぶわ」

「そうなんだ！」

「アプリの説明にも書いてあるわ友奈ちゃん」
「そうなんだ！」
　気の抜ける友奈と美森のやりとりにこの勇者部の空気を改めて見せつけられる夏凛。
「三好さん、質問いいかな？」
「小戸？　何？　言ってみなさい」
「その満開っていうのは具体的にどうなるんだい？」
　レベルアップという単語だけでは具体的にどのようなものか想像つかず、禊は質問する。自分が戦う度に追加される武装が満開によってもたらされているのだろうかと予想する。
「満開がどんなのかは私も知らないわ。まだ満開した事ないから……」
「なんだ夏凛、あんたも私たちと同じレベル1なんじゃない」
「基礎戦闘力が桁違いに凄いのよ！一緒にしないでもらえる⁉？」
　結局のところ、夏凛も具体的な満開とはどのようなものか知らないらしい。その後、皆の基礎運動能力を上げるために朝練を始めるかといった話が出たが朝が起きられないという点から流れる。
「まあそんな話は後でするとして……じゃあはい、ここからは次の議題。樹？」
「はい。まかせてお姉ちゃん」
　樹から一人一人にプリントが配られる。プリントには子供会で行われるレクリエーションの詳細が書かれていた。
「というわけで今週末は子供会でレクリエーションを行います」
「具体的にはどんな事？」
「はい、東郷先輩。今回は子供達と折り紙教室を開いたり、人形劇をする予定です！」
「なら夏凛には暴れたりない子供達のドッチボールのマトになってもらいましょうか！」
「なんでよ！　大体、なんで私まで参加することになってるのよ！」
「ん？　だってほら」
　首を傾げ、風はカバンの中から一枚の用紙を取り出す。それは禊に

も見覚えのあるものであった。入部届。必要事項には三好夏凛の簡単なプロフィールと入部の意思を表す文面が記されていた。
「昨日入部したでしょう？」
「それは形式上……」
「ここにいる以上部の方針には従ってもらうからねー」
「それも形式上のことでしょう！　大体私のスケジュールに勝手に割り込んこないで」
「夏凛ちゃん日曜日に何か予定があるの？」
「そっそれは……」
　言い淀む夏凛を見て禊はひらめく。
「三好さん、もしはじめてで不安というなら大丈夫だよ。ここいる人はいい人たちばかりで君もきっと気にいるよ。ようこそ勇者部へ！」
　差し出されるタコス。トウモロコシ粉は数回では処理し切れないのだ。
「いらないわよ……」
「禊―。あんたもいいこと言うわね！」
「終わったら夏凛ちゃんの歓迎会もしようね！」
　今まで勇者になるために人生の時間をほとんどを当て、ろくに他人と触れ合うことのなかった夏凛にとってこの勇者部の優しさはむず痒く、だが嬉しい気持ちが胸の中で混ざりあっていた。そんな気持ちが恥ずかしく思わず声が上擦る。
「しっ仕方がないわね！　日曜日ならたまたま予定が空いてるから行ってあげるわよ！」
「なら決まりだね！　楽しみだね夏凛ちゃん！」
　夏凛の参加が決まり、喜ぶ一同。大げさにも見える喜びように夏凛は驚くが口元は笑っていた。
　翌日、禊達は近所の児童館に集合していた。時刻は集合時間の１０時を少し過ぎていた。夏凛以外の全員が集合し、彼女一人を待っている状態であった。
「夏凛のヤツおっそいわねー」
「何か事故にあってないか心配です」

「とりあえず電話を掛けてみる？」
「私電話かけてみるよ！」
一人遅い夏凜に皆心配していた。友奈は自身の携帯を取り出し、アドレスに登録した夏凜の番号を呼び出した。数コールのあとコールのメロディがブツリと音を鳴らして途切れる。
「あれ？　切れちゃった？」
「どうしたのかしら？」
突如切れたコールにどう判断するべきか全員が首をかしげる。児童館の中ではもう集まった園児達の大きな声が外にまで響いていた。
「お姉ちゃん、子供たち我慢の限界みたいだよ」
「……うーむ。どうしたもんかしら」
「風部長、僕が探してくるよ。多分どこにいるかは分かるから……」
夏凜を探したいが子供達を待たせておくこともできず、風が頭を唸らせていると禊が夏凜の捜索に立候補する。子供達のこともあり夏凜の捜索には人数を割けない。そんな中、自身で立候補した禊を止める理由はなかった。
「じゃあ夏凜のこと任せたわよ禊！」
「任せて！」
勇者部の全員に見送られ、禊は走り出す。恐らくだが昨日の嫌そうではなかった様子から夏凜は集合場所を間違えたのではないかと予想した禊は学校へ向かった。しばらく走り、学校へたどり着き、階段を駆け上がり、部室の扉を開く。しかし中には誰もいない。
「あれ？　まだいると思ったんだけどな」
まだ部室の中で待っていると思った禊であったが当てが外れた。予想が外れ、禊はどうすべきか分からず頭を抱える。次の行動に悩んでいると部室の中に風が流れる。樹海の中で勇者に変身した時に感じたあの涼やかな優しい風。その風と共に少女の声が禊の頭に響く。
『お前の探し人は砂浜の方だな』
「だっ誰！」
突如頭の中に直接響くように聞こえた声に禊は困惑する。以前のように霞みがかったような不明瞭さは無く、はっきりと禊に聞こえて

いた。
『あー、アタシの名前か？アタシは……』
謎の少女の声は自身の名前を話そうとした時、突如繋がりが切れる。
『余計なことをするな。直接的な干渉を許した覚えはないぞ？』
さらに聞こえてきたのは先日夢の中であった禊そっくりの人物の声。その声は少女の声をたしなめるようなものであった。更なる声の出現に禊はさらに混乱する。
『邪魔をした。しかし随分と繋がりがしっかりとしてきたな』
意味深な言葉を残して、それ以降声は聞こえてこなかった。感じていた涼やかな風もなくなった。あれはなんだったのだろうか。そんな疑問が禊の胸の中を埋めていくが答えなどは出るはずもない。
「そうだ！　今は三好さんのことが先だ！」
自身に起きている異常に今できることはない。今はできることをするべきだと結論づけ禊は先ほどの声が導いたように昨日夏凜と会った砂浜へと駆け出した。禊の通学路から離れたそこは走って２０分ほどの所にあった。昼の太陽の下、砂浜にたどり着いた禊は日本の木刀を振るう夏凜を発見した。
「見つけた！」
思わず大きな声が出る。禊の出した大きな声に夏凜は驚き振り返る。
「小戸！　どうしてあんたがここにいるのよ！」
「君を探していたんだよ。　走ってここまでき来て、君を見つけた」
乱れた息を整うようとするが思った以上に全力で走ったようで思うよう息が整わず膝に手をついて禊は喘ぐ。息も絶え絶えな様子の禊を夏凜は心配する。
「あんた大丈夫？」
「学校からここまで走ってきたからね」
「なんでそんな事……」
「君を探してって言ってるでしょ？」
まっすぐとこちらを見てくる禊に夏凜は目をそらす。自分は友奈

の電話をして切ってしまい、掛け返すこともせず逃げてしまった。砂浜で木刀を振るっていたのも自分は大赦から派遣された勇者なのだからそんなことする必要がないと自分に言い聞かせる為だった。勇者でない自分にはきっと価値なんてないから。

「勇者部にいることは不快？」

顔を下げてうつむいてしまった夏凜を見て禊は彼女の事情を想像する事にした。勇者部にいることが不快なのだろうか。もしそうなら禊は悲しいと思った。

「……別に嫌じゃない。でも私は大赦の勇者で、バーテックスを殲滅するのが使命で……」

なんとなく禊は分かってきた。昨日の夕食の件にしても今の彼女の煮え切らない態度にも禊には否定的な感情を感じなかった。ただどうして良いか分からない気持ちからくる混乱、それが禊の感じた印象であった。

「勇者部と大赦。どっちにもいて、それでいいと僕は思うよ」

「勇者じゃない私なんて必要ない……」

「そんな事誰も言わないさ、勇者部の誰かが君を要らないなんて言うと思う？」

禊に言われて夏凜は思い出す。初めて会う自分にもお節介で馴れ馴れしくて騒がしい勇者部の面々。会ってまだ一週間も経っていないが誰もそのような事を言わないことは夏凜にも分かる事であった。

「わっ私がいてもいいの？」

「僕は君にいて欲しいって思うよ？　みんなだってそう、僕らは君を必要としてるよ」

自分の存在を認めさせる為、一人勇者になるための訓練に明け暮れていた夏凜にとって勇者になったことは必要とされたからではなく勝ち取ったものであった。しかし勇者部はただ無条件に彼女を必要だと言い、受け入れていた。そんな勝手な肯定に夏凜はむず痒いものであり、今は禊の言葉に乗ってあげると心の中で建前を立てることにした。

「しょっしょうがないわね！　そんなに私が必要だっていうなら少し

くらい力を貸してあげるわ！」
　精一杯の強がりから出た言葉と一緒に口の端は上がっていた。そんな夏凜の様子に禊もつられて顔が笑う。
「お願いするよ。完成型勇者さん。さあ、みんなが待ってる！」
　振り返り、禊は夏凜を連れて児童館へ向かおうとする。そこで児童館からは随分と離れてしまっていることに気づく。確認すると夏凜は自転車できていたようで先に着くのは間違いなく夏凜の方である。
「三好さん。僕歩きで来ちゃったから先に向かってて。後から追いつくから」
「あんたね……、迎えにきた本人が一番遅くなってどうするのよ。……私のせいであんたまで遅れたら申し訳ないから後ろ乗りなさいよ」
「二人乗り？　でも危なくない？」
「完成型勇者の運動能力を舐めないことね」
　木刀を素早く仕舞い、乗り付けてあった自転車に夏凜が乗る。首だけ後ろへ振り返り顎で自転車の後ろの荷物を置くスペースを示す。禊は恐る恐るという様子で荷物置きに腰を下ろす。二人分の体重で自転車のタイヤが沈み、ゴムの反動で戻る。
「さあ行くわよ！　小戸、しっかり捕まりなさい」
　夏凜の運転する自転車は勢いよく出発し、児童館への道を走り出す。急に走り出した自転車の揺れに禊は驚き、思わず夏凜に抱きつくような姿勢でバランスを維持する。二人の間には沈黙が流れ、聞こえるのはタイヤがアスファルトを擦る音だけであった。
「小戸……その、ありがとう」
　風にか消えるかという音量で小さく夏凜は呟いた。
「禊。みんなそう呼ぶから三好さんもそう呼んでよ」
　禊は自身の名前の響きが好きであった。そう呼んで欲しいとも思うし、何より自分から彼女に歩み寄りたいと思った。そんな思いが禊の返事には含まれていた。
「あたしも夏凜でいいわ」
　そのやりとりを最後に再び沈黙が流れ、自転車は目的地に向かって

走る。しばらく走り続け、時折禊が道を支持しながら二人は児童館へ到着した。自転車を駐輪場に止め二人は中へ向かって走る。中に入ると走ってきた二人に気づき、友奈が声を上げた。
「あっ！　二人ともやっときたよ！」
「よし！　禊が夏凜を連れきたわね！　二人とも荷物置いたら樹のと手伝って！」
　風の指示に従い、二人は荷物を置くと子ども達と折り紙を折っていた樹のいるテーブルへ合流した。三人は鶴や花といった折り紙の降り方を子供達へ教えて行く。
「夏凜さん折り紙とっても上手です！」
「当然でしょ！　完成型勇者に死角は無いわ！」
「樹ちゃんも上手だよ」
　途中風の予想通り夏凜と禊は元気の有り余った男の子達のドッチボールの的になるなどのハプニングを経つつ和気藹々とした雰囲気の中レクリエーションは進んでいった。予定通り全てのレクリエーションが進み解散の流れとなり、外はすっかり夕暮れとなっていた。子供達を見送り、片付けを終わらせて勇者部も帰る流れになった。
　児童館を出て勇者部一同は一緒に歩き、禊と夏凜のマンションにまで歩き、夏凜の部屋の前にまで来ていた。薄々おかしいと思っていたがついに耐えきれなくなった夏凜が叫んだ。
「って、なんであんた達まで一緒に来てるのよ！」
「そりゃあ、あんた家に用事があるわけよ。というわけでお邪魔するわよー」
「ちょっちょっと待ちなさいよ！」
　言うと風は夏凜の部屋に上がり皆がそれについて行く。皆は夏凜の部屋に上がり、リビングの周りに陣取る。
「あんた達、うちになにしにきたのよ！」
「それはもちろんこれだよ」
　禊は自分の部屋から持ってきた大きな箱を取り出しみんなに見えるように取り出した。箱を取り出すと中からはタコスが箱の中にぎっしりと詰まっていた。

「あっ間違えた。こっち」
慌ててタコスの入った箱を横に置き、持ってきたもう一つの箱を取り出した。今度こそはと開けられた箱の中には如何にもな誕生日ケーキが収められていた。
「ケーキ？　なんで？」
「夏凜ちゃん今日誕生時だよね？　お誕生日おめでとう！」
「なんでってあんた、入部届にもちゃんと書いてあるじゃない」
友奈に祝われ、何故みんなが自分の誕生日を知っているのか夏凜は疑問に思った。キョトンとした夏凜に対して風の差し出した入部届には必要事項の欄に夏凜の誕生日が書かれていた。
「もしかしてあんた自分の誕生日も忘れてたの？」
夏凜の呆けた顔が面白かったのか風はクックックと笑いながら夏凜に問う。質問された夏凜はうつむき、ぼそりとつぶやき出す。
「……バカ、ボケ、おたんこなす」
「何よ！　そんなに言うことないじゃ無い……」
「誕生日なんてみんなに祝ってもらったことないから、何て言えばいいのか分からないのよ！」
言葉には恥ずかしさを懸命に隠そうとする色が満たされていた。そんな言葉を聞いて一人一人、この誕生日会を開いて良かったと思った。
「素直に嬉しいって言えばいいと思うよ」
笑顔でタコスを差し出しながら禊は夏凜に提案した。素直じゃない夏凜は差し出されたタコスをひったくるように口に入れ顔を逸らした。
「これからいっぱい楽しくなるんだよ！　改めてお誕生日おめでとう！　夏凜ちゃん！」
誰かの誕生日を祝う。それはきっと誰にとって嬉しいことだろう。ここにいる事、ここに生まれたことをみんなで祝福する。そんな当たり前の幸せが今は心地よかった。そんな心地良さの中、夏凜の誕生日会は着々と進んでいった。
「ようし！　今日はみんな飲むわよ！」

「ちょっと風！　あんた何コーラで酔ってるのよ。場酔いってレベルじゃないわよ」
　楽しい雰囲気に当てられたのか風は羽目を外したように騒ぎ出した。いつも通りのような気がしたが指摘するのは野暮だろうと禊は何も言わないことにした。隣にいた美森はうずうずとした様子で置いてあった容器を取り出した。
「夏凜ちゃん、私の作ったぼた餅食べてちょうだい」
「いや、ここは僕の作ったこのタコスを」
「あんた達どれだけ私に食べて欲しいのよ！」
「いえ、食べてもらうわ。有無は言わせない」
「後生だ夏凜ちゃん。そろそろトウモロコシ粉を消費しないと僕の朝食がいつまでもタコスから変わらないんだ」
「大袋で買ったあんたの自業自得でしょ！」
　さめざめと泣きながら禊は自業自得の産物を消費して行く。恨むべきは何となくイネスで1キロのトウモロコシ粉袋を買っていった自分であった。
「あっ！」
「次は何！」
　友奈の見つけた壁のカレンダー。真っ白なカレンダーの中、今日の日付にだけ大きな赤い丸が目印として書かれていた。
「夏凜ちゃんも今日を楽しみにしてきたんだね！」
「なっななな……」
「あっ！　この折り紙、練習してたんですか？」
　次から次へと目ざとい勇者部達は部屋の中の夏凜の隠していたものが見つかっていく。テレビの下の空間には少し隠すように折り紙の教本と練習したのであろう折り鶴が複数鎮座していた。
「みっ見るなー！」
　慌てて隠す夏凜をよそに友奈はみんなで遊ぶ予定をカレンダーに書き込んでいく。それに夏凜はまた騒ぎ、二人のやりとりにまた皆笑う。みんなで楽しそうにする勇者部を見て禊もつられて笑う。
　楽しい時間も過ぎ、時間も遅くなったので解散となった。禊と夏凜

以外のみんなは帰り、禊はパーティーで出たゴミの処分を手伝っていた。二人でそれぞれ出たゴミ袋を一つづつ持ってゴミ捨て場に捨てた。それぞれの部屋に戻る途中、夏凜が口を開いた。
「今日はありがとう。多分あんたが呼んでくれなかったらきっと後悔してた」
「君にしては随分と素直な言葉だね」
少し含み笑いを混ぜてからかう声で禊は答えた。
「悪かったわね、素直じゃなくて」
「ごめんごめん。なんだか面白くって」
「もう！　いい？　これは貸し一つだから！　あんたがピンチな時にこの完成型勇者が助けてあげるんだから！」
「そっか。なら、いざって時は助けてね完成型勇者様」
「任せておきなさい。完全勝利よ！」
こうして楽しい1日は終わった。きっと勇者部は夏凜にとってそこにいたい場所になる。予感ではなく確信が禊にはあった。新しい仲間を加えて勇者部はもっと楽しい場所になるだろう。いつかその場所に彼女も来てくれたら。もうそれ以上に望むものは禊にはなかった。

第六話　夢を見つける君

「小戸禊、遅れました！」

授業により遅れた禊は勇者部の部室である家庭科準備室の扉を開く。しかし来るであろうと予想していた部員たちの声は聞こえず、帰ってきたのは樹一人の唸り声であった。やってきた禊に気がついていないのか彼女は机に並べたタロットカードを見ながら、うーんと唸るばかりであった。どうしたのだろうと疑問に思ったが他に人はなく、やる事も無いので禊は樹に向かい合う位置に座り、友奈に借りた押し花の作り方の本を読み始めた。正面の本人は相変わらず唸り続けている。それから少しして。

「一体、どうしたら良いんだろう……」

「どうかしたの？」

「わああ！　禊先輩いつからそこに　⁉？」

自身が唸っている間に正面に禊がいたことで驚き、樹は思わず椅子から落ちそうになる。急に話しかけたことは失敗だったかと禊は申し訳なく感じていた。

「そんなに驚くことないでしょ？　結構前からいたよ？」

「いたなら声かけてくださいよ……。」

「なんか悩んでるみたいだったから、そっとしておいた方が良かったかなって。他のみんなは？」

「その対応はなんだかドライな様な……。お姉ちゃん達は他の部活に助っ人です。私は早く終わったのでこうして占いをしながら待っていたところです」

「そっか、みんな他の部活の助っ人か出遅れて、どこに行けば良いか聞きそびれちゃったか。おとなしく待つことにしよう。ところで樹ちゃんは何を占っていたんだい？　随分と唸っていた様だけれど」

どうやら禊は一人出遅れた様で、助っ人中の人にメールの返信も期待できず、皆が帰って来るまで大人しく待つことにする。何も話さないのも味気ないと禊は目の前の後輩の唸りの原因を聞いてみることにした。

「えっと……その」
悩んでいた内容を聞かれ、樹はしどろもどろと行った様子になる。
「答えにくいことだったら無理に話さなくて良いよ」
「その……。聞いてもらっても良いですか？」
「もちろんだよ」
人差し指同士を合わせてうつむいた姿勢から禊を上目遣いに見ながら、意を決した様に樹は話し出した。
「あのですね……、もうすぐ音楽の授業で歌のテストがあって、でもみんなの前だと私上手く歌えなくて」
「緊張してうまく歌えないってこと？」
「はい。一人の時はそんなことなくて、お姉ちゃんも上手だって言ってくれるんですけど、やっぱりみんなの前だと緊張しちゃって。だからどうしたら上手く歌えるか占っていたんです」
ひとしきり話し終えると樹は顔を逸らし、人差し指同士を合わせてモジモジし始める。樹の話を聞いて禊はどうしたものかと考え始める。
「緊張かー……。そうだよね。大勢の前で歌ったり、何かするのって難しいことだよね」
「禊先輩はそういうこと無いですか？」
「どうだろう？　中学に入ってからはそんな事ないかな？」
「中学に入ってからってことはその前はあったんですか？」
禊と樹達の関わりはバーテックスとの戦いから始まった。そのため樹は勇者部以外での禊の様子を知らず、単純な興味からの質問であった。自身の経歴を聞かれて禊は閉口する。そして少し考えるそぶりを見せて改めて樹の方へと向き直した。少しバツの悪そうな顔をしながら禊は話し始めた。
「僕さ、二年前からの記憶がないらしくて昔の事とか何も覚えてないんだよね」
他人事の様に禊は語る。自分の知らない自分がいたことなど実感が伴わず、無意識に他人事の様に話していた。サラっと話す禊に一瞬樹は惚けたが意味をもう一度噛み砕き、驚く。

「……え？　たっ大変じゃないですか！」
「意外と困ったことはないよ？　昔のことが分からないってだけだし？」
　軽く聞いたつもりが思った以上に大きな問題が出てきて樹はまずい事聞いたのではと思い始めた。しかし当の本人は思い詰めている様子はなく、ケロっとしていた。
「僕の記憶は今どうしようもないわけだし今は樹ちゃんの歌のテストの話をしようよ」
「禊先輩がそう言うなら……」
　少なくともあの夢の中の僕の顔をしたあいつは僕を知っている。
　禊は心の中で一区切りつけ、元の話題であった樹の話題に話の舵を戻そうとする。促された樹も気になるものの、これ以上聞くのも失礼かなと己を納得させた。
「しかし……樹ちゃんがみんなの前で上手く歌うには、かー」
「話は聞かせてもらったわ！」
　勢いよく禊の後ろの扉が開く。突然開いた扉の音に二人は驚き体が跳ねる。開かれた扉の先には二人以外の勇者部が揃っており、先頭の風は不敵な笑みを浮かべていた。
「樹～、悩んでるならお姉ちゃんに相談しなさいよ～」
　自分を差し置いて禊に相談されたことに風はご立腹であったのか、ヨ～ヨ～ヨ～とわざとらしく泣きながら樹に泣きついていた。
「そうだ！　みんなでカラオケに行こうよ！」
「良い考えね、友奈ちゃん。実践に勝る経験はないわ」
　樹の悩みを聞いていたのか友奈は良いことを思いついたとみんなに思いつきを発表した。美森もそれに賛成していた。
「馬鹿馬鹿しい。私は帰って鍛錬するわ」
「夏凛ちゃんも一緒に行こうよ！　きっと楽しいよ」
　実践だからと言ってカラオケはどうなのだと夏凛は呆れ、今日の勇者部の活動も終わったこともあり、帰ろうとしたところで友奈が夏凛の手を両手で握った。
　急に手を包まれる様に握られたことで夏凛は顔を赤くしながら慌

て始めた。助けを求めて周りを見回したが皆が皆ニヤニヤと夏凜を見ていた。最後に禊と目があったが返事はサムズアップだった。
「しょうがないわね！　一緒に行ってあげるわよ！」
部室から移動してカラオケ屋に到着する。友達と着慣れている友奈や風がテキパキと受付を終えて広めの一室に入室した。
最年長の風から歌い始め、高得点を出した風の挑発に乗った夏凜と友奈がデュエット曲を歌い終えた。
「それじゃあ次は樹の番ね」
マイクを渡され、緊張した趣で樹は歌い始めた。歌い始めはとてもよく、初めて聞いた禊にも彼女の歌のうまさが分かるものであった。しかし歌っている最中に禊たちの目が樹と合う。そこから声が震えだす。うまく行っていた歌は音が外れてがたがたになる。歌い終わった後、樹は元の席に座り、ため息を吐いて落ち込んでいた。
「ハァ……。誰かに見られてるって思うとそれだけで……」
「途中まではうまく行ってたんだけどね」
「これは重症ね」
「まぁ、今はただのカラオケなんだから上手かろうと下手だろうと好きに歌えば良いのよ」
せめてものフォローとして禊と風は助け船をだすがその優しさが樹をさらに落ち込まさせていた。しかし、これではよくないと樹は気分を入れ替え、禊を標的に定める。
「禊先輩は何か歌わないんですか？」
「……え？　あー、そうだね。せっかく来たんだから何か入れてみよう」
初めてカラオケに来たために勝手がわからず、合いの手のマラカスに専念していた禊に樹は歌うことを勧めた。勧められた禊は友奈からカラオケリモコンを受け取り、知っている曲を探す。何となく知っている曲を見つけ入力する。部屋に設置されたモニターには禊の選んだ曲が表示されていた。表示されたのは有名なクリスマスソング。ゆっくりと禊は歌い出し、静かな聖夜の歌は夜は終わる。
「クリスマスソング？　今、夏よ？」

「仕方がないじゃないか、他の曲を知らないんだ。カラオケなんて来たのが初めてなんだ」
「禊先輩の意外な弱点、発見です」
「これからみんなで来てレパートリーを増やしていけば大丈夫だよ！」
本来は樹の歌の練習にきたはずであったが禊の歌のレパートリーの少なさという新たな問題が浮上していた。今度皆からお気に入りのCDを禊に貸すことが決まり、樹の歌も要練習と結論が出てカラオケ会は終了した。
帰り道、友奈と美森ペア、禊、夏凜、犬吠埼姉妹ペアに分かれて帰路につく。風と夏凜はそれぞれ夕飯の買い出しと煮干しの補充に分かれ、帰り道は禊と樹の二人だけであった。
「今日は楽しかったね。カラオケは初めてだったけど」
「はい！　禊先輩。私も楽しかったです。うまく歌えてなかったですけど……」
皆に見られ、緊張して声が震え続けていた。本人も気づいているし、改めて自分で言ったことにより、また落ち込んで自爆していた。流石に不憫に感じ始めた禊は話題を少し変えてみることにした。
「樹ちゃんは歌うことは好き？」
「歌うことですか？　はい、私歌うことは好きなんです。でも皆に見られてると歌えなくって……」
「でも好きなんでしょ？　なら大丈夫だよ。好きなものこそ上手になれって言うし、君ならできるってみんな信じてるよ。」
「そんなものでしょうか？　禊先輩は何か好きなことってありますか？」
好きなこと、と問われて禊の足が止まる。一度上を見上げて、元に戻す。考えてみるが一向に思いつかない。自分は何が好きなのだろうか？　考えてみるがやはり思考は堂々巡りばかりして具体的に何も出ない。結論はさっぱりとしたものであった。
「考えたこともなかった」

「お休みの日は何をしてるんですか？」
「友達の所によく行くよ？」
「好きなことって感じではないですね」
「最近は勇者部の活動が多いかな？」
「趣味は勇者部ですね」
　答えが出ず、お互い適当になっているのを感じる。思った以上に何も思いつかない禊はなんだか焦り始めていた。
「意外と自分の好きなことって思いつかないものだね。樹ちゃんは歌って好きなものがあって羨ましいよ。将来は歌手デビューかな？」
「そんな事ないですよ！　きっと禊先輩も好きなこと見つかりますよ！　それに私が歌手なんて、想像しただけでもなんだか震えが」
「夢があって良いと思ったんだけどなー」
　昨今あまりアイドルという言葉を聞かなくなったが、禊にはそれが樹のイメージにぴったり噛み合っていると禊は感じた。帰り道を歩きながら禊は今日一日を振り返る。悩める樹の相談に乗ってはみたものの、結果として大したことは出来ていなかった。
「ごめんね、樹ちゃん。相談してみなよって言っておきながら大したことできなくて」
「そっ、そんな事ないです！　相談に乗ってくれたこととか嬉しかったです。歌のテストはまだ不安ですけど頑張ります！」
　禊への相談はと大した助けにはなていなかったが、どれでも一生懸命、解決方法を考える禊の姿は樹の決心の助けにはなったようであり、握りこぶしを胸の前で構えた樹は歌のテストを頑張ることを禊に宣言した。
　数日後、歌のテストの本番が樹に迫っていた。後、数人で自分の番が来るというところで樹は不安でいっぱいいっぱいになっていた。
　どうしよう。昨日はたくさん練習したけど結局、みんなも前で歌うことは克服出来なかった。
「犬吠埼さん。どうぞ」
「は、はい！」
　無情にも順番は文字通り順番通りに来てしまう。考え事に集中し

ていた為、急に名前を呼ばれたことで返事の声が裏返り、大きな音を立てて立ち上がる。大きな音を立ててしまい、周囲に謝りながら教室の前に移動する。樹には机から黒板前までの短い距離が処刑台の階段のようであると感じていた。

黒板の前に立ち、歌詞が見えるように教科書を前に構える。その時、中に挟まっていたのであろう折りたたまれた紙が落ちる。

何かと思い広げてみるとそこに書かれていたのは勇者部のみんなから樹へ書かれた応援の寄せ書きだった。

「テストが終わったら打ち上げにケーキを食べよう」

「周りの人はみんなカボチャ」

「気合いよ」

「周りの目なんて気にしない！　お姉ちゃんは樹の歌が上手だって知ってるから」

「樹ちゃんのやりたい事してみたい事、応援してます」

皆それぞれの自分らしい応援が寄せ書きには書かれていた。皆の応援に樹は胸の奥が温かくなるのを感じる。自分はお姉ちゃんについて行くばかりで自分のやりたいことなんてないと樹は思っていた。しかしみんなの応援を受けて、自分の出来ることから、今はこの歌のテストが頑張ってみよう、そう思えた。

温かくなった胸で空気を吸い、樹は歌い出す。

放課後、勇者たちは部室の中に集合していた。

「樹ちゃん歌のテスト大丈夫かなー？」

「大丈夫よ、私の妹よ？」

自信満々に言う風であったが、椅子に座る彼女は片足をばたつかせて貧乏ゆすりをしたり、立ち上がって部室内を歩き回るなど落ち着きがない。ほかの皆も風ほどではないが、まだ来ていない樹を気にしてか時折、扉の方を確認していた。

しばらくしてトタトタと廊下を早歩きする音が外から聞こえる。音が大きくなると部室の扉が開かれる。扉を開いたのは満面の笑顔を携えた樹であった。

「バッチリでした！」

わぁっと勇者部内に歓声が上がる。皆一様に樹のテスト結果に喜ぶ。

「よし！　禊、宴の用意をせい！」
「了解です、風部長」
喜びを皆で共有して勇者たちの絆はさらに深まる。
そしてさらに後日、また禊と樹は共に下校していた。話題は先日の樹の歌のテスト。
「おかげさまで歌のテストはバッチリでした！」
「やっぱり、僕、何もしてなかったけど、樹ちゃんが上手くいって嬉しいよ」
禊は未だその一件を気にしていた。そんな禊に樹は少し恥ずかしげにしてカバンから一枚のＣＤを取り出した。
「そっ、それでですね。これを受け取って欲しいんです」
「これはＣＤ？　でもタイトルとかついてないね」
「それ私が歌った歌のＣＤなんです！」
「樹ちゃんの歌？　そういえば僕は結局、樹ちゃんの歌聞いてなかったね」
「はい。それで禊先輩にも聞いて欲しくて」
「うん、帰ったら聞いてみるよ。たのしみだなー」
受け取ったＣＤを大事そうにカバンに入れる。そして樹はさらに切り出そうと顔を少し赤らめる。
「それでですね？　まだお姉ちゃんにも言って事ないんですけど、私歌手になってみたいって思って、それでオーディションに応募してみたんです！」
「本当⁉？　それはすごいよ。樹ちゃん、やりたい事見つけたんだね」
「はい！　禊先輩がやりたい事やってみるといいよって応援してくれたので頑張ってみようと思いました」

「そっか……、僕の言葉が樹ちゃんの力になったなら嬉しいよ」
自分の行いが良い意味を持ったことに禊は嬉しくなる。でもそれ以上に後輩が自分の夢を持てたことが嬉しかった。嬉しいことをしてもらえば、同じように嬉しいことをしてあげたくなるのが人の心情だろう。樹は話し出す。
「はい、だから今度は私が禊先輩のやりたい事、見つかるように応援しますね」
「そうだね、今度は僕がやりたい事を見つける番だね」
帰り道の夕暮れ。なんだか青春っぽい雰囲気で二人は帰路についた。今は何もなくてもきっといつかやりたい事が見つかるだろう。禊はそう結論づけた。
その時、スマートフォンに樹海化警報の表示が現れ、サイレンが鳴る。
約一ヶ月ぶりの樹海化警報に禊と樹は心を引き締める。周囲が樹海化の光に包まれる。
「でもその前にやる事を終わらせよう」
「そうですね、早く終わらせてまたいつもの勇者部に戻りましょう！」
そして四国全土は神樹の加護に包まれた。
深く、暗い水底の中にもう一人の禊は漂っていた。上下もない世界の中、色とりどりの花が咲いてアンバランスな様相を指し示していた。ここからでも感じるのはあの懐かしくも不愉快な天の気配。
「もうすぐだ、禊。そうすぐお前には選んでもらう。」
彼を見つめるは赤い牡丹の花。今は何もできない無力感が花を蝕む。
戦いを続ける勇者たちに並行して悪意はゆっくりと、しかし確実に迫っていた。選択の時は近い。
これより始まるは小戸禊の物語。序幕は終わる。

第1話　目覚めた僕

樹海化の光が晴れると僕たちは樹海化した四国の中にいた。樹海化の時、隣にいた樹ちゃんを含め、友奈ちゃん、東郷さん、夏凛ちゃんがすぐ近くに召喚されていた。

約一ヶ月ぶりの樹海化に不安そうな人、勇猛果敢な人それぞれ様子は違っていたが顔は同じ方向を見ていた。樹海の端、ほぼ地平線と重なるように七つのシルエットが少しづつこちらに向かって侵攻していた。

「残り七体、全部来てるんじゃないのこれ？」

「在庫処分？」

「一ヶ月経ってる分、妙に生々しく感じますね」

「バーテックスを買う人なんているのかな？」

「友奈ちゃん、あんなの買っても置き場所がないわ」

戦いの前でも勇者部はいつもの勇者部であった。緩い空気の中、みんなの緊張感が抜けていくのを感じる。しばらくそうしていると遠くから既に自身の勇者装束に変身済みの風部長が跳んできた。

「敵さん、壁の位置ギリギリから攻めてくるみたい。みんなもそろそろ準備をお願い」

風部長が皆を取り仕切り、準備を促す。僕も変身しようとスマートフォンを取り出したところで横から樹ちゃんの笑い声が聞こえる。驚いて振り返ると友奈ちゃんが樹ちゃんの脇腹をこそぐっていた。樹ちゃんは身をくねらせてこそぐりから逃れていた。友奈ちゃんの指がなんだかいやらしく動いていたような気がしたが見なかったことにした。

「緊張しなくても大丈夫だよ、樹ちゃん。みんないるんだから」

「はい！」

樹ちゃんが一人ずつに振り返り、それの形が無言で同意する。樹の緊張もほぐれ、頃合いと見た風部長が号令を出す。

「それじゃあ、勇者部変身！」

「はい！」

みんなの声が重なり、全員が戦う意思を示して、スマートフォンの画面を操作する。
熱が体を通り抜ける。刺青のような黒い刻印が体の表面を走る。それを隠すように蒲葡の騎士甲冑を模した鎧が僕の体を包み込んで勇者装束が完成する。
変身したことにより、上昇した身体能力で皆で高いところに登る。開けた高いところに来たことによりよりバーテックスたちがはっきりと見える。通常のサイズのバーテックスが六体、明らかに大きいものが一体樹海の壁のところギリギリに鎮座していた。
「あんなに大きいのが並んでると圧巻ですね」
「でもあれを殲滅すれば全部終わりでしょ？」
「全部倒して、無事に早く帰りたいね」
これまで戦って来たバーテックスの残り、七体が勢揃いしたバーテックスの軍団が並ぶ光景はそれだけで重圧感を放ち、美森は素直な感想を漏らしていた。位置も通り自信満々な夏凛は前向きな事を述べ、禊もそれに同意した。
「それじゃあ、戦う前にあれ、いっときますか！」
「あれって何よ？」
風が何かしらを提案し、皆に呼びかける。夏凛は一人、風の言うあれが何を意味するのか、いまいちピンと来ていないようであった。風の言いたい事を瞬時に理解していた他は円形に並び、肩を組んでいく。そして一人分の空きを作り、端となった友奈と禊が夏凛に向けて手招きする。
「えっ、円陣？」
「ほら、夏凛。あんたも入りなさいよ」
「ちょっ、それいる？」
「まあ、入りなよ。これで最後なんだからさ」
「まったく、なんで私までやんなきゃいけないのよ」
「そんな事言っちゃって～。本当は嬉しいくせに～」
「そんな事無いわよ！　しょうがないから入ってあげるのよ」
ニヤニヤしながら夏凛をからかう風と怒りながらも円陣に入る夏

凜。全員で円陣を組み終えると途端に風は真面目な顔に変わる。
「あんた達、無事に生きて帰ったら好きなもの奢ってあげるわ」
「ようし、帰ったらいっぱい美味しいもの食べよう！」
「言われなくても殲滅するわ」
「私も叶えたい夢があるから」
「頑張ってみんなを、国を守りましょう」
「僕も帰りたい場所があるんだ」
　円陣を組み、それぞれが自分を鼓舞していく。皆が団結していくのを確かに感じる。
「ようし！　勇者部ファイトー！」
「オー！」
　円陣を組み終え、勇者部はバーテックス達に向き合う。一番早く動いたのは夏凜であった。
「三好夏凜、一番槍！」
「小戸禊、二番槍！」
　身軽な夏凜が飛び出し、それに禊が追随する。まず最初に接敵したのは突出して前進していたアリエス・バーテックスであった。出会い頭に羊に似た頭部に辻斬りのごとく、一閃の斬撃をお見舞いする。続けて追随していた禊が夏凜の作った切創をさらに開くように光刃で切りつける。頭部を完全に両断されたアリエスはバランスを崩してその場に崩れる。
「封印開始！　合わせなさい、禊」
「分かった！」
　夏凜は足元に片方の日本刀を突き刺し、封印の儀を開始する。封印の儀の開始とともに花が舞い始め、アリエスの尾から見慣れた形状の御霊が飛び出し抵抗のために高速で回転を始める。そこに禊が飛び出し、光刃を両手で逆手にとって御霊に突き刺す。貫通するまでには至らなかったが御霊の回転は大幅に遅くなる。
「これなら殴れる！」
　回転が触れても吹き飛ばされない程度には遅くなり、そこに友奈のパンチが突き刺さる。衝撃によって完全に動きが停止したところに

美森の狙撃は入り、御霊の中心を撃ち抜く。撃ち抜かれた御霊は崩れ始め、倒した事を示していた。
「よし！　あんた達ナイスコンビネーション！」
息のあった連携に風が思わずガッツポーズをする。アリエスを倒したところで少し気の抜けた四人を押しつぶすように牡牛座のタウラス・バーテックスが自身の巨体を用いたプレスを行った。急いで四人はいた位置から飛び、間一髪のところで巨体を避ける。禊はさらに奥から二対のバーテックス、天秤のようなライブラ・バーテックスと水風船をくっつけたようなアクエリアス・バーテックスが迫って来ているのを確認した。
「あっちの二体、天秤みたいな奴は任せて！」
タウラスとアクエリアスを他に任せて、禊は飛び出す。禊が接近するとライブラは自身を回転し始め、天秤のようなパーツが風を巻き込んで、小規模の台風と化す。突然発生した強風によって空中にいた禊は抵抗できず、吹き飛ばされる。そこで自身を追いかけていた遠隔操作の移動砲台を足場にして前方に飛ぶ。途中、移動砲台を使ったサーフィンを織り交ぜつつ、移動砲台を足場に何とかライブラの足元にまで移動する。
「まずはその回転を止める」
手首から伸びていたリボンを最大限まで伸ばし、回転するライブラに絡める。絡められたリボンはちぎれる事なく、際限なく伸びていく。絡められ、巻かれていくライブラ、数十回転するうちにリボンに巻かれてライブラ自身が半分ほど隠れる。そこまでリボンが絡まった事でライブラの回転が止まる。しかしリボンが手首から伸びている事、あまりにもリボンが長く、巻き取れない事から禊もそれ以上は動けずにいた。誰かにとどめをお願いしようと開いた口から声が出ることはなかった。突如、巨大な金の音が鳴り響いた。響く音はゆうにジェット機のエンジン音よりも巨大な音を鳴らす。その単純な攻撃はしかしそれ故に勇者達全員の動きを封じる。更に後ろの方では地中に潜航することのできる魚型のピスケス・バーテックスが射線が通せない美森を翻弄していた。

「音はみんなを幸せにするもの。そんな音は！」
歌手になりたいと夢見る樹にとって、音によって相手を苦しめるタウラスの攻撃は到底許せないものであった。自身の武器であるワイヤーをタウラスの頂上にある鐘に伸ばし、音を止める。
「ナイス、樹。まずはお前からー！」
「私はこっち！」
樹がタウラスの鐘を止めたことにより、自由になった風は自身の大剣を巨大化させてアクエリアスを横一文字に切り捨てる。さらに夏凜も大きく跳躍し、落下の慣性を利用して禊が固定していたライブラを切りつけて半壊させた。ところがアクエリアスとライブラは半壊したままの状態で、樹に固定化されていたタウラスは樹を引っ張りながら、今まで静観していたレオ・バーテックスの元へと集う。
「なにあれ？　何しようって言うのよ」
「退却なんて今までなかった行動。何かくる！」
初めて見るバーテックスたちの行動に風が疑問の声を出す。夏凜は異常なバーテックスの行動に何かしらバーテックス側にも策がある事を察する。手近に集まった三体のバーテックスはレオの生み出した小型の太陽のような火球に飲み込まれる。三体のバーテックスを飲み込んでレオの体に変化が起こる。
「凄く大きいよ、お姉ちゃん」
「合体なんて普通、正義の味方の特権でしょうに」
元々、巨大であったレオであったが三体のバーテックスを取り込んだ事でさらに膨張、おおよそ倍の大きさに変化する。更に取り込んだ三体のバーテックスの特徴が各部に現れ、レオが合体した事を視覚的に表していた。
「三体取り込んで大きくなったなら、逆に言えば四体まとめて殲滅できるってことよ！」
「そういう前向きな発言は見習うべきだね」
むしろ楽になったと言いたげな夏凜に、禊はその前向きな姿勢に関心した。
巨大化したレオ、レオ・スタークラスターは背後の光背のような

パーツを開くように作動させると複数の小型火球を展開し、人間大の火球を無数に発生させ、弾丸として発射する。火球に一つ一つがかつてのヴァルゴの弾の様に追尾機能を有し、確実に勇者たちを制圧していた。各々の武器で迫る火球を打ち払うが数の暴力に対処が段々と間に合わなくなり、一人、また一人と吹き飛ばされていく。禊も移動砲台と光刃を駆使して火球を打ち払うがレオの近くにいたこともあって火球が集中し、ついに火球が命中する。火球が殺到し、周囲の樹海ごと禊は吹き飛ばされ、地面に衝突した衝撃によって気を失う。

次に禊が気絶から復帰した時、視界いっぱいに太陽があった。驚いて飛び起き、離れて見るとレオの放つ火球であることが見て分かった。急いで神樹の方へ向かって飛び、他の勇者に合流を図る。合流したところで風と樹、美森の勇者装束が神聖な巫女服連想させる物に変わっているのを見つけた。どうやら禊が気を失っている間に満開を行い、強力な力で三体のバーテックスを撃破したらしい。しかし強化された満開の力でもレオの放つ、自身よりも大きな超巨大火球には敵わず、押されていく。放たれた大火球は大剣を盾代わりにした風に阻まられながらも、ゆっくりと神樹に向かって進んで行く。このままではレオの攻撃によって神樹が破壊されてしまう。火球に焼かれつつ、吹き飛ばされた風の絶叫が樹海内にこだまする。

「誰か、こいつを倒して！」

「このままじゃ神樹様が！」

風と樹の叫びを聞いて禊は飛び出す。頭の冷静な部分が自身の今の装備ではあの火球にはどうしようもない事を理解する。ならば今できることは一つしかない。迷わず力を行使する。

「満開！」

天と地から光が伸びる。伸びた光を通して莫大な力が禊を包み込む。纏っていた蒲葡の装束が聖職者を思わせる装束に形を変え、そしてその変化を上書きするように膨らみ弾ける。弾け飛んだ装束は再度禊に纏わりつき、新たなる装束に形を変える。再度纏われた装束は異様なものであった。以前の騎士甲冑を思わせる蒲葡ではなく、また変化しようとしていた聖職者のような物でもなく、白色の鎧が禊の体

を包んでいた。それまで着ていた角張った騎士の甲冑ではなく、丸みを帯びた生物的なシルエットの装束であった。
空中で新たなる装束に変身した禊は黙って右の掌を迫る巨大火球に向ける。掌の先から小さな黒い球体が発生する。生まれた黒い球体は指数関数的に大きくなり、あっという間に迫っていたレオの火球と同等の大きさに成長する。発生した黒い球体は迫っていた火球を飲み込み、完全に飲み込むと次第にそのサイズをしぼませていく。次第に小さくなり、黒い球体は消滅する。後に残っていたのは空中の白い装束の禊一人であった。
火球を飲みこみ、消した禊は体に不思議と力が満ちるのを感じる。体を満ちる力は溢れかえり、背中に連結された、かつての移動砲台を元にしたのだろう翼のようなパーツから余分なものが放出されていくのを感じる。
力を振るうのが楽しい。禊の心を占めていた感情を一言で述べればその様なものであった。背中の翼から黒い炎が吹き出し、加速器として機能する。百メートル弱はあった距離は一瞬の内に詰められ、禊はレオに肉薄する。
「消えろ、滅びろ!」
心の中を敵への憎悪が埋める。自然と言葉の語気が荒み、禊は荒々しくレオを殴りつける。しかし複数の同胞を取り込み、強化されたレオの表面には傷が付いていなかった。
「死ぬまで攻撃し続ければいいことだ!」
背中の翼が開き、作動する。先程、掌から発生した黒い球体が今度は掌からではなく、唐突に何もなかった空間に幾つも発生する。その全てがレオの一部に触れる様に発生する。発生した黒い球体は出現と消滅を繰り返し、球体が消えた位置にあったレオの体はくり抜かれた様にその部位を消滅させていた。
唐突に自身の体を穴だらけにした禊を脅威とみなしたレオはレーザー状に火球を放ち、禊を焼き払う。自身に向かうレーザーを確認した禊は腕を組み、防御姿勢を構える。レーザーは禊を飲み込み、吹き飛ばしていく。レーザーが晴れると端々が焦げた禊が現れる。構え

を解き、レオに向けて笑みをこぼす。視界に入ったレオは再度、神樹ごと禊を焼きはらおうと先程の火球よりも、更に自身が隠れる様なふた回りも大きい火球を生み出す。
　本来であれば間違いなく危機的状況であるはずが、禊は心の底から楽しいと獰猛な笑みを浮かべる。頭の冷静な部分が状況に違和感を覚える。何故自分はこんなにもこの状況を楽しめているのか。しかしそんな思考も敵を攻撃しようとする意志にかき消される。後に残ったのは敵を滅ぼさんとする憎悪のみ。
「力比べか、いいだろう！」
　両手を上げて禊も黒い球体を作り始める。周囲の空間を飲み込みながら大きくなっていく。迫る火球に黒い球体がぶつかり合う。初め拮抗していた二つの衝突は不意に黒い球体が火球を飲み込む事で決着する。炎を纏った黒い球体はそのままレオを飲み込む。黒い球体の内側に向かう収縮の力と火球の熱量の両方がレオを襲う。全体の大部分がズタズタにされ、ついにレオの体が崩壊する。しかし周囲を探しても出てくるはずの御霊が見当たらない。
　周囲をキョロキョロと見ていた禊に接近する影が二つあった。
「禊くん、スゴイ！　あの大っきいやつ一人で倒しちゃった」
「気をつけて友奈ちゃん、まだ御霊を倒せてないわ」
　背後から声をかけられ、接近に気づいていなかった禊は思わず、反射的に黒い球体で攻撃しそうになり、背後にいたのが友奈と美森であることに気づいて慌てて手を引っ込める。
「わわっ！　禊くん、私たちだよ」
「すまない、でも御霊はどこに？」
　周囲を見ても御霊は見当たらず、不意に上を見た美森は大きく目を開き絶句する。上空のはるか先、宇宙空間にあの四角錐の御霊が浮いているのを発見する。
「友奈ちゃん、あんなところに」
「わぁ！　あんなに大きいよ！」
　宇宙空間にある事と遠近法を加味しても、浮いている御霊の大きさはそれまで見てきたどの御霊をも超える大きさであった。

「でも、勇者ならこんなことで諦めない！」
「そうね、友奈ちゃん。乗って、今の私なら友奈ちゃんをあそこまで送れるわ」
例え相手がどれだけ強大でも結城友奈は諦めない。それは共に戦う美森も同じであった。二人のやりとりを見ていた禊もうなづく。
「先に言ってる」
それだけ言うと禊は背の翼を大きく開き、加速器として使用する。翼から黒い炎が吹き出し、禊を押し出す。加速し続ける禊はグングンを高度を上げて、宇宙に鎮座する御霊が目前という場所にまで出る。
接近した禊に気づいたのか、御霊は抵抗にブロック状に切り離した自身の一部を弾丸の様に射出する。あれ一つ一つが御霊なのか、判別のつかない禊は無数に発生させた黒い球体で潰していく。同時に展開した球体は数十に登るがその攻撃は正確さに欠け、幾つかの撃ち漏らしが背後の地球に向かって落ちていく。
「クソっ！　正確には当てられないか」
撃ち漏らした御霊の一部を追いかけて背後に向かおうとした所で禊は後ろから来ていた美森の満開特性の浮遊砲台に乗った二人を見つける。美森は自身の砲台を巧みに操作し、禊の撃ち漏らした御霊の一部を正確に撃ち抜いていく。
「ここは私が受け持つわ。二人は御霊の方を！」
「よし、捕まれ、友奈」
落下していく無数の欠片を撃ち抜いていく美森の砲台に乗っていた友奈の手を掴み、禊は御霊に向かって飛ぶ。あと少しという距離のところで更に御霊の抵抗は激しくなっていく。禊は手を掴んでいた友奈を遠心力を活かしつつ思いっきり御霊に向かって投げる。
「行け！　任せた」
「任された！」
投げられ、御霊に向かって加速する友奈。目と鼻の先という距離のところで友奈は力強く宣言する。
「満開！」
満開ゲージが消費され、地の神の加護が樹海から伸びる。神樹の力

に包まれた友奈は光が治ると巨大な日本の腕の満開特性を纏っていた。自身の腕と連動する巨大の腕は力強く、御霊を打つ。しかし大きく御霊に傷をつけることには成功したが全体を破壊することには至らない。このままでは時間切れになるのではと不安が友奈の胸をよぎる。

そこで友奈を避けるように黒い球体が御霊の表面を大きく抉る。驚き振り返るとこちらに掌を向けた禊がいた。

戦いながら禊は自身に満ちていた力がもう残り少ないことを感覚的に理解していた。最後に残っている力を込められるだけ込めて黒い球体を放つ。禊の意図を理解した友奈は禊にうなづいて見せ、強大な二本の腕で御霊を掘り進めるように殴りつけていく。星の重力に引き寄せられ、禊は御霊が内側から崩壊していくのを確認して地球に向かって落ちていく。自身の満開が解除されていくのを感じながら、何処からかこちらを観察する視線を感じる。周囲を確認するが成層圏の中で禊以外には何もなく、気持ち悪さを覚えながら禊の意識は落ちた。

「樹！　禊のやつが落ちて来たわよ！」

「はい！　まずは禊先輩から受け止めてみせます」

満開を展開した樹は、幾つものワイヤーを網状に展開し、禊をキャッチしようとする。幾つかの網を貫通しながら禊は減速していく。五枚目の網を破る頃には速度は落ち着き、頃合いと見た夏凜は空中で禊を抱えてキャッチする。

「ようし！　捕まえたわ。って禊？」

捕まえた禊が力なく腕を下ろして目を閉じていることに気づいた夏凜は禊に呼びかける。しかし返事は無く、禊は目を閉じていた。胸に耳を当て、鼓動があること確認した夏凜は安堵の息を漏らす。

「まったく、最後で気を失って落ちてくるなんて締まらないヤツね」

憎まれ口とは裏腹に夏凜の口角は上がっていた。無事に禊が帰って来たことに安堵した夏凜は禊を背に抱えつつ置いてきた樹の方へ向かう。たどり着くと後からやって来た友奈と三森を受け止めたと所であったようで頑張った樹は安堵の表情で地面に転がっていた。

全てのバーテックスが撃破された事で樹海化が解除され、全員学校の屋上の社の近くに戻された。全員の無事を確認した夏凛のスマートフォンに退社からの着信が鳴る。
「こちら三好夏凛、負傷者五名、支給救急班の手配をお願いします。なお、今回の戦いで十二体全てのバーテックスの殲滅に成功しました！」
大きな戦いが終わり、夏凛の胸の中に達成感が満ちる。戦いが終わって気が抜けていたためだろうか、普段なら気付くであろう小さな異変を見逃した。
制服で少し隠れた襟の首元、火傷のような呪印が蛇のように肌を走っていた。動く刻印は一つの形を襟の鎖骨あたりに刻むと動かなくなった。鏡と炎を表す刻印は深々と襟に刻まれていた。

第2話　目を閉じていた僕

泥中にいるような感覚が禊を支配する。目を開くとそこは何もない灰色の世界であった。先ほどまで自分は樹海化した四国の中でバーテックスと戦っていたはずだ。しかし満開を発動したところから記憶が抜け落ちている。

周囲を見渡す。今まで夢の中で見て来たのは暗い水底の景色であった。それに対して今見えるのは生気を感じない灰色、周囲を見渡しても果てが分からず、今まで夢の中にいたもう一人の禊もいない。

「ここはどこ？　早くみんなの所に帰らないと」

試してみると浮いているこの体はこの灰色の空間の中でも自由に動くらしい。禊はひとまず行けるところまで進んでみることにした。しかし進めど、進めど一向に景色は変わることなく、果ても分からない。動き疲れたためだろうか。少し頭がぼーっとする。不思議な浮遊感とともに熱が頭を撫でる感覚が走る。

閉じた瞼の向こうに視界が晴れる。目をつむりながら見たことのない景色が見える。

見えてくるのは地獄のような光景であった。太陽の表層の様にプロミネンスが地と空を走る。視界のあちらこちらに白い点が見える。

「あれは……バーテックス？」

よく目を凝らし目に見える風景を眺める。白い点に見えていた無数の何かは白い袋のような生き物であった。その大きな口と装飾のようなパーツはどこかこれまで戦って来た十二体のバーテックスを連想させた。根拠のない確信がそれを正解だと述べていた。

その時、更に別の熱が頭を撫でる。

次に見えて来た景色は神樹の力によって樹海化した四国の風景であった。しかし禊の知るそれとは一点だけ大きく異なっていた。見たこともない大きな橋が樹海の端に建っており、それは禊には2年前に事故によって、現在大きく破損している瀬戸大橋によく似ている、もしくは破損する前の大橋ではと禊は思った。

しばらく見ていると橋の壁の外側の端から三体のバーテックスが

ゆっくりと進行してくるのが見える。並んでいるのはさそり座のスコーピオン、かに座のキャンサー、そしていて座のサジタリウスの三体であった。

「またやって来た？　早く倒さないと」

突然現れた倒したはずの三体に驚き、禊は急いで変身して迎撃しようと向かうが体は動かない。そこで気づく。禊が見ているのは何時かの記録。少なくとも過去の情報なのだと。見ていると侵攻していた三体のバーテックスの一体に向けて矢が打ち込まれる。矢の飛んで来た方を見ると少し小高い位置に一人、弓を構えた少女がいるのを確認する。その少女を見て禊は驚く。

「東郷さん？　でも何だか少し幼い？」

視界に捉えている少女は知己の人物である東郷美森であった。しかし彼女の纏う勇者装束は禊の知るものとは異なり、和服を連想させ、手に持っている武器もライフルではなく弓であった。

東郷に似た少女の攻撃を合図に更に二人の少女が禊の視界に入り、バーテックスたちに立ち向かっていく。前に立っている少女は禊の知らない少女であった。夏凛を連想させる赤い勇者装束を身に纏い、大型の二本の戦斧を構えた少女が勇猛果敢にバーテックスに立ち向かっていた。そして赤い少女に続く紫を見た時、禊は驚愕に顔を歪める。何時も見ていた包帯こそ巻かれていないが、あれは間違いなく乃木園子であった。初めて見る自由な姿の彼女に禊の視界は固定される。

驚きと元気な姿の園子を見たことで喜んでいたのも束の間。三人は三体の連携に押され始め、ついに幼い美森と園子は吹き飛ばされる。残った最後の赤い少女は一人、果敢に三体のバーテックスに立ち向かう。精霊のバリアが無いためか赤い少女は傷つきながらも三体のバーテックスを押していく。遂に橋の向こう側にまで押すとどういうわけか三体のバーテックスの姿が消え、残ったのは傷だらけの少女一人であった。

そこまで見ていると、不意に視点が大きく移動する。遠くから眺める位置にいた視点は一直線に傷だらけの少女の目の前まで移動する。

こちらに気づいた赤い少女は何かを言っている。しかし見ているだけの禊には音は一切聞こえず、無音の映像であった。
話しかけられている視点の主人はただ前に手を伸ばす。視界に入るのは白色の鎧に包まれた右腕であった。
「待って、何しようとしてるの？」
何をしようとしているのか禊は知らなかった。しかし何か良く無いことが起きようとしている事だけはなぜか理解できた。
次の瞬間、赤い勇者装束の少女は突如、出現した黒い球体に飲み込まれた。黒い球体が収縮して消えるとそこには何も無かった。彼女がいたことを示すものは何も残らず、まるで最初から誰もいなかったようにすら思えた。しばらくしていると突如胸に矢が生えた。見ると怒りの形相をした二人の勇者がこちらにそれぞれの武器を構え、攻撃を繰り出すところであった。
視界が突如飛ぶ。大きく、高く移動するといくつかの黒い球体を少女たちに放ち、遠くに去っていく。そして映像はそこで途切れる。
そして禊はやはり灰色の空間にいた。
「今の映像は何？　誰の記憶？」
底知れない不安感が禊の胸を満たす。まるで自分では無い自分が体の中を這いずり回る錯覚を起こす。怖くなり、自分の体を抱いてみても身持ち悪さは癒えず、孤独感ばかりが増す。孤独感の中、禊は自分以外の何かを感じる。感じた方を見るために真上を見る。
「なに……あれ」
視界に入ったのは大きな目のような空。空に何かがあるのではなく、灰色の空そのものが瞳のように形を成していた。それはただ黙って禊を見ていた。見つめられる禊は体の自由がなくなる。少しづつ体が空になっていく感覚を恐怖が禊を襲う。
突如体が自由になる。今までの変わらない風景と無音空間に変化が現れた。無音をかき消すように鳥の羽ばたく音が耳に入る。振り返るとそこにいたのは一匹の青い鳥。羽ばたいて止まるその取り止めが合う。鳥は頷くと踵を返して飛んでいく。時々、こちらを確認するように振り返る。

「付いて来いって言ってるの？」
　他に手段があるわけでも無い禊は飛んでいく鳥について行く。自然と青い鳥に追いつき、少しづつ灰色の視界が明るくなって行く。
　更に進んで行くとそれまであった浮遊感はなくなり、横向きの重力に引っ張られて禊は落ちて行く。
「小戸禊、お前は私たちの初めての可能性だ。どうかそこではなく、今いる場所を選んで欲しい」
　眩しさに目が眩む中、禊は確かにその声を聞いた。知らない女性の声。しかしどこかで聞いたその声は禊を優しく後ろから押し、灰色の空間から脱出させた。
　次に眼が覚めると禊は何処かのベットにいた。体を起こし周囲を見回す。どうやら病院の一室らしい。取り敢えず手近にあったナースコールのボタンを押すと数秒後、血相を変えた看護師が病室の扉を開け、急いで禊の状態を確認する。
　そこからはてんやわんやの騒ぎであった。看護師に呼ばれたのであろう医者も血相を変えて病室に来る。いくつかの簡単な診察を終えると直ぐに精密検査が始まる。いくつかの精密検査と心理テストを終えると日の暮れた時間帯となりつつあった。しばらく自室となっている病室で大人しくしていると病室の扉が開かれる。
「禊くん！　眼が覚めたんだね！」
　そこにいたのはやはり勇者部のみんなであった。皆心配そうな顔と安心した顔を同時に浮かべて病室に入る。そんなみんなを安心させようと禊は努めて笑顔を作る。そんな能天気な禊に帰ってきたのは夏凜の怒った声であった。
「みんな昨日ぶりだね」
「あんたバカ⁉？　あんた丸二日も意識が戻らなかったのよ！」
「禊、皆あんたが起きないから心配してたのよ」
「風部長……。ごめんなさい、僕どうも満開してからの記憶があやふやで」
　どうやら自分は丸二日意識を失っていたらしい。皆の心配も当然のものだろう。薄らいだ記憶の中で覚えているのは大火球をどうに

かしようと満開を行使した所まで。それ以上は他人事のようにうっすらとしか思い出せなかった。ぼんやりした頭で考えるとすすり泣く声が聴こえる。見ると流れる涙を腕で拭う夏凜がいた。
「皆疲労でどこか調子悪くするし、あんたも、もしかしたら目覚めないんじゃ無いかって……」
すすり泣きでそれ以上、言葉は続かなかった。
体をベットから起こし、立ち上がる。すすり泣いて下を向く夏凜の手を取り、顔をあげさせて目を合わせる。
「ごめんね、夏凜ちゃん。心配かけちゃったみたいで。でも、もう大丈夫。この通り元気だから、もう泣かないで」
「バカね、泣いてなんか無いわよ」
腕で思いっきり涙を拭って、夏凜は背いっぱい強がってみせる。初めてできた夏凜にとっての大事な繋がり。それが断ち切れそうになったことで泣くのはそれだけ彼女にとってこの勇者部が大事なものになった証であった。
「強がっちゃって、もう。全く、夏凜は大げさね～」
「そういえば風部長、その左目どうしたんですか？」
見れば風は左目を隠すように黒い眼帯を着けていた。禊に問われ、手で眼帯を弄りながら風は答える。
「勇者システムを使った事による疲労が原因だって。そのうち治るらしいからそれまでの辛抱ね」
『早く治るといいですよね』
風の言葉に同意するように樹はスケッチブックに文を書いて意思を表示する。それを見た禊は風に対して樹は声を疲労でやられたことを理解する。樹が歌を歌う事が好きなことを知る禊は一度悲しそうに眉を下げ、また優しい表情に戻る。
「そうだね、早く治ると良いね」
少ししんみりした空気をかき消すように風が宣言する。
「それじゃあ、禊も目を覚ましたことだし、祝賀会といきましょうか！」
「はーい、賛成です！」

風が宣言すると素早く友奈もそれに同意、テキパキとあらかじめ用意していたのであろうお菓子を病室の机の上に並べると買ってきた缶ジュースを一人、一つずつ配っていく。全員に缶ジュースが渡ると風は皆を見渡し、改めて口を開く。

「それじゃあ、改めて。皆よくやったー、勇者部大勝利を祝って、かんぱーい」

「かんぱーい」

乾杯の声が重なる。優しめの力でお互いの缶ジュースをぶつけ合い、乾杯の気持ちを交換し合う。それぞれが持った缶ジュースに口をつける中、友奈が缶ジュースに口をつけた時に変な表情をしたのが目に入る。しかし直ぐにいつもの笑顔に戻り、禊は気のせいかと思う事にした。今それを聞く事が恐ろしいとも思った。

祝賀会も盛り上がりの中、流石に時間も遅いということもあり、退院が明日を予定している禊を置いて皆帰路に着いた。お菓子などのゴミの片付けの手伝いを友奈や樹は申し出たが、入院中は暇だから任せて欲しいと禊が押切った。

皆が帰って静かになった病室で禊は静かにベットに腰掛けて窓の外を見ていた。外の景色を見ていると扉をノックする音が聞こえる。誰かと思い、開いて見るとそこにいたのは車椅子に腰掛けた美森であった。

「あれ？東郷さん？　どうしたの？　何か忘れ物？」

「違うわ、禊くん。私もしばらく入院だから別の病室に泊まっているのよ。今少し時間いいかしら？」

「そうだったんだね。うん、今時間は大丈夫だよ。消灯前に帰らないと怒られそうだけどね」

禊は美森を病室に招き入れ、彼女に対面して座るために手近な椅子を運ぶとそこに座った。

「それでどうしたの？」

「禊くん、単刀直入に言うわ。満開した後、どこか体に調子の悪いところは無い？」

「調子の悪いところ？　特に無いけど？」

「不思議ね、満開をした人は皆、体のどこかに不調を示していた……」
美森の質問は不思議なものであった。まるでどこか調子が悪いところがある事が前提の質問だと禊は思った。禊の答えに美森は納得のいかないような様子で考え込む様子を見せた。考え込む美森を見て今度は禊が自身の疑問を彼女にぶつける。
「ねえ、東郷さん。昔どこかで乃木園子って子とあったことある？」
考え事をしていた美森は禊の質問に顔を上げ、質問を受け取り、少し考えるそぶりを見せる。
「いえ、そんな名前の子は知り合いにいないわ。確か乃木家は大赦でも有力な一家の一つだった筈よ」
質問に対して美森の答えは園子を知らないというものであった。では禊が見たあの映像はなんだったのだろうか。その疑問で禊の頭の中がいっぱいになる。園子の家が大赦でも有力な一家という話も今初めて聞いたものであった。確かにあの病院にいた頃、禊は園子の家族に一度もあったことはなく、見舞いに来たところもない事を思い出した。
少し、嫌な予感がした。何故だかわからない。でも今自分は何か重要な事を見逃している。禊はそんな気がした。
考え込んでいた美森は一度考え込むのをやめた。
「今考えても答えは出なさそうね。禊くん、ごめんなさい、こんな夜遅くに問い詰めるような事をして」
「問い詰めるだなんて、そんな。気になったなら聞いてくれて構わないよ」
「そう言ってくれるなら、良かったわ。ごめんなさい。やっぱり乃木園子って名前には心当たりがないわ」
「うん、もしかしたらって思って聞いただけだから気にしないで。僕の勘違いみたいだったよ」
あの映像に居た美森に似た少女はどうやら別人だったらしい。礼儀正しい彼女が人の顔や存在を忘れるとは禊は一寸も思わなかった。
「でも、それをきいてくるなんて、禊くんにとってその人は、禊くんの大事な人なのね」

「うん、僕にとって、とても……とても大事な人だよ。君にとっての友奈ちゃんみたいな」
「まあ」
美森に質問され、禊は少し頬を朱に染めて答える。禊の出した友奈の例えに美森は感嘆の声を上げる。若干、両名の認識に齟齬があったが両者、それに気づくことはなかった。思わぬ友人の一面を知り、美森は少し楽しそうに頬を手に当てる。禊は恥ずかしそうにはにかむ。
静かな病院の中、二人は互いの大事な人の話で盛り上がる。そんな楽しい二人だけの座談会は一時間後まで続いた。
美森も就寝時間が迫り、彼女の病室まで送った禊はそれまでのようにまた眠ってた時に見ていた映像を思い出す。
「あれはどこの景色で、いつの光景なのか全くわからない。手がかりだった東郷さんも園子を知らなかった。でもあれは確かに誰かの目線だった。ということはあれは園子をあんな風にしたやつの視点かもしれないんだ」
暗い気持ちが胸を占める。失われた自身の過去。その手がかりの一端を見つけ少しずつ前進していることを禊は感じていた。
小戸禊はいくつかの失敗をしていた。
その一つは東郷美森が過去二年間の記憶を失っているという事実を知らなかったこと。
二つ目は乃木園子の状態が何ゆえ起こった事なのか。それを知らなかったこと。
無知は罪ではない。知らないという事を知ることこそ、価値があると述べる者もいる。しかしいつだって、無知の代償を支払えるのは自分自身しかいないのだとこの時、誰も彼に伝えてはくれなかった。

第3話　僕が君にあげられるもの

退院予定の当日、禊は担当医に呼び出されていた。初老の担当医はいくつかのレントゲン写真を並べつつ、硬い表情で説明を始めた。
「小戸さん、落ち着いてよく聞いてください。何回かのお役目によってあなたの体には重大な負担がかかっています」
「それは直ぐにどこかが悪くなるという事ですか？」
昨日の夜、満開を行なった全員が何処かしら体調を崩していることを思い出した禊は遅れて自分にもやってきたのかと一人納得しようとしていた。しかし医者の表情は晴れやかなものではなかった。
「いえ、何処かが悪くなるのではなく、お役目の負担によって肉体そのものが大きな負担を受けることになってしまい、命に関わると思われます」
「つまりこれ以上、お役目を果たすと死んでしまうと？」
「そう受け取って貰って結構です」
変身することが自身の命を削るという事実に少なからず動揺するが直ぐに落ち着きを取り戻す。
「そうですか。でも大丈夫です。もうお役目は終わったのでこれ以上負担がかかることも無いはずです」
「そうでしたか。それは良かったです」
もうお役目が終わったことを禊に伝えられ、初老の男性は安心した様子を見せる。そのやり取りを終えると禊は所定のやり取りを終え、退院を終わらせる。平日の午前中ということもあって勇者部たちは来れず、友奈などからは退院の時に来れないことを謝罪するメールがＳＮＳアプリのＮＡＲＵＫＯから来ていたのを禊は確認していた。
まだ入院が長引く美森に軽く挨拶を終えて禊は病院を後にする。病院を出ると初夏の生温かい風が禊を包んだ。外の風景に目を向けると太陽は真上に少し至らない位置にあり、昼前であることを克明に表していた。
中途半端な時間に退院してしまったなと禊は思ったが、これから学校に向かっても授業が終わり、部活動の時間にもこれまた中途半端な

時間に到着する事に気がつく。
ふと、目に入ったバス停の停車駅が園子の病院に近い所を通る事に気がつく。ちょうどバスが来たこともあり、禊は躊躇うことなくやって来たバスに乗る。考えてみればあの病院へ向かうのにバスを使うのは初めてのことだった。
乗っている途中、周囲の建物より高く、まるで天に伸びるように建つ一軒のビルが目に入る。気になり、持っていたスマートフォンで検索してみるとゴールドタワーという名称の建物らしい。そのままバスは進んで行き、禊は目的地のバス停で下車した。
見慣れた道を歩き、少しすると見慣れた病院にたどり着く。中に入り、彼女の病室へ入る。相変わらず、ものものしいお札や鳥居を無視してベットにいる彼女の元へ歩く。しかし近づいても反応がない。まさかと思い、顔を覗き込んでみると身を瞑り、穏やかな寝息を立てていた。
「あれ？　こんな時間に昼寝かな？　まあしょうがないか」
間が悪かったと思いつつ、禊の表情は柔らかいものであった。禊のために用意された折りたたみの椅子を病室に備え付けられた収納から取り出して座る。禊は入院中暇だろう、と友奈が持って来た植物図鑑をカバンから取り出して読み始める。
しばらくしていると本に描かれたひまわりの向こうから可愛らしいアクビが聞こえる。
「ふぁー……。あれ？　みーちゃん、来てたの？」
少し寝ぼけた様子で何度か見えている左目を瞬きして園子はいつの間にか来ていた禊を発見する。
「うん、今日が退院の日だったからね。時間があったから来たんだ。君は寝てたみたいだけど」
「私が寝ることが好きってみーちゃん知ってるでしょ？　今日もいいお昼寝日和だよー」
全身のほとんどが動かない不自由さを感じさせない穏やかな声が禊の耳を撫でる。ほかの誰と話すときとも違う優しさを含んだ表情で禊は質問する。

「気持ちよさそうに寝てたけど、どんな夢を見てたの？」
「見てた夢？　……うん」
聞くと園子は笑みを深くする。少し照れくさいのか、困ったように眉を少し下げ、でも嬉しそうに園子はぽつり、ぽつりと話し出す。
「……綺麗な海辺をね、歩いてる夢。濡れて少し硬くなった砂浜を鳴らしながら、寄せてくる波を踏んだり、回ったりして波のリズムで踊る夢。珊瑚礁が綺麗でね、……えへへ、少しメルヘンかな？」
「そんなことはないよ。誰だって、見たい夢を見ればいいよ」
恥ずかしそうに語った園子を見て、話を聞いて少し、本当に少しだけ後悔した。園子の見た夢は動かない体で砂浜を歩く夢。今は叶わない夢なのだ。体が動かないこともあるが、彼女はこの病室から出ることが許されていない。二重の意味で叶わない夢、それを語らせた事を禊は後悔した。
そこで一つ、禊は思い出す、勇者のお役目を行う者たちは大赦からそれなりの対価を得られという事。もしかしたら。そんな思いが禊の思考を満たし、方法を考える。
変に期待はさせたくない。だから今は黙っておく。
もう一つ、気になっていたことを聞く。入院していた時、見たあの夢。勇者の装束を身に纏い、樹海で戦っていた園子と美森によく似た少女ともう一人の赤い少女。あの三人の夢というには明瞭すぎるあの映像。美森は園子を知らなかった。でも園子は美森を知っていた。禊は事実を知りたいと思った。自然と表情が硬くなるのを感じる。
「……ねぇ、園子。もしかして園子は今まで勇者だったことがある？」
その質問をした時、禊の見た園子の表情は今まで見たことのないものであった。驚き、不安、悲しみ、焦り、恐怖、いくつもの感情が眼に映されては変わっていく。震えた声で園子は禊に問う。
「みーちゃん、何かを思い出したの？」
「ううん。ただ、意識がなかった時に見た夢で君が戦っているのを見たんだ。もしかしたら吸収したバーテックスの記録か何かを見たのかなって」
後から聞いた話ではあるが満開をした禊の満開特性はあの黒い球

体によってバーテックスを吸収する様な力があるらしい。そのため吸収したレオ・スタークラスターの記録を見たのでは、というのが禊の予測であった。

長い沈黙があった。園子は考え込む様に瞳を下におろし、禊と視線が交わらない。長い沈黙を破ったのは禊であった。

「ねぇ、園子。どうして何も答えてくれないの？」

返答は沈黙であった。—そして

「ごめんなさい、みーちゃん。今は話せる勇気が無いの……。だから……、だから少しだけ、待っててはくれないかな？」

「それは……」

視線が交わる。申し訳なさと悲痛を含んだそれが禊を貫く。それ以上、禊は問い詰める気にはなれなかった。

「分かったよ、もうこの話はやめよう。園子が気の向いた時でいいから、いつか聞かせて欲しい」

「ごめんね、ごめんねみーちゃん」

禊は立ち上がり、園子の側へといく。動かない彼女の左手をそっと両手で包み込む。

「いいんだ、僕は君を追い詰めたいわけじゃ無いんだ。ただ本当のことが知りたくて、でもそれが君に痛みを与えるなら、もういいんだ」

精一杯の笑顔は何処かぎこちない。禊の中を後悔が巡る。

違う、僕は君にそんな顔をして欲しかったんじゃない。ただ本当の事を知りたいだけなのに、どうしてこうなってしまうの？

「ごめんね、園子。今日はもう帰るよ」

「気をつけて帰ってね、みーちゃん」

気まずくなり、禊は逃げ帰るように園子の病室を後にした。通い慣れた道はどうしてか今日は長く感じた。

それから数週間が経った。

学校は夏休みに入り、蝉の声とうだる暑さの中、勇者部は通常営業であった。美森も退院し、風の眼帯姿や樹のスケッチブックを用いた筆談も見慣れた頃、部室の中で禊は悩み、うなだれていた。

かれこれ数週間、悩んでいた様子の禊であったが、心配する友奈や

風に何かあったのかと聞かれても大丈夫の一点張りで話そうとしない。今日もため息が口から漏れる。
ただ一人、禊以外に現在、部室内にいた夏凜はついに痺れを切らした。
「禊！　あんたねぇ、いつまでそうしてうだうだと悩んでるのよ！」
「いいんだ、心配しなくていいよ。ほっといて」
答える禊の声に覇気はない。そんな禊の態度に夏凜は更に苛立ちを重ねる。
「あんたがそんなに暗いと友奈も風も東郷も樹も、みんな心配してんのよ。なんかあんのなら相談しなさいよ」
「そんなこと言ったってこんな事、人に相談しても……」
「それを決めるのは本人じゃないわ。それにいつかの借り、今日返させてもらうわ。勇者部五箇条、悩んだら相談、あんた達が決めた事でしょ？」
浮かない顔の禊と自分で言っていて恥ずかしくなったのか、赤くなった顔の夏凜の視線が交わる。結果は禊の根負け。勇者部の五箇条を引き合いに出され、夏凜が勇者部に入った時のことを引き合いに出され、そして自分の態度がみんなを困らせることを引き出され、禊は諦めが自分の中でつくのを自覚する。
「……分かったよ。話せばいいんでしょ」
「そうよ、最初っからそうすればいいのよ。だいたいあんたなんか変よ、この間の戦いからしくないっていうか」
夏凜から見て、この数週間の禊は違和感を覚えるものであった。夏凜の知っている禊であれば、相談を誰かに行っただろうし、悩みを一人で抱え込もうとするとは思えなかった。
「そうかな？　そうかもしれない。これまで悩むことも無かったから、少しナイーブになってるかもしれない。夏凜ちゃん、聞いてくれる？」
「うだうだ言ってないで、ドーンと私に任せなさい」
自分の胸を叩いてアピールする夏凜が禊には頼もしく思えた。少し勇気を貰えた禊は少しづつ話し始めた。

「友達を不本意に追い詰めて、傷つけちゃったんだ。会いに行って顔を合わせるのも辛くて、もうすぐ彼女の誕生日で祝いたかったけど、このままじゃあそれも難しくて、どうしたらいいのかな？」
話し始めると素直な言葉が禊の口から流れていく。聞いて夏凜は困った。友達との仲直りなんてどうしたらいいかという悩みは友達の少ない夏凜には難易度が高かった。今度は夏凜が頭を抱える番になった。
大見得を切った以上、分からないと答えるのは夏凜自身のプライドが許さなかった。だから夏凜は自身の経験を生かすことにした。
「誕生日なら祝ってあげればいいじゃない。誕生日を祝われて嫌な奴はいないわよ」
「夏凜ちゃんもそう思うの？」
「そ、そうよ！　祝われたら嬉しいのよ！　そのまま仲直りも一緒にやれば無敵よ！　完成型の言葉に嘘はないわ！」
後半、自分の思いを聞かれて少し早口になり、喋りに訳の分からない言葉も混ざっていた。しかし一生懸命な夏凜の言葉は、勇気は確かに禊に届いていた。
「そっか……。誕生日、祝われたら嬉しいのか」
「あんた、私の誕生日の時はあんなに強引だったのに、そんなことも分からなかったの？」
「そういえば、僕の誕生日を祝ってもらった記憶ないかも」
唐突な禊の発言に夏凜は驚く。
こいつ自分も祝ってもらったこと無かったのに私の時はあんなに盛り上がってたの？
そんな感想が夏凜の頭をよぎった。
「はぁ⁉？　あんた誕生日いつよ？」
「確か１０月の１１日だよ」
「確かって何よ、自分のことでしょ？」
「僕、２年前からの記憶がなくてさ、見つかった日なんだよ１０月１１日って」
さらに夏凜は混乱する。禊が記憶喪失である事実に驚き、普通記憶

がないことをこんなにも軽く言うものなのだろうかと疑問を持ち、そもそも見つかった日を誕生日にするのはおかしくないかと眉をひそめる。というかその日はたしか大橋の……？

おかしい所だらけの禊経歴に怪訝になる夏凜をよそに、禊の表情は晴れやかであった。

「そうか、そうだね。ありがとう、夏凜ちゃん。どうしたらいいか、多分だけど分かったよ。相談に乗ってくれて、ありがとう。少し行く所が出来たから行ってくるよ」

そう言うと禊は部室を後にした。

一人置いてかれる形となった夏凜は呆然とするほかなかった。それぞれの助っ人から帰ってきた風達が見たのは夕暮れの部室で一人呆けた夏凜であった。

「あれ？　夏凜一人？　禊のやつはどうしたのよ？」

「禊のやつなら用事で帰ったわよ」

風達が帰ってきて夏凜はどうしたものか悩んだ。そもそも自分たちは小戸禊の何を知っているのだろうか？　考えてみればそれほど多くのことをよく知らない事に夏凜は気づいた。悩んだら相談という言葉が脳裏をよぎったが勝手に個人のことを話すことに抵抗を覚えた。だから今度、本人に話させよう。夏凜はそう決意した。

場面は変わって、少し遅くなった時間、日はすでに落ち、電灯が夜道を照らしていた。そんな時間に禊は大赦の本部がある施設に来ていた。よく顔を合わせる、といっても禊からすれば大赦の仮面をつけているため素顔を知らないが、大赦の神官と対面していた。

「……と言う事でそれを行えるように手配して欲しいんです」

禊の嘆願を聞いていた神官は頷いた。

「嘆願、了承致しました。まだ正式な返答は出来ませんが、勇者様の嘆願であれば恐らく通ると思われます」

「ありがとうございます。よろしくお願いします」

嘆願が通ると聞かされ、禊は喜ぶ。禊は軽い足取りで帰路に立つ。

禊の帰った後、一人になった神官は一人、必要な書類の作成に入っ

た。遅い時間の作業であったためか、神官はらしくもなく、独り言を呟く。
「しかし皮肉なものだ。祀られている園子様を禊様が外へ連れ出すなんて。やはり神に近くなってしまうと私たちには理解が及ばなくなってしまうのか？」
言い終えてから、失言に気づいた神官は周囲を見回す。当然、周囲には誰もいなかった。
でも彼は見ていた。彼は聞いていた。アレの一部になった以上、彼はこの四国の全てを同時に見て、聞いていた。表情もなくただ見下ろして。
神樹の中の奥底。小さな腫瘍が人の形を成そうとしていた。

八月も終盤。８月３０日。学生達は夏休みが終わることを嘆く頃、しかしてここの時間は止まっていた。
窓もない病室、時間の流れも曖昧なこの空間にいた園子にとって、時間の流れなど無意味なものであった。朝の時間になれば目が覚めて、体が動かないため何をするでもなく一日が終わり、また眠くなって、目が覚めたら次の日。誰も訪れない病室は静かだった。
内臓機能の停止した園子にとって固形物など二年間口にしておらず、食事と称して出てくるのは栄養の点滴。まるでループする曲のような毎日。出来るなら逃げ出したかった。どうして自分がこんな目に会わなければならないのだろうか。でも選ばれたのは私なのだから仕方がないという思いでそんな気持ちを隠して目をそらす。
そんな繰り返しを壊してくれるのは頻繁にやってくる禊であった。彼が来る毎回が楽しかった。彼が来てくれれば、その日あったことを話し、笑っていられた。
でもそんな日々は唐突に終わってしまった。壊してしまったのは私だ。あの日からおおよそ一ヶ月、禊は訪れていなかった。
園子は自嘲する。真実を知っていたのは私。真実を話さなかったのも私。結局、自分のために真実を隠して一番大事なものを失ってしまった。優しさか、利益か判断しかねるが事実を隠す大赦と自分。そ

こにどれほどの違いがあるのだろうか。
唯一動く左目がベットに備え付けられた台の上に置かれた時計を見つける。可愛らしいオルゴールをモチーフにしたそれは禊が持ち込んで置いていった、このものものしい部屋から浮いたものであった。
時計の示す時刻は２３時。８月３０日も、もう終わりであった。一人の時間のまま、園子の誕生日は静かに終わろうとしていた。
「もし勇者に選ばれなかったらわっしーやミノさんに祝ってもらえたのかな？　もし本当のことをみーちゃんに話せていたら祝ってもらえてたのかな？」
後悔の言葉がとめどなく溢れた。自然と涙が生きている左目から溢れ、感覚のない頬を伝って行く。少女のすすり泣く声が病室に響く。でも自分に泣く資格なんて無いと必死に声を押し殺す。
普通の幸せなんてもうわたしには無い。
現実から目をそらすように、必死に目を閉じて園子は寝ようとした。寝てしまえば、こんな気持ちを感じなくて済む。好きだった寝ることさえ、今は逃げるための苦しい手段であった。
必死に寝ようとする苦しみの中、突如病室の扉が開く音で静寂が破られた。
園子は驚いて、涙で滲んだ視界で病室の扉に視線を向ける。
そこにいたのは禊だった。
「迎えに来たよ。園子」
最後に見たのとは違う、ぎこちなさの無い優しい顔をした禊がそこには居た。
「みーちゃん？　どうして来たの？」
思ってもみなかった訪問者に園子は言葉に詰まる。
そんな園子の様子に禊は微笑む。
「だって今日は君の誕生日でしょ？　」
そう言って禊は病室の中に入る。
「来ないでみーちゃん。こっちに来ないで欲しいの」
動かない頭を必死に動かそうとする。分かっていても泣いた顔

なんて見られたくなかった。でも禊はそんなこと知らないとばかりに歩調を変えず、園子の側にやってくる。園子はぎゅっと瞳を閉じる。優しく涙が拭われる感覚がまぶたの上を歩く。

「ちょっとバランスが悪かったらごめんね？」

小さく謝る声が聞こえると次に瞳を閉じたままの園子が感じたのは浮遊感であった。驚き、目を見開くと目の前に禊の顔があった。背中と膝の裏に腕を回され、抱き上げられる。園子を抱き上げたまま禊はベットを後にする。

密着し、胸に触れる耳が禊の鼓動を伝える。それと一緒に別の早鐘を打つ錯覚の鼓動を園子に伝えた。

一歩、一歩と歩き、病室と廊下の境界にたどり着いた、二年間、渡ることのなかったその境を禊は何ともなく超えて行く。

廊下に出ると禊は準備してあった車椅子に園子を乗せて進む。

「じゃあ、行こっか」

「え？　でも私外に出たらダメで……」

そこで園子は気づく。本来であればいるはずの大赦の職員や病院の関係者が誰一人いない。そのまま禊は園子を乗せた車椅子を押して病院を後にする。

病院を出て海岸線沿いの道を進んで行く。不思議と誰にも会わず、無言のまま二人は進んで行く。綺麗な鈴虫の鳴き声だけが聞こえていた。

それなりに長い時間をかけて、気がつけば園子は波の音を聞いていた。そのまま砂浜に進みもうすぐ波打ち際というところで始めて禊は車椅子を止める。

園子の視界いっぱいに入っていたのは満点の星空と静かに波が押し寄せる海だった。

言いたい事は沢山あった。でも園子は何も言葉を発さず、静かに目に入るものを眺めていた。気がつけば涙がまた頬を伝っていた。でも今度は違う意味を持った涙だった。

２年ぶりに見た星空と海はどうしようもなく綺麗でただ無言が心を代弁していた。

「お誕生日おめでとう、園子」
祀られ、崇められ、自由を失った少女を連れ出す事。それが禊なりの誕生日祝いであった。
「夢の中の砂浜とは少し違うけど、どうかな？　良かった？」
「うん、うれしい。凄く、凄く、凄くうれしい」
「ならよかった」
心の底から安心したと声が言っていた。
「それからこれも。ここじゃあサンゴ礁は見られないから」
そう言って禊は肩に掛けたカバンから紙袋を取り出す。紙袋から取り出したものを広げて園子の首にかける。
首にかけられたものを園子が確認するとそれは赤い珊瑚のネックレスであった。
凪いだ優しい海、病室からは見られない外の風景、満点の星空。禊なりに園子の見た夢を叶えてあげたい。そんな願いが込められていた。
禊に車椅子を支えられながら、園子はゆっくりと話し始めた。
「ごめんね、みーちゃん。いつかは話さなくちゃいけないのは分かってるの。でも話したらきっと今まで通りでは誰もいられなくなる。そう考えたら怖くなって、何も言えなくて逃げてた」
「うん」
優しい声で禊は答える。
「でもきっとそれは、そうしてるだけで誰かを傷つけるなんて私、思ってなくて」
「うん」
「だからね？　みーちゃん、もう私は本当のことを話さないことをやめるよ」
「無理はしなくていいよ。　もし園子が勇気を持てないなら、園子が勇気を持てるまで何時までも待ってる」
振り返らず園子は続ける。
「だからね？　勇気が欲しいの」
「どうしたらいい？」

「ぎゅっとしてほしい」
何も答えず、禊は後ろから園子を抱き締める。もう感じられなかった鼓動が聴こえる。
今ここで生きてることを禊の鼓動を通じて園子は感じる。自然と嬉しさで口角が上がって行くのを感じる。
「もう大丈夫。ありがとう、みーちゃん」
「もういい？」
「うん」
名残惜しそうに抱きしめていた腕を離し、元の姿勢に戻る。
姿勢を直し、二人は星空と凪いだ海を静かに眺める。もう見られないと思っていたものをまた見られた、禊と共に見られた事に園子は胸が温かくなるのを感じていた。
叶わないと思っていた夢が叶った。来て欲しかった人が来てくれた。もう祝ってもらえないと思っていた誕生日を祝ってもらえた。たくさんの勇気をもらえた。
だからきっと大丈夫。もう逃げない。それが勇者たちを苦しめるとも、みーちゃんを苦しめてしまうとしても、真実を伝えないことだけはやめよう。もしみーちゃんが苦しむなら一緒にその苦しみも分かち合おう。もうほとんど何も残ってない私にあげられるものぜんぶを彼にささげよう。私がそうしたいからそうする。みーちゃんは受け入れてくれるかな？

第４話　そして僕は暴かれた

園子の誕生日から二日後、夏休みも終了し、禊たち学生は二学期に突入した。

授業も終わり、教室を後にして禊は勇者部の部室へと向かっていた。部室である家庭科準備室への廊下の途中、美森の車椅子を押す友奈の背がみえた。二人を見つけた禊は少し小走りになり、二人に追いつく。

「やあ、二人とも」

「あっ！　禊くんヤッホー」

「こんにちは、禊くん」

一週間ぶりに禊にあった二人は、沈んでいた彼の表情が晴れやかな事に気がつく。

「禊くん、今日はなんだか生きがいいね。悩み事は解決したの？」

「友奈ちゃん、それじゃあまるでお魚の鮮度みたいな言い方だわ。でも本当に元気になって良かったわ」

「そうだね、みんなには随分と心配をかけたみたいだから、ちゃんと一言謝っておくよ。二人とも心配してくれてありがとう」

そのまま楽しい雰囲気のまま三人は部室へ到着する。車椅子を押す二人に先行して禊が扉を開く。

「小戸禊、ただ今到着しました！　みんなに心配かけてしまい申し訳……ってあれ、どうしたの？　三人とも」

元気よく挨拶を行おうとしたところで禊は風や樹、夏凛の様子に元気が無いことに気がつく。よく見ると三人の視線は机の上に置かれたアタッシュケースに向けられていた。アタッシュケースには部員全員分のスマートフォンが納められていた。それは大赦から提供されていた勇者に変身するための専用のアプリが入ったものだった。

「え？　どうしてこれがここに？　バーテックスはもうやっつけたはずじゃあ？」

「驚くのもわかるわ。どうやらまだバーテックスに生き残りがいたらしいの」

驚く禊に風が補足する。
「生き残りですか？」
「そう、戦いは延長戦に突入した。退社からの連絡をまとめるとそういう事。だからみんなにそれが帰って来た」大赦が退社になってました。
終わったはずの戦いがまだ続くと知り、部室内に緊張感が走る。顔を曇らせる部員たちを見て風が申し訳なさそうに続ける。
「本当に、毎回いきなりになってゴメン……」
「先輩のせいじゃ無いですよ。悪いのはバーテックスの方で、仕方ないことですよ」
「東郷さんの言う通りですよ！　先輩は何も悪くないです！」
「ふん！　まあ、私たちはバーテックスの一斉攻撃も凌いだんだから問題ないわ！」
『勇者部五箇条、なせば大抵なんとかなる』
申し訳なさそうな風をフォローするように美森が励ます。それに友奈、夏凛、声の出せない樹はスケッチブックに書いて、それぞれがそれぞれの言葉で風を励ます。しかし一人、禊だけは申し訳なさそうに頭をかく。それを見た風は大赦からの連絡を思い出す。
「そういえば、禊。あんたこれ以上変身したらマズイんだっけ？」
「はい、お医者さんからはこれ以上はまずいっていわれてて」
「大丈夫よ。あんたが休みでも私たちがいるんだから、任せられるところは任せなさい！」
『私たちに任せてください！』
もし訳なさそうな禊を鼓舞するように背を叩きながら夏凛が告げる。そんな二人の様子を見て他の者たちも夏凛がこの勇者部の一員になったことを再度認識し、思わず笑みがこぼれる。そんなみんなの表情に気づいた夏凛が慌てる。
「な、何よあんた達、そんなにニヤニヤして」
「べっつに～？　夏凛さんも随分と馴染みましたな～、なんて思ってませんとも～」
代表して風がみんなの意思を代弁する。そんなことを言われた夏

凜が恥ずかしがらないはずがなく、顔を赤くして怒る。寝れた様子の風はそれをのらりとかわし、話をまとめる。
「ありがとうみんな、ようし！バーテックス！　いつでもかかってこい！勇者五人がお相手だー」
　窓を開け、夕暮れの日に向けて風は叫ぶ。
　数週間後、バーテックスは現れていなかった。
「なんでよー、来たっていいじゃない！」
「まー、平和ならいいじゃないですか」
「あんな、啖呵切っておいてこれとはね」
　少し前に切った啖呵が無意味になった風は納得いかないという風体であった。禊は笑って流し、夏凜は呆れていた。三人と樹が机に突っ伏していると部室の扉が開かれる。
「結城友奈入りまーす」
「こんにちは」
　声の方に顔を向けて見ると美森と共に敬礼のポーズをした二人が目に入る。そんな二人に夏凜や、樹、禊も合わせて敬礼を返す。風だけは左目につけた黒い眼帯を意識してか、ロックバンド風のハンドサインを敬礼の代わりにした。そんな風の一工夫に気がついたのか友奈が笑う。
「すっかりそのキャラも定着しましたね」
「そうなのよ～、いやーこんなに眼帯が似合うなんてね」
　他からはよく分からないセクシーポーズらしき何かを繰り返す風を軽く流し、禊は彼女の足元から出てきた小さな影を見つける。小さな影は風の足元から飛び出すと近くにいた美森に飛びついた。
「きゃっ！　何かしらくすぐったい」
「フェレット？」
　美森に飛びついたものはフェレットのような胴の長い生き物であった。以上なのは本来であれば尾であるはずの部位がデフォルメされた手持ち鎌の刃になっていることだった。美森に飛びついたそれに気がつくと風は美森に謝罪した。
「あぁ、ごめんごめん、それ私の新しい精霊。犬神と違ってあんまり言

うこと聞かなくてさ」
「先輩の新しい精霊？」
　風の新しい精霊である鎌鼬は興味有り気に美森の周りを這い回る。そんな主人のピンチに反応したのか美森の精霊四体が自ら現れ、鎌鼬を数で囲って追い払う。
「いつ見ても、東郷さんのところは賑やかでいいね」
「なんていうか、随分と賑やかになったよね。色々いるし」
　苦笑を含んだ声を出しながら禊は部室全体を指差す。自主的に出現した精霊に感化されたのかそれぞれの精霊が勝手に現れて、部室が狭く感じるまでになっていた。
「なんて言うか、百鬼夜行？」
「これだけいたら精霊で文化祭の出し物にできそうだよね、東郷さん」
「ダメよ、友奈ちゃん」
「ですよねー」
　一般人には目に見えない精霊ではたとえ何をしても心霊現象にしかならず、問題になることは目に見えていた。友奈にそれぞれが自身の精霊を紹介している間、禊は自身の精霊、二体に餌付けをしていた。
「ほーら、マサカドー、買ってきた水羊羹だぞー。ランスロットには紅茶だねー」
　カバンからパック詰めのお菓子を取り出し、甲冑を着込んだ精霊、マサカドの口に寄せる。マサカドは小さな両手でそれを受け取ると少しづつ咀嚼し始める。もう一体の騎士甲冑の精霊ランスロットにはペットボトルの紅茶を渡してこちらはペットボトルをラッパ飲みし始める。小動物チックな精霊二体の仕草を禊は笑って見ていると横から夏凜が声をかけた。
「禊、あんたは精霊増えてないの？」
「うん？　特には増えてないよ？　夏凜ちゃんも増えてないの？」
　少し聞きにくそうに聞く夏凜の様子に禊は疑問を覚える。なぜこのような事に聞きにくそうにするのか。
「私はいいのよ。なんたって義輝は一体で十分なくらい優秀な精霊なんだから」

「でもその義輝、牛鬼に食われてるよ？」
「え？　……って、ギャー！」
　振り返ると件の精霊、義輝は体の大部分を友奈の精霊、牛鬼に咀嚼されているところであった。もはや見慣れた光景ではあったが夏凜は急いで義輝を救出しに飛び出す。
「ふう、やっとみんな端末に戻ったわね」
　スマートフォンを操作して出てきていた精霊全員がスマートフォンの中に戻っていた。各々勝手に動く精霊に皆、少し疲れていた。
『敵…　いつ来るのかな　ドキドキ』
「そうね、私の感だと来週辺りが危ないわね」
「実は敵の襲来は気のせい！　だったらいいにのね～。弘法も筆の誤り、神樹様だって予知のミスくらい……」
　その時、風の台詞に被せるように各々のスマートフォンから樹海化警報のアラームが鳴る。
「噂をすれば、なんとやらってやつかな？」
「風が失礼なこと言うから、神樹様からの適切なツッコミね」
「あんただって感、外してるじゃない！」
「そんなこと言ってないで樹海化来るよー」
　いつもの口喧嘩を始めた風と夏凜をよそに外の景色は光に包まれるのを目視しながら禊が締める。それ以上、何かを言う前に部室内、ひいては四国中が神樹の加護の光に包まれた。
　光が収まると禊は見慣れ始めた樹海の中にいた。ポケットのスマートフォンを取りだし、位置情報を確認する。少し離れた場所で高速で神樹に向かって移動づるアイコンが確認できる。同じように確認をしていた美森がつぶやく。
「どうやら敵は一体、樹海の森を抜けて一気に神樹様に向かっているようです」
「今回の一体で延長戦も終わり。ゲームセットにしましょう！　行くわよ！」
「はい！」
　風の呼びかけに禊以外が答え、画面を操作して変身を行う。それぞ

れが自身の勇者装束に着替える。禊一人はそれを見るだけになった。医者に止められている以上、禊は変身を行うわけにはいかなかった。見ているだけの自分の歯痒さが募る。変身を終えた時に夏凜以外の満開経験者たちが自身の満開ゲージ

変身を終えて、風は号令をとる。風の号令を受けて、またいつかのように円陣を組む。またかと夏凜は呆れた態度こそすれ、自然と円陣の中に入る。

「敵さんをきっちり、昇天させてあげましょう。勇者部、ファイトー！」

「おおー」

声が重なる。円陣を組み終え、勇者部たちは強化された身体能力で跳躍して巨大な樹海の上を飛ぶ。唯一変身していない禊は夏凜が抱えて飛ぶことで対処する。高速で走る双子座のバーテックス、ジェミニが上からよく見える位置に移動したところで集合する。その姿を遠目に見て風が首をかしげる。

「あれ？　あいつ、前に樹が倒さなかったけ？」

「もしかしたら二体いる事が特徴のバーテックスなのかもしれません」

「二体でワンセット。双子ってコト？」

「どっちにしろ殲滅して終わりよ」

「それにしても早いね、２５０キロってことは新幹線とかと変わらないスピードなのか」

各々が思ったことを告げて行く。いざ倒しに行こうと言うところで皆の動きが止まる。そこで禊は気づく。皆少し、戦うことに怯えていることに。前回の戦いから夏凜以外、体のどこかに不調をきたしている。もし今回の戦いでもどこか不調になったらと思うと足がすくむのだろう。変身できない禊は自分だけ戦えないことを申し訳なく思う。

沈黙を破ったのは友奈の叫びであった。自身の顔を軽く叩き、己を鼓舞するように声を上げる。いきなり叫んだ友奈に皆はぎょっとして振り向く。

「先輩！　あの走ってるのを封印したら、それで生き残りも片付くんですよね？　だったらとっとと倒して文化祭の劇の話、しましょう！」
「ちょっと、待ちなさいよ。私も！」
そう言うと友奈は皆を置いて飛び出していった。出遅れた夏凜も我もと飛び出す。飛び出していった２人がいなくなると呆けていた４人も慌てて動き始める。風と樹は２人の後を追い、美森はその場でうつ伏せになり、狙撃の姿勢に入る。変身しておらず、機動力に欠ける禊は美森の横に腰を下ろし、スマートフォンに注目した。
スマートフォンの望遠機能を使い遠くの４人を観察する。画面からは友奈と夏凜の息のあった連携によって転ばされるジェミニが確認できた。
「他に敵影なし、あいつさえ倒せばこの延長戦も終わり」
「そうだね、今確認したけど、壁の方からの増援もないみたいだ。あっ！　立ち上がる」
「問題ないわ」
同じように狙撃銃のスコープでジェミニの動きを確認していた美森の行動は早かった。素早く小さな的に狙いを定めて引き金を引く。それだけで放たれた銃弾はおそらくジェミニの頭部にあたる部分を吹き飛ばす。頭部を失ったジェミニはそのまま動かなくなる。
封印の儀が開始され、御霊が暴き出される。放り出された御霊は幾つにも増殖し、辺り一面に広がる。飛び上がった友奈が新たに追加された自身の精霊の力で足に炎をまとい、空中からの飛び蹴りを放つ。
精霊によって強化された必殺の飛び蹴りは爆炎と衝撃を放って周囲の御霊を殲滅する。御霊が全て破壊されたことにより、ジェミニは砂へと帰った。
戦闘が終わり、美森に抱えられて禊は皆の元へ移動する。地面に着地し、合流する禊と美森。ふと気になって見てみると友奈の右の手甲の満開ゲージが増えていた。全員がそれに気づき、表情を曇らせる。
そんな友奈を心配したのか美森は友奈の手を両手で包んで支える。
「大丈夫？　友奈ちゃん。体は平気？」

「うん！　大丈夫だよ、元気そのものだよ、みんな怪我なく終わってよかったよ」
友奈が言い終わったあたりで、周囲に展開されていた樹海化が解けはじめ、光が周囲を包み込み始める。
夏凜は怒っていた。皆の制止を振り切り、勝手に一人飛び出したことを怒っていた。
「いい？　友奈今日帰ったらみっちり説教よ。あんなことして私が黙っているとでも……。あれ？　友奈はどこ？」
樹海化が解除され夏凜と風、樹は学校の屋上にいた。説教気味になっていた夏凜はそこで初めて友奈がいないことに気づく。
「友奈どころか、東郷と禊もいないじゃない⁉？」
更に美森と禊がいないことに気がついた風が声を上げる。声の出ない樹も慌てて周囲を探してみるが学校の屋上には三人以外誰もいなかった。
樹海化が解け、光が収まった時、禊たちはいつも自分たちが転送されていた学校の屋上にいないことに気がついた。周囲を見渡すと目に入ったのは大きく破損した瀬戸大橋であった。
「ここは、……大橋のところ？」
「そうだよ～、みーちゃん。そして待ってたよ～、わっしー。会いたかった～」
聞き慣れたのんびりとした声が聞こえる。振り向いて確認するとそこにいたのは園子であった。珊瑚の首飾りを着けた彼女は病院のベットごとそこにいた。彼女の姿を確認した禊は驚き、慌てて彼女の側に駆け寄る。
「どうして、園子？　こんなところに出てきていいの？」
「うん。今日は伝えたいことがあったからこうして呼び出したんだよ。上手くいってよかった」
そう言う彼女の視線は禊を一度見ると友奈と美森の方へ移された。そして改めて心中を吐露する。その声は今まで禊の聞いたことのない声であった。
「会いたかったよ、わっしー」

「わし？　ていうかなんでベッドがこんな所に？　ドーンと？」
「呼んでたんだよ？　あなた達が戦っているのを感じたから」
園子の視線は美森ただ一人に注がれる。その視線は懐かしい人に会う時のものであった。その視線に友奈は美森に確認をとってみることにした。
「えっと、東郷さんの知り合い？」
「いいえ、初対面だわ」
どこか自信なさげに美森は答える。少し園子は気落ちしたそぶりを見せ、気持ちを切り替えて微笑む。
「わっしー、ていうのは私の大切な友達の名前なんだ～。その子のことを気にしてつい、口に出ちゃうんだ。ごめんね」
「あの、私たちを呼んだんですか？」
「うん、その祠からなら、バーテックスと戦った後のあなた達を呼び出せると思ってね」
園子の口からバーテックスという勇者しか知らないはずの名称が出たことに対する反応は様々だった。友奈と三森はその言葉が出たこと自体に驚き、禊は己の予感が悪い方向へ当たりつつあることを察した。確認のため友奈が口を開く。
「バーテックスをご存知なんですか？」
「一応、あなた達の先輩に当たるのかな？　私、乃木園子っていうんだよ」
「わ、私は讃州中学2年、結城友奈です」
「東郷美森です」
「友奈ちゃんに、……美森ちゃん、か」
美森の名を呼ぶ時、少し寂しげな声であった。まるで他に呼び名があったかのようで。禊は何も答えずただ黙って顔を俯いていた。友奈にはそれが判決を待つ被告人のように思えた。禊を横目に見つつ、友奈は続ける。
「先輩ということは、乃木さんも？」
「うん、私も勇者として戦ってたんだ。二人の友達と、エイエイオーってね。今はこんなになっちゃったけどね」

そういって園子の視線はもう動かない自身の四肢を見ていた。
園子がかつて勇者であった事実。一つ目の事実を禊は知った。
「バーテックスが先輩をこんな酷い目に合わせたんですか？」
明らかに重体であるその子を見て友奈の声が震える。しかし勇者には精霊のバリアがあるはず、ならばなぜここまで重傷になってしまっているのか。それに対する答えは否定であった。
「うんとね、敵にやられたって訳じゃなくてね、えーと友奈ちゃんたちは満開、したんだよね？　わーって咲いて、わーって強くなるやつ」
「はい、しました。わーって強くなるやつ」
「私もしました」
満開を行なった事実を聞いて園子は少し、眉を下げる。そして意を決したように話し始める。
「咲き誇った花はその後どうなると思う？　満開を行なった後に散華っていう隠された機能があるんだよ」
「散華？　華が散ると書く散華？」
「満開を行なった後、身体のどこかが不自由になったはずだよ」
その言葉に友奈と三森は息を飲む。味覚、左耳の聴力。聞いた話によれば風の左目、そして樹の声。心当たりはいくつもあった。
乃木園子は続ける。華一つ開けば一つ散る、華二つ開けば二つ散る。満開システムとはつまり、勇者が神樹の力を直接行使する代わりに身体の機能一つを贄として捧げる仕組みであると。そして今の自分があるのは戦い続けた結果だと。満開の代償に身体の自由が失われたと。
勇者システムの真実。禊が知った二つ目の真実であった。
そこまで聞いて友奈は声を震わせながら質問する。
「ど、どうして。どうして私たち何ですか？」
「いつだって、神様に見初められて供物にされたのは無垢な少女だから。汚れなき身だから大いなる力が宿せる」
「……みんなは供物になるために勇者になった？　園子も？」
そこで初めて禊は声を発した。
一緒に頑張ってきたみんな、守りたいと思った園子も初めから供物

として選ばれた？
　声が、体が震える。みんなのためだと思って体を張っていた勇者部も初めから供物になるために仕組まれていたという事実に禊は足元が崩れるのを錯覚する。
「でも、もう戦いは終わったんだからもう私たちは供物を捧げなくていいんだよ！　乃木さん、私たちの体もいつか治るんですよね？」
　暗くなる皆の心を支えるように友奈が希望的観測を持ち出す。もう戦いは終わった。それならばもう、供物を捧げることもない。体の不自由もいつかは治るはず。
「そうだよね、治りたいよね。私も体を直して友達を抱きしめに行きたいよ」
　友奈の希望に対して現実は非情であった。園子の言葉と現状が答えを言っていた。先輩勇者が不自由なまま、今に至り、言葉に混ざる悲壮感が治らないことを代弁していた。
　もう体が治ることはない。その事実に禊は両の手を血が滲むまで握りしめていた。
　その時、四人を取り囲むように大赦の神官たちが現れる。彼らは何を言うでもなく、ただ園子に向かって平伏する。突如現れた神官たちに友奈と三森は動揺するが彼らは平伏したまま動かないのを知ると何事かと園子の方を見る。
「今や私は半分神様みたいな物だからね、崇められちゃってるんだよ。悲しませてごめんね、大赦がこれを隠すのも一つの優しさだとは思うんだよ。でもね私なら知っておきたかったって、そう思ったから。安心してね、あなた達も丁重に元の街に送ってあげるから。みーちゃんは少し待っててね。まだ話し足りないことがあるから……」
　出来るだけ安心させてあげようと園子はできるだけ優しい言葉で伝える。それでも続けた言葉の時には涙が流れていた。その後、禊に語りかける声も震えていた。
　園子の言葉に禊は何故、園子があの物々しい部屋で祀られ、誰とも面会されなかったのかを知る。
　涙を流す彼女にもう何もしてあげられない無力感を振り払い、園子

に向き直ろうとした時、禊は己の声を耳で聞いた。
「あのさー、それだけじゃあ、どうして小戸禊がここにいるのかがわからないだろう？」
突如現れた声に誰もが振り向いた。神官の一人の背後にそれはいた。まるで今そこに現れたその人物は軽薄な笑みを浮かべていた。顔の見える人物も仮面を被った神官達も等しく驚く。特にそれに対峙した禊は訳がわからなかった。動揺したまま、声が漏れる。
「君は、……僕？」
「よう、片割れ。夢の中以来だな？」
そこに立っていたのは小戸禊であった。見えるところに差異はなく、唯一違っているのはきている服が讃州中学の制服か、大赦の神官服であるかの違いであった。軽薄な笑みの禊はイタズラが成功した子供の様に笑いながら話す。
「なあ？　おかしいとは思わなかったか？　あの説明じゃあ既存の勇者達のことは分かる。だけどお前は当てはまらないことだらけじゃないか」
「……え？」
目を逸らしていた事実を突きつけられる。
「どうして無垢な少女でもないお前が勇者に変身できたのか。どうして満開を行使しても体が不自由にならないのか。どうして祀られていて両親さえも面会できない乃木園子にお前は容易く面会し続けられたのか。どうして勇者に変身するたびに焼かれる痛みを感じていたのか。あれだけヒントがあって分からないのか？　それとも察しながら目を逸らし続けていたのか？」
矛盾する事実が羅列されていく。薄々感づいていた。でも気づかない振りをしていれば指摘する者は誰もいなかった。そうすれば今のままでいられると思っていた。
「……あ、ああ。ああ……」
頭ではもう分かっていても心がそれを押しのけようとする。それでも目の前の小戸禊は構わず続ける。
「それらは全て、お前が人間でないことに由来する。お前は天の神が

作られた、十三体目のバーテックスなんだよ」
「やめろー！」
偽の禊の声をかき消す様に園子の絶叫がこだまする。突如、勇者装束に変身した園子は無闇矢鱈にの槍を射出する。合計八本の大型の槍は真っ直ぐに偽の禊に殺到するが見慣れたバリアがそれを阻む。それは見慣れた精霊のバリアを鎧を着込んだ女武者の精霊が展開していた。
腕を組んだまま、スマートフォンを操作し、偽の禊は赤い勇者装束を見に纏っていた。それは禊の夢の中で園子と共に戦っていた少女が着込んでいたものと瓜二つ、強いて言うならば、男性用にアレンジされている以外、同一のものであった。
「おいおい、話してる最中に攻撃するなんて無粋な奴だな。少し静かにしてろ」
突如、大型の戦斧が落下し、園子の不自由な体をを支える様に展開していた槍を地面に縫い付ける。
「さて、どこまで話したかな？　まあ、俺に関して話すにはこうしたほうが早いか」
そう呟くと偽の禊はゆっくりと禊に向かって歩む。手で触れる距離まで近づき両手で禊の頭を優しく掴む。
「ほれ、俺の記憶を接収しな。それで説明が省ける」
手で触れている部分から何かが流し込まれるのを禊は感じた。次の瞬間、何をしたわけでもなく、勇者装束が展開された。しかし纏っていたのは蒲葡色の鎧ではなく、満開の時の白い鎧であった。
翼が展開された。あの黒い球体を発生させた時の同様の動作であった。すると禊の頭の中にいくつもの知らない情報が目の前の偽の禊から流れ込む。
天の神。新人類創造計画。第二次侵攻。十三体目、オヒュカス・バーテックス。バーテックスを指揮するためのバーテックス。勇者システムに対するカウンター。新世紀２９８年の戦い。三ノ輪銀。魂。天の神による勇者システム。満開。
いくつもの情報と記憶が禊に流れ込んでくる。最後に見えたのは

満開した園子がこちらに刃を向ける光景。
全ての事実を禊は知った。
愕然とする。思考が脳裏を巡っていく。
今まで、園子と一緒にいられたのは僕の監視のため？何時でも僕を殺せた？勇者になれたのは僕の中に三ノ輪銀の因子があったから？医者のカルテ、体には異常なし？忠告したのは変身した時に何かを思い出して、寝返った時に不都合だから？天の神は僕を待っている？
でもそれ以上に衝撃的なのは。
「……ねえ園子」
「みーちゃん、そいつ言うことに耳を傾けないで！　大丈夫、何があっても私はみーちゃんの味方だか……」
「僕は君たちを殺すために作られたの？　君の体がそうなっているのは、君が二十回以上満開したのは僕と戦ったから？」
今まで守りたいと思っていた。もし体が一生不自由でも最期まで支えてあげてあげたいと思っていた。例え、普通の幸福はもう得られなくても一緒に幸福を感じることは出来ると思っていた。
でも彼女の普通の幸福を、当たり前を奪ったのが僕だったのなら。どう顔向けしたらいいのだろう。
「……こんな、こんなはずじゃなかったのに」
「みーちゃん！」
自然と目の焦点は園子を捉える。目に入る彼女はその大部分が包帯に巻かれたまま、勇者装束を纏っていた。もう動かない四肢を動かすため、連結した複数の槍。遠目に見ればまるで、十字架に架けられた聖人の様で。
記憶の中で知った彼女の昔の勇者としての花言葉は神の祝福。時に障害をもって生まれた子供は祝福された子供と呼ばれることもある。例え障害をもっていても、生まれてきたことを赤子は祝福される。でもそれは神に祝福されたものだ。彼女のそれは祝福などではなく、敵と戦って刻まれた傷跡。僕という敵がなければ背負う筈もなかったもの。
ただ最悪感が心を満たす。

「……あ、ああ……、あああ！」
言葉にならない罪の意識が叫びになる。どうしたら良いの？　どうすればよかったの？
もはや手遅れの疑問が溢れては叫びに消されていく。
気づけば視界が涙で滲みながら、僕は走り出していた。今は一刻も早く、ここからいなくなりたかった。もうどこにもいたいくなかった。胸の痛みだけが無情にここにいることを教えていた。
絶叫を上げ禊は走り出した。何もかもが突然のことで、見送る偽の禊以外、誰もが呆然とそれを見ていた。
ただ一人、園子は背を向けて走り去っていく禊に届かない手を伸ばす。
「待ってよ……、待ってよ！　みーちゃん、私を一人にしないで！」
少女の声が虚しく空に消えてく。届けようとした声は罪悪感に嘆く声にかき消されて禊には届かなかった。

閑話　俺／僕の記憶

禊の両の掌が偽の禊に触れる。そこから温かいものが地震に流れ込むのを禊は感じる。

声が聞こえる。己の声。二年間、聴き続けた、話し続けた己の声。

時間に束縛されない心の中で偽の禊はこちらに語りかけてくる。

さて、俺の話。いや、俺であり、そしてお前の話をするとしよう。

意味がわからないって顔をしているな？　それはそうさ。俺とお前は同じ存在から分かれた同輩。生まれの関係ない兄弟みたいなものさ。

かつて異教の神は何もない世界に言ったそうだ、

「光あれ」と。そして世界が生まれたそうだ。

俺が最初に見たものも光だった。

天上の高天原におわせられる、一柱の神。それが俺たちの生みの親だ。今は統合されて一柱の天の神って形で顕現しているがな。

俺が作られた理由は確固たるものだった。

人類を根こそぎ滅ぼす為の尖兵。実に単純明白なものだろう？。でもそれだけなら数多いるバーテックス共でも問題ないはずだった。

そもそもの話だが、旧世紀の人類は禁忌を犯した。詳細は俺も聞かされてはいないが、重要なのは被創造物である人類が神の領域に土足で踏み込んだこと、その一点がなによりも神々の怒りを買った。

怒った神々は人類を粛清する為だけにバーテックスという新種を創造した。結果はお前も今知った様に人類は神樹の領域である四国地方を残してさっぱり消えて無くなった。

でも生き残った人類とそれを守る神樹。それが本当にしぶとかった。諏訪で無双してた勇者の活躍もあって天の神側は四国に三年もの猶予を与えちまった。

お陰で最終的に人類の粛清は和平交渉って形で決着しちまった。そこまではよかった、どうせ寄せ集めで生まれた神格なんて神々の時間感覚で言えば、大して長い間に自己の存在を保てない事は明白だった。

天の神からすれば時間切れを待って、そのあと攻め込めばよかったんだ。ところが新世紀が始まって一つ発覚したことがあった。
勇者システムだ。それの研究が当然のように、秘密裏に存続されていたんだ。
当然、天の神はこれまた怒った。なんせ、和平の条件が神樹側に神樹の結界の外に出ない事と勇者システムをはじめとする武力の破棄だった。その上で許してやるって条件だったのに人類の奴ら、こっそり研究なんてしてたわけだ。
人間だったらここで契約不履行だって言って殴り込みに行けばよかったろう。でも問題は天の神も神という存在であり、その根本の規則には等しく縛られているって事だ。だからこそ、一度でも不可侵の契約が結ばれ贄を捧げられちまったら文字通り、神にも破れないのさ。
勇者システムは天の神にとって神樹以上の脅威になり得た。理論上、神樹自身を対価に勇者システムを運用すれば同士討ちで天の神が敗れる可能性があった。なんせ、直接神の力やその類似の力を人間サイズで運用できるんだからな。
故に、天の神はいつか神樹の力が弱まり、契約が切れる時に勇者システムに対しての有効打を持つことが必要になった。
ここまで言えばわかるな？　そうだ。俺やお前という存在がその対抗策だ。例えどれほど勇者システムが強化されようと問題なく抵抗できるバーテックス、それが俺やお前だった。
与えられた権能は『接収』
早い話が食ったものを己の血肉にする、最も単純な生物の機能の一つ。それが神が俺にお許しになった権利だった。同時に与えられたもう一つの神の権能であるブラックホール生成能力と組み合わせて問答無用で進化した勇者システムそのものをこちらの戦力として利用する。それが天の神が生み出した勇者システムとしての対抗策だった。
でも不思議だよな？　どうしてバーテックスがこんなにも人間に近いのか、見た目こそ完全に人間そのもの。別に権能こそあれば、形

はなんでもいいはず。それがどうして滅ぼすはずの人間の形をしているのか。
それは俺たちが人類を滅ぼした後の地上に栄える、新しい人類に当たるからだ。本来、神々は人類がいなければ存続できない。人が神を信仰して、神が星を循環させる。それが正しい関係性だった。だから今、天の神がやってる事は矛盾してる。このまま人類を滅ぼせば自分たちもいずれ消滅する。だから滅ぼした後に神々を信仰する新しい人類が必要になった。
今度は禁忌を犯さない、神々に都合のいい人類がな。
新しい人類はそれぞれが生まれた時から何かしらの使命を与えられた存在。それに逆らう真似をすれば命を失う。それによって新しい人類は神々に都合のいい養分になるわけだ。
それは俺も例外じゃない。
あまりいい気分はしないが誰も生みの親を選べない、仕方がないことさ。
そんなこんなで生まれた俺はその後、数百年は何もせずにいた。なんせ、人と戦う為に生まれたんだ、戦う時じゃなければ用無しなのは当然さ。目に見えていたのは炎の海と無限に生まれ続ける星屑と呼ばれる下級バーテックスと製造中の完成体バーテックスばかり、俺以外の存在らしい存在はいなかった。今思えば何も面白げのない光景だ。
そして時は流れて数百年。その時は来た。今から2年前、俺たちは結界の弱まった神樹へ向け、侵攻を開始した。
その時、俺たちと戦ったのがお前の知る、乃木園子、当時は鷲尾須美と呼ばれていた東郷美森、そして俺から見て最も優れた勇者、三ノ輪銀の三人。
戦うところを見てまず感じたのは失望だった。想定していたものよりも明らかに勇者たちは弱かった。たかだか完成体のバーテックス一体に手をこまねいている程度の連中だったからだ。数回戦わせてみて出した結論はそうだった。はっきり言って俺がいなくても適当に三体ほどまとめてけしかけてしまえば勝てると思った。

だから4回目で実際にそうした。
そして想定外が起こった。
途中まで、たしかに想定通りに事が進んだ。乃木園子と鷲尾須美は三体の連携の前に倒れ動けなくなり、あと残るのは三ノ輪銀ただ一人。その頃からすでに興味を失っていた俺はただ成り行きを見下ろしていた。どうせあと一人、適当に潰れて終わり。そう思っていた。
そして俺は光を見た。生まれた時に見た荘厳な神の輝きではない、泥臭く鈍色に輝く光。清浄な神の輝きに比べれば、なんて事ない人の放つ輝き。
でもその光に俺は少しも目を逸らすことが出来なかった。初めて見たその輝きも長くは続かなかった。たった一人で奮闘した三ノ輪銀は俺の放ったバーテックスを追い払い、自身の命を終えようとしていた。
惜しいと思った。ここでもう見えて無くなってしまうにはあまりにも光るそれが永遠に失われることを不愉快に思った。
気づけば体は動き出し、俺は三ノ輪銀に対峙していた。バーテックスと同じ存在感を放つ俺を見て一目で敵と理解したのだろう。最期の足掻きか俺の目を見てもう長くないであろうボロボロの体に力を込めて彼女は言った。
「……どうだ、見たか。これが私たち、人間だけの輝き……たましいってやつよ！」
ろうそくが消える直前に燃え盛るように事切れようとしていた。その輝きを素晴らしいと思った。劣っているはずの旧人類に対して妬ましいと思った。天命を定められて生まれてきた俺には出せない輝き。欲しいと願った。
三ノ輪銀が事切れる寸前、権能を用いて俺の一部にした。でも彼女を取り込んでもあの時の輝きを俺は持てなかった。不思議に思った。三ノ輪銀を取り込み、血肉の一部にしたのだから同じようになると思った。不思議に思い、自身の体を眺めていると一部始終を見ていたのだろう、乃木園子と鷲尾須美が顔を怒りに染めてこちらに襲いかかってきた。

邪魔に思い、重力子を固めて押しつぶそうとした時、頭に声が響いた。
「その二人はやらせない！」
吸収した三ノ輪銀が俺の頭の中で暴れてひどい頭痛がする。彼女を俺の中から消してしまえば治せるものだった。でもそれは選べない選択肢だった。戦いを中断し、その場で離脱した。
俺の領域に帰還し、始まったのは俺と三ノ輪銀による対話だった。知りたかった、あの輝きの正体を。しかし対話を重ねても何も理解できない。
「私にはお前たちが理解できない。何故お前はあの様に輝ける？　何故あの様に戦った？　誰かに命令されたのか？」
「アタシには友達とか、兄弟とか家族とか、もろもろ守りたいものがあるんだ、誰かに命令されたからじゃないよ。お前にはそういうのないのか？」
友達？　家族？　守るもの？　そんなものが何故あの輝きを生み出すのか理解ができない。根本的に価値観、見える世界が余りにも違う、何だあれは、本当に俺はあれらを元に完成した人間なのか？
何故かとても悲しいと思った。
数ヶ月にも及ぶ意味の無い対話の後、天の神からの出撃命令が下された。逆らうこともなく、俺は神樹の結界を破り、他のバーテックスと同様にそこにいた。
対峙した二人は以前とは見違えるほど強くなっていた。更に強化された勇者システムとその精霊のバリアは俺の放つ『接収』のブラックホールを防いでいた。接収ではなく、ねじ切りためのブラックホールに切り替える。
「ミノさんの敵、取らせてもらうよ！」
戦いながら勇者たちの姿が変わる。バーテックスとしての感覚器が神の力を感じる。どうやら神の力を直接、人間の身で行使することを可能にしたらしい。強化されたその力は他のバーテックスどもをあっさりと倒した。そこで片方の勇者、鷲尾須美がいなくなったことに気がつく。見渡し、見つける。足が動かないらしい。どうやらこの

新しい力は代償を必要とするらしい。矮小な人間が大いなる神の力を行使するのに無償なわけがない。この力は満開と呼ぶらしい。

何度目かの戦いの後、遂に鷲尾須美は戦線に戻ってこなくなった。乃木園子を何かを話すとそのまま気を失う。鷲尾須美と話し終えた乃木園子の覚悟を決め、何度も満開を繰り返して代償を払う姿に、俺はまたあの輝きを見た。

無意識に口角が上がっていくのを感じる。あの輝きがまた見られる事に歓喜した。同じようになりたい、その思いで俺の中の三ノ輪銀を媒介に神樹に接続を作り、あの力を模倣する。模倣した満開で天の神からの神通力で出力を強化する。

本来の俺の製造目的である強化された勇者システムの逆利用を実行し、作られた本分を全うする。

驚いた表情を作る乃木園子に俺は笑みを深くする。

やはりというか、満開を獲得した俺と満開を行使する勇者とでは地力の差からあっさりと決着がつく。合計二十回の満開でも俺との差を埋めることは出来なかったようだ。精霊のバリアといえど、全力の一撃であれば貫けるはず。最大限に圧縮したブラックホールでねじ切り殺そうとした時、満開が解け始めた。

まあいい、勇者の満開とは違い、こちらは一切代償などない。

その時、三ノ輪銀を媒介に作った神樹との繋がりから逆流してくる力を感じた。体が動かず、その場で固まる。体から文字通り、魂が抜かれる。抜け殻になった体が俺から離れていく。いや逆だ、魂だけになった俺が体から離れていく。神樹に引かれながら、神樹の結界である、樹海化が解かれていく。

世界が暗転して、そこは神樹の中であった。満開の供物の要領で俺の魂が持っていかれたらしい。

神樹の一部になった事で結界の内部である四国中が簡単に見渡せる。俺の体を見つけた。大橋に近い砂浜で乃木園子に槍を突きつけられ、振り下ろそうとする動作を始めようとしているところだった。抜け殻となった俺は何かを言っている。

空が綺麗？　あの神樹の結界で作られた偽物の空が？

どういうわけか振り下ろそうとしたところで動きが止まり、そのまま変身が解除された乃木園子は不自由な体を支えられずに倒れこむ。
しばらく見ていると慌てた様子の大赦の職員たちがやってくる。倒れた乃木園子を見つけて驚き、更に敵であるはずの俺が一緒に倒れている事で状況が見えない様だ。仕方なく二人とも救急車に運ばれていく。
ここまでがお前の持っていなかった俺の記憶。理解したか？
お前に家族がいないのはお前は天の神が作った唯一無二の人類抹殺の尖兵にして、人類を滅ぼした後に栄える新しい人類だから。
お前が勇者になれたのはお前の中に残留する三ノ輪銀の因子があったから。
お前が2年前以上の記憶がないのはそもそもお前が生まれたのが2年前だから。
お前がバーテックスを倒すたびに勇者装束の装備が増えたのは接収の権能が中途半端に作用したから。
お前が満開のした時に行使したのはバーテックスとしてのお前の力。
祀られていた乃木園子にお前が容易に面会できたのはお前の監視と記憶が戻る様なことがあればいつでも始末できるようにするため。
お前が勇者として矢面に立たされたのは犠牲になってもいい戦力だったから。
あわよくば相討ちに立ってくれればと思われていたから。
そして、乃木園子が身体機能の大部分を喪失したのは俺／お前と戦い、何度も満開したから。
これが事実であり、お前が知りたかったことの全てだ。どうだ？
納得したか？
面白いよな、自分の人生を滅茶苦茶にした本人に心配されるなんて。乃木園子はどんな気持ちだったんだろうな？

これが僕の記憶？
そうだ。お前が失っていたもの。

僕が園子を傷つけていた？
そうだ。
僕がいなかったら園子は傷を得ることはなかった？
そうだ。
己の声は無情に罪を肯定していく。罪悪感に心が包まれていく。心の足場が崩れていく。どうにかなっていまいそうだった。
己の口から出た絶叫が僕を現実に引き戻す。
振り返れば園子がいた。もう二度と自由に動くことのない、普通の幸せなど一生ないその体で。

第5話　そして僕は君を救う

禊は走っていた。どこへと向かっているかなんて禊自身、何も分かっていなかった。だた、ぐちゃぐちゃになった思考の中、とにかく遠くへ、遠くへと逃げなくては、と行動していた。

無意識だったのだろう、今まで園子に会いに行くために通い詰めた通り道、何も考えなくてもマンションまで走っていた。

時刻はもう夕暮れも落ちる時間だった。あれほどの長い距離を走り、禊は部屋に倒れこむ。倒れこみ体が息を吸っては吐く。涙で呼吸器がつまり咽せる。

「僕が敵だった！　僕が園子をあんな体にしたんだ！」

懺悔のように言葉が口から流れて行く。

「どうしたら……、どうしたらいいだよ！」

「お前のしたいようにすればいいんじゃないか？」

気がつけばもう一人の禊が横にいた。楽しげな様子で禊の顔を覗き込んでいた。それに対する禊の反応は薄い。

「君は誰？」

「俺たちの記憶を見ただろう？　俺はお前で、俺はお前さ。でも名前がないと呼びにくいな。よし、兄弟、俺のことはオドって呼べ。名前がないなら苗字で充分だろう？」

「君は何がしたいのさ、敵みたいに振る舞ったと思えば、今みたいに気安くなったり……」

「まあ、記憶の通り俺は人類の敵だからな。今もこうして神樹の力の一部を奪ってこの体を作ったわけだし。お前こそどうしたいんだよ？」

何をしたいかと聞かれ、禊は考える。禊は自身の鎖骨に刻まれた刻印が赤く燃えるように色を変えることに気づかない。

始めに頭に思い浮かんだのは園子であった。大切な人。禊の心の多くを占める人。

／でも彼女の普通の幸せを、友達を奪ったのは己であった。もう彼女に合わせる顔がない。

勇者部のみんな。優しい人達ばかり。あそこにいる時、とても心地が良かった。でも己は人類を滅ぼすために生まれたバーテックスの一体。今まで騙すような形になってしまった。

／初めから僕らは相容れない立場だったんだ。滅ぼし合うしかない。

／結局、僕じゃなくても、いずれ勇者である彼女らは人類を守るため、自身を贄にして戦わざるを得なかった。

禊の心の中を負の意思が侵食して行く。思っていた言葉、思っていない言葉が思考を上塗りして行く。全ては創造主である、天の神の都合のいいように。

彼女らのことを考えると胸が痛む。どうして何も悪いことをしていない、優しいみんながこんな目に合わなくちゃいけないんだ。

／こんな事、考えるのも億劫だ。こんなに胸が苦しいなら、こんな思いをするぐらいなら。今すぐここからいなくなりたい。

だからこそ、オドに対する答えは決まっていた。

「……もうこんな苦しいところに僕はいたくないよ」

ここにいたくない。そうはっきり禊が口に出した時、刻印が反応する。かつて大赦がバーテックスを追い払うために用いた『鎮花の儀』と類似した術式が発動する。かつては弱ったバーテックスを追い出すための術式は、この時に限って結界内のバーテックスを連れ出すための力として作用した。

部屋の中を花びらの光がヒラヒラと舞い、四国から二人は姿を消した。

蝉の鳴き声だけが虚しく、開いた窓から響いていた。みんなと繋がるためのスマートフォンと思うでの写真は机の上に放置されていた。

あれから二週間が経った。それまでけたたましく鳴っていた蝉は土に還り、初秋を伝える寒風が吹きはじめていた。

あの後、禊に全ての事実を暴いたもう一人の禊は走り去る禊を確認するとその場から、まるで最初からいなかったかのように姿を消した。

戦斧で動きを封じられていた園子も両方の禊が消えたことにより、

戦斧が消えて自由となった。友奈と美森も大赦の所有する自動車に送られて元に住む街に帰された。
一人取り残され、静かに涙を流す園子は二人の印象に強く残っていた。自分たち、勇者の置かれた立場の残酷さ、そして今まで仲間と思っていた禊の正体を知った美森はあまりの現実の無情さに涙を流し、友奈はただ黙ってそれを抱きとめていた。
どれだけ泣こうと状況は好転せず、去って行ったものは帰らず、時ばかりが進んでいく。
翌日、部室にいつもの様に集った勇者部、友奈と美森は話す。勇者システムの真実を、禊の正体を。満開を行なっていた風と樹は特に動揺する。失われた体の機能の欠損はもう戻ることがない。そして禊の正体を知り、呆然となる。
「……体の機能はもう帰らない？　じゃあ、……樹の声は？」
「……なんなのよ？　禊のやつが人間じゃなくて、私たちの敵？」
人間は衝撃的な事実を同時にいくつも聞かされれば、怒りや理不尽よりもまず無力感を感じる。
どうにかしなければ。
責任感の強い風が思ったことはそれだった。未だ動揺から立ち直れない心を奮い立たせて皆をまとめる。
「取り敢えず、禊のやつを探すわよ。まずはみんなで探さないと」
スマートフォンを起動してお互いの位置がわかる勇者専用アプリを立ち上げる。禊のアイコンは自宅を指し示していた。勇者部は揃って禊の住居であるマンションに向かう。見知った部屋の前に立ち、チャイムを鳴らす。しかし何通しても返事はなく、くぐもった呼び鈴が響くだけだった。
管理人にお願いして鍵を開けてもらい、中の様子を見る。中は荒らされた様子もなく、リビングの中央の卓の上にスマートフォンが鎮座していた。その横にはいつか撮った勇者部の集合写真が置かれていた。
「何よ……これ？　まるでさよならって言ってるみたいじゃない」
「禊くん、どこへ行ったのかしら。お財布も携帯も置いてそんなに遠

くまでは行けない筈なのに……」
　まるで遺書のように置かれた写真を見て風が呟く。美森の考察も正しいものであった。そもそも大赦が実質的に管理している四国内で徒歩だけで逃げ切ること自体不可能と考えるのが自然であった。
「だっ……大丈夫だよ！　そのうち禊くん、ちゃんと帰ってくるよ！」
『友奈さん……』
　友奈の出す声は震えていた。確証など、どこにも無い。ただ無理をして元気な声を出していることは誰の目にも明らかだった。
　そしてやはり、禊は現れることも、見つかることもなかった。登校することもなく、勇者部に顔を出すこともなく、まるで最初っから存在していなかったように彼の痕跡は絶たれていた。
　そして時は今に戻り、部室には風の怒声が響いていた。
「ふざけんじゃ無いわよ！」
「どっ、どうしたのよ？　風！」
「どうしたも、こうしたも無いわよ！　見なさいよ、これ！」
　怒り狂った風は乱暴に夏凛に自身のスマートフォンの画面を見せる。表示された文面を見て、夏凛は絶句する。
　［現時点をもって小戸禊を勇者から除名。現時点をもって人類に敵対するバーテックスとして認定。以降、小戸禊を発見した時は即刻討伐するように］
「こっ、これって」
「友奈ちゃん、大赦は禊くんをもう人間として見ないって言ってるのよ」
「そんな！　そんなのおかしいよ！　禊くんだって私たちと一緒に戦った仲間なのに……」
　理不尽にも思える処置に友奈は疑問の声を上げる。失踪した禊、その禊を人類の敵と認定した大赦。状況は悪くなってくばかりであった。もはや、どうすれば最善手なのかすら誰にも分からなかった。分からないこそ、美森は状況をよく知り、かつ今から会える人物を思い出した。
「乃木園子さんだわ……」

「え？」
美森のつぶやきに友奈は疑問の声を出す。そして言葉の意味を噛み下し、美森の言いたいことを理解する。
「そうか！　乃木さんだったら、今どうなっているか、どうしたらいいか分かってるかも。みんな！　彼女に会いに行こう！」
「乃木園子？」
「はい、風先輩。私たちの先代勇者です。大赦や禊くんの状況を最も理解しているのは、彼女のはずです」
「分かったわ、今は彼女を頼ってみましょう」
目的地を見出し、勇者たちは先代勇者の元へ向かった。園子の祀られ、入院している病院にたどり着くと意外にもあっさりと通される。
これまでの秘密主義の大赦であれば、接触を邪魔されると思っていた風たちからすれば意外と思えるものであった。
廊下を歩き、一番奥の部屋へ向かう。大赦のマークが描かれた扉を開くと目に入った光景で誰もが息を飲む。
大きく間取りをとって作られた部屋であるが広々とした感じは一切なかった。床と天井、壁の至る所にお札が貼られ、卒塔婆がいくつも建てられていた。
その部屋の中央、鳥居をくぐり、その奥に彼女のベットは安置されていた。
まるで神聖な御神体を祀るような部屋の物々しさに言葉が出ない。
そして誰もが気づく。これが勇者たちがたどる最期であると。
あまりの光景に圧倒され、動けずにいると園子が扉が開かれていることに気づく。
「みーちゃん⁉？　帰ってきたの⁉？　……ああ、そっか。そうだよね、勇者部のみんなだよね」
一度は期待に喜びが混ざった声が落胆へと変わる。友奈たちの姿を認めると園子は部屋の中に入るように促す。園子の顔を見た誰もが察する。唯一目視できる彼女の左目は赤く腫れ、泣き腫らした後なのは誰の目にも明らかであった。
目に見えるほとんどが包帯と病院着の彼女を見て、その過酷な処遇

に未来の自分たちを幻視した。
　晴れない彼女らの表情を見て、園子は諦めたような表情を作る。
「そうだよね、もうみんなは勇者システムのことを全て知ってるんだよね？　そう、これが私たち勇者が辿る最期の姿。死なないことなんて、なんの救いにもならないよね」
　その自虐的な台詞は誰に向けたものだろうか。なんの感情も含めようとしない平坦な声だけがそこにはあった。
「今日はみんなどうしたのかな～？　私に何か用かな？」
「私たち、禊くんがどうなったか知りたくて。……私たちの敵ってどういう事なんですか？」
　代表して友奈が質問を投げかける。それに対して園子は眉を下げて答える。
「みーちゃんがどうなったかはもう大赦でも誰も把握して無いんだよ。四国のどこにもいない事だけは確か。もしかしたら壁の外側にいるのかも。敵って言うのは言葉の通りだよ。今までは観察処分、これからは討伐対象に変わった、いや元に戻ったって事かな？」
　もう変わらない事実に園子の台詞にはため息が混ざっていた。それに対して夏凛が疑問の声を上げる。
「おかしくない？　壁の外ってウィルスの嵐だから外に出てはいけないはず」
「あ～、そうだよね、みんなは外の世界の事、何にも知らされていないよね」
「外の世界？　乃木さんは外の世界に行った事があるの？」
「うん……、外の世界はバーテックスの小っちゃいのがバーって沢山いて、倒したバーテックスがどんどん再生されてまた生み出されてるよ」
　告げられた外の世界の事実は勇者部に少なくない動揺を与える。それが事実であれば、彼女らの戦いは終わってなどおらず、これからも戦うことを強いられると言うことになる。またも知らされていなかった事実についに風は怒りが限界値を超えるのを感じる。
「もう我慢ならない！　あれもこれも隠されて、私たちは生贄じゃな

いのよ⁉？」
「落ち着きなさい風！　今暴れてもどうにもならないわよ！」
「だからってこんな事をゆるせるか！」
「風先輩……」
　無力感に八つ当たりをするように飛び出そうとする風を夏凜が止める。羽交い締めにされながらもがく風を見て友奈はどうすることもできず、伸ばそうとした両手が空を切る。
「大赦なんて潰してやるー！」
　風がそう吐き捨てた時、地面が大きく揺れる。
「何？　地震？」
「東郷さん、私に捕まって！」
　しばらく建物全体が揺れる。大きな振動が数回響くと揺れが収まる。
「もう収まった？　この揺れ方は地震じゃないわ、友奈ちゃん」
「うん、東郷さん。外に出よう！　乃木さんも！」
「私は大丈夫。ほら、この通りだから」
　園子はそう言うと手元の机に置かれたスマートフォンに目をやる。スマートフォンは誰にも触れることなく、一人でに起動して勇者専用アプリを起動させる。まばゆい光が生まれ、収まると園子は勇者の装束に身を包んでいた。美森の足の補助のようにリボンが身体中に纏わりつき、操り人形のように全身を、自身の体を操作していた。
　園子の先導で皆は病院の外へ向かう。病院を出て外を見たとき、誰もが言葉を失った。夕暮れの大空、紅く染まったその空により赤い光がそれにできた大穴から見えていた。まるで血走った目がこちらをのぞきこんでいるように見えた。

　神樹の結界の外側、かつて最初の禊が生まれた彼の領域に二人の禊はいた。何もない真っ白な足場に禊は両足を抱え込み、目を伏せていた。いつまでもそうしている禊にもう一人の禊は困ったように頭をかいていた。
「いつまで、そうしてるつもりだ？　苦しいままでいても、苦しいまま

だぞ」
オドの質問に禊は無言を返す。もう誰とも関わりたくなかった。関わったらその分だけ苦しむような気がして。
ここに来て、鎖骨の刻印は全身へと広がっていた。鎖骨から広がり、胴、腕、足、顔にまで広がり、かつての古い時代の生贄を連想させた。
頭がぼうっとする。最後にまともに思考が出来たのはいつだっただろうか？
そして最後の仕上げが始まった。
オドは腕を伸ばし、禊の頭に触れる。少しづつ接収の権能が発動する。思考の定まらない禊はそれに気が付かない。
オドは問う。
「なあ？　お前が苦しんでるのは誰のせいだ？」
誰のせい？　誰のせいだっけ？誰かのせい？
「乃木園子や勇者部が勇者になったのは仕方のない事さ。そもそも３００年前の時点で滅びておけばいいものを今の今まで生き延びた。その代償をアイツらは払わされてるんだ」
みんなが苦しむのはあそこにいるから？　生まれて来たことが苦しみの原因？
「そうだ。勇者なんて役目がアイツらを苦しませる。勇者を消せば、勇者を生み出す神樹が消えれば、もう誰も苦しむ事もない」
勇者を消すってみんなを消せって事？
思考が掻き乱され、都合のいいものに置き換わる。
『みんなは勇者じゃない。勇者は敵。みんなを苦しめる存在』
「勇者を消せば、神樹を消せば、みんな解放される。もう苦しまなくて済む？」
「そうだ。お前にしか出来ない。お前だけが出来る。お前がみんなを助けられる」
「そうしたらもう一度、今度は胸を張って園子に会いに行ける？」
「あぁ、そうだ。もう誰も苦しむ必要のない世界を、お前は創り出せる！」

オドの接収が発動する。禊の記憶が消されていく。記憶の中の園子が、友奈が、美森が、風が、樹が、夏凜が、みんなの顔が消えて行く。大切だったはずの思い出が消えて行く。支えると言った誓いが消えて行く。彼女への思いも消えていく。

「園子……、あれ？　園子って誰だっけ？　まあ、いいか。今は僕に出来ることをやろう。君を守るために、世界を創り直そう」

もう誰のためか、認識できていないことを指摘する人物はそこにはいなかった。ただ守りたいという意思だけが禊を突き動かす。

やろうと決め、禊は体の奥底で眠る力に身を委ねる。力が目覚め、禊の心を、体を包んでいく。変身が終わり、かつて満開を行なった時と同様の、正しく言えば、本来のバーテックスとしての力を纏った禊がそこにいた。もうかつてあった神樹の加護は完全に失われていた。

背中の翼を展開する。翼は広がり、周囲に浮いていた星屑を黒い球体が食らう。食らい、バーテックスとしての、十三体目のバーテックス、蛇遣い座のオヒュカス・バーテックスとしての能力を発揮する。

禊の意思と意思のない星屑の心が繋がり、同調していく。それまでの戦闘経験が情報として星屑たちに伝達されていく。バーテックスと繋がり、伝え、指揮する。それまでバーテックス達にいなかった指揮官としての役割が十三体目のバーテックス、蛇遣い座の力であった。

本来、蛇とは神の使いであり、化身なのである。それを操るゆえの蛇遣い座。

そして星屑たちは垣間見る、人類の力を。そして結論を出す。このままでは勝てないと。

だから生物の頂点の名を冠するバーテックスは本当の意味で頂点に立つための自己進化をとげる。形が変わる。白い袋状、単細胞のバクテリアのようであったそれは複雑な人間の形をとる。足りないエネルギーは禊が星屑を接収で食らい、生まれた伝達網を用いて分け与えていく。無限に発生する星屑であればこそ、問題のないやり方であった。

そこにいたのは、最早それまでの星屑では無かった。形は人を模造

したものに変わり、禊の本来の役目の一つである、現行人類を滅ぼした後に繁栄する新たなる人類種、その誕生の瞬間であった。必要以上の自由を与えられず、神の赴くままに生かされる新しい人の形であった。それを暗喩するように見た目は白いマネキンのようであった。

星屑は体の一部を変化、または切り離して武器を生み出す。体には天の神の刻印がどこかしらに刻まれていた。その姿は紛れもなく神樹の勇者たちに酷似していた。

皮肉にも天の神に対抗するための勇者システムは今、敵の戦力としてその有用性を示していた。言うなれば勇者システム搭載型バーテックスが生まれたのだった。

そして完成したバーテックスに倣うように新たに生まれてくるバーテックスは初めからその形をして生まれて来ていた。

無限の天の勇者たちが宇宙規模の神樹の結界を取り囲む。

先頭に立った禊は禊は己の力を存分に振るう。星屑、数万体を取り込んだその圧倒的出力で生み出される黒い球体は結界に向かって放たれる。結界に衝突した黒い球体は結界を破壊していき、消えると後に残ったのは結界に大きく開いた穴だけだった。

穴から禊は中を覗き込む。神樹の生み出す偽物の夕日に照らされる街が見え、その奥にそびえ立つ神樹の本体が目に入る。

禊は振り返り、新たなる同胞に一度はにかみ、向き直り、宣言する。

「行こう。痛みを消しに。もう君が苦しまなくていい世界を創りに」

優しい表情で語られる言葉。しかしもうそれは誰に向けて言ったものか禊自身、分かってはいなかった。

かつての仲間であった小戸禊は思い出を全て失い、敵として、最後の天の使者として、愛しい人を殺すため、ここにいる。

第6話　僕の名を呼ぶ声

人類の残された最後の安息の地、四国。その周辺は神樹の生み出した宇宙規模の結界により、灼熱の地獄と化した外界と分断されていた。だが何事にも最後の時が来る。そして結界のそれは今日であった。

地の神々の集合体である神樹の結界は、天の神々の集合し一体化した天の神の放った最後の使者、小戸禊、真名を蛇遣い座のオヒュカス・バーテックスによって大穴を空けられ、四国の空の一部からは外の様子が衆目の下に晒されていた。

夕焼けの空の中に夕日よりも赤い灼熱の業火の光が外から漏れる。それはまるでもう一つの太陽が空に現れたようであった。

しかし太陽に見えたのも束の間であった。すぐに赤い太陽は、小さな黒い点が集まり、黒く染まっていく。殺到する人型のバーテックスが影となって太陽を隠す。

友奈達の持つスマートフォンから樹海化警報のサイレンが鳴る。それまでの時間が止まるといった前準備なしに樹海化が始まる。樹海化が完了し、樹海化した四国に立った時、友奈達の視界にそれが入る。

「東郷さん！　みんな、あれを見て！」

友奈の人差し指が神樹の生み出した壁に一点を指し示す。そこには巨大な穴が開いていた。開いた穴からは無数の白い人型の何かが止めどなく侵入し続けている。その数が尽きる様子は一切ない。

「待って、これどうなってんの？　どう見たって十や百って数じゃないわよ！」

手元のスマートフォンを見て風の声が震える。それまで敵や味方の現在位置を示していたアプリであったが、今その画面の一角が小さな赤い点がいくつも現れ、重なり、赤く染まっていく。バーテックスとは12体ではなかったのか？

その中心、一点だけぽっかりと穴が開いたように赤が存在しない場所がある。そこには一つだけ別の表示が出されていた。蛇遣い座。

最後にして最新の十三体目のバーテックスがそこにいることが誰にでも伝わっていた。
「よし！　みんな、あれを全部やっつけて帰ろう！　……みんな？」
「友奈ちゃん……、みんな……もう……」
　友奈の元気な声が皆を先導しようとする。しかしその声に答えるものは誰もいなかった。皆の思いは分かりやすいものであった。
　四体のバーテックス襲来でほぼ全員が満開を使用した。しかし今回の敵は終わりが見えない。一体何回満開することになるのか。一体何を供物として捧げなければならないのか。そもそも勝てるのか。
「み、みんな！　戦わないと！世界が終わっちゃうよ！」
「友奈ちゃん……」
　友奈の足は震えていた。いつのも快活さは見る影もなく、顔は青ざめていた。誰もが分かっていた。勇者システムの真実、乃木園子の現状、小戸禊の正体。不安の原因はいくつも探し出せた。勝てるかもわからない、無事に帰れるか分からない。ただの中学生の少女達にはあまりにも荷の重い状況であった。それを証明するようにいくら勇者のアプリを起動しても誰も変身できない。
「そうだよね、みんな不安になるよね。大丈夫、私に任せて。これでのすっごい強いんだよ私？」
　戦うことに躊躇い、俯き、変身できない少女たちに園子は優しく言う。計２１体の精霊が姿を現し、それぞれの武装を展開する。様々な種類の槍が展開され、彼女がいかに満開を繰り返し、供物を捧げたのかを暗に語っていた。展開した槍は陣形を組み、最適化された展開した槍のうち、移動を補助するものを用いて園子は飛び去っていく。
　戦いを恐れる少女たちはただそれを見送るしかなかった。
　神樹の結界に大穴を空け、そこから禊たちと星屑たちは結界の内側へと侵入する。穴をくぐり、そこには神樹によって展開された樹海が目下に広がっていた。何処かで見たような気がする。しかしそんなはずはない。おそらくオドの記憶を見て既視感を持ったのだろうと結論づけて禊は飛びながら進んでいく。
「さあ！　みんな行こう！　全ての痛みを消しに、僕らの世界を創り

に！」
しかし、星屑たちからの返事はない。
繋がった心からも返答はなく、結果的に禊の独り言のような形になってしまう。もとよりバーテックスたちに心などなかった。そんな禊の様子を見て、一体の星屑を足場にしたオドがケラケラと笑う。
「はっはっは！　そいつらに心はないさ。ただ命令を聞いて実行するだけのナマモノだよ」
「そんな言い方はないだろう。彼らだって僕らの同胞だ。痛みを消して、それでこの星は僕らの故郷になるんだ」
「まぁ？　お前の好きに解釈すればいいんじゃないか？　最終的に人類が滅びれば俺の天命は全うされるわけだし？」
人の形を得た星屑たちを禊は同胞と呼んだ。何故か禊は彼らをそう呼びたくなった。共に歩む仲間、禊はそれを欲していた。オドからすれば人類を滅せれば、過程はそれほど重要ではなかった。
禊の記憶は彼の接収の権能と天の神の施した刻印が作用し、もうどこにもないはず、今更人間のように仲間を見出そうとするのは何故なのか禊自身にも分からなかった。。同胞と呼ばれた星屑たちは禊の言葉に一切の反応を示してはいなかった。
その時、禊の体に痛みの幻覚が発生した。星屑たちと構築した伝達網から彼らの感覚が逆流して禊に伝わっていた。すぐさま、痛みの発生源に向き直すと先遣隊として放った数十体の星屑が薙ぎ払われ、命を散らしていた。
目に入るのは紫色の祝福を受けた勇者の姿。それを目に入れ、禊の心が憎悪に満ちる。
「あれは、勇者！　痛みを生み出す存在！　よくも僕の同胞を！」
「そうだ！　あれが俺たちの敵だ！」
オドの煽る声を聞き、禊は怒りに任せて乱暴に翼を展開し、翼から噴出する熱が一気に距離を詰める。それまでいた場所から瞬間移動するように姿が消え、次の瞬間には禊は園子と接敵していた。
「よくも、よくも僕の同胞を消したな！　痛みを生み出す悪魔ども！」
接敵し、園子の操作する槍を掴み、力任せに放り投げる。強化され

た膂力は精霊の操る力を容易に超え、攻撃の当たろうとしていた星屑を守る。突如現れた禊に園子は驚愕する。
「みーちゃん⁉？　どうして⁉？　どうしてそっちにいるの⁉？」
「勇者が僕に何の用だ！　消えろ、消えろ、消えろ！」
乃木園子を見て禊は憎悪を募らせる。今の彼にとって彼女は痛みを生み出す勇者の一人。面識のない敵に禊は己の力を振るう。敵を滅ぼすための黒い球体が園子を追尾するようにいくつも発生する。発生した黒い球体を園子は防御用の槍を展開し攻撃を防ぐ。間に合わないものは精霊のバリア発生して間に合わせる。
距離が開き、禊は急加速して殴りつける。しかしいくら強化された膂力を用いようとも、勇者を生かすためのバリアがそれを防ぐ。敵意に満ちた禊の行動に園子は困惑する。
「どうしてこっちを攻撃するのみーちゃん？　私だよ？　園子だよ？」
「勇者が気安く話しかけるな！　敵はさっさと落ちろ！」
園子の必死の呼びかけに禊は攻撃で答える。何度も殴られ、精霊のバリアが限界を迎える。残像を生んだ打撃が繰り返され、バリアが崩壊する。急いで槍で壁を作るがその槍ごと大きく後ろへ飛ばされる。
吹き飛ばした園子を禊は追撃する。バリアで防がれる黒い球体よりも打撃による殴打を選択する。拳を振り下ろす。精霊のバリアが再度再度展開され、園子を守る。通常の人間であれば破裂する威力の拳での打撃をバリアは防ぐ。何度も攻撃され、園子の満開のゲージが補充されていく。そこで園子は気づく、禊と戦うことに夢中になっている間に周囲にいた星屑たちがかなり奥にまで侵攻を終えていることに。このまま禊の相手をしていたら彼らが神樹へとたどり着いてしまう。躊躇っていられる状況ではなかった。それを解放するための言葉を放つ。
「満開！」
宣言と共に地の方から神の力が園子に向かって注がれる。余剰の力が衝撃波となって禊を吹き飛ばす。園子の満開特性である天方舟を展開する。禊を置いて園子は先行した星屑たちを追って飛び立つ。

幸いなことに方舟であれば猶予を持って星屑たちに追いつく。
「神樹様の方には行かせないよ！」
展開された方舟に備え付けられた大型の舵のような槍が星屑たちを撃ち落そうと迫る。今までの星屑であればそれで全滅していただろう。しかしここにいるのは生まれ変わった勇者の力を模倣した人型のバーテックス。
まず大剣を構えた星屑がその大剣を斜めに構えて迫り来る大木のような槍をいなし、仲間の星屑を守る。
ワイヤーの射出機能を備えた星屑たちが放ったワイヤーが槍に絡まり、８対計、十六本の槍を絡めとり、動きを封じる。
手甲を備えた星屑たちが園子の方舟の動力部である翼のパーツを殴り抜けることによって破壊する。
双剣を備えた星屑たちが身軽さを生かして方舟にのる園子を直接狙うが、園子が精霊によってさらに展開した槍によって防がれる。
左腕を狙撃銃のような武装に備えた星屑が園子の展開した槍を撃ち払い、守りを削っていく。
勇者たちがバーテックスに対して唯一持っていた数の有利、連携の強さという優位性は消失し、皮肉にも強大な敵に複数で立ち向かう勇者たちとその敵であるバーテックス、という構図が逆転していた。もはや生物の頂点たるバーテックスと呼ぶには力不足の星屑など、どこにもいない。そこにいるのは新たなる繁栄種としてあるべき本当の意味でのバーテックスであった。
予想だにしていなかった星屑たちの連携という強さに園子は返討ちにあう。
トドメと言わんばかりに数体の星屑が船に張り付く。張り付いた星屑たちの体に刻まれた天の神の刻印が光りだす。天からの神力が供給され、星屑を満たす。満たされた星屑は溢れ出る力を直接用いて、爆発に変える。さながら自爆テロのように自身を供物にして敵を殺す。
方舟を完全に破壊され、満開を維持できなくなり、園子は地へ落ちていく。

感覚を共有する禊は追いかけながら、バーテックスたちが自爆攻撃を実行したのを痛みを通じて理解する。
「またいくつも消えた。みんな戦いたがっているの？」
消えていくバーテックスの苦しみを共感し、禊は表情を曇らせる。何のためにその命を散らすのか。自らを供物に捧げる戦い方は好きになれなかった。そんな禊の意思とは関係なくまた爆発が起きる。
神樹にほど近い場所に出現していた友奈たちの目にも、その戦いの様子は映っていた。かつてバーテックスを退けた先代勇者が容易く落とされた。誰も目にも、もう勝ち目など見えなかった。落下してきた園子が近くに落下する。友奈たちはその身を案じて駆け出す。落下の衝撃で生まれた空間に乃木園子は倒れていた。
倒れる園子を友奈は抱き上げる。抱き上げられ、即座に園子の意識が回復する。
「乃木さん、大丈夫⁉？」
「いてて……、バーテックスがあんな風に連携するなんて。あれ？結城さん？　何言ってるのかよく聞こえないよ？　……そっか」
今回の満開の供物は右耳の聴力であった。右側から話しかける友奈の声や音はなくなり、左耳の聴力だけが園子に音を伝えていた。友奈の声を聞くために園子は左耳を彼女に向ける。その様子を見て、誰もが何が失われたのかを察する。失われた事実に友奈は息を飲む。
「乃木さん……、その、耳が……」
「そうみたい、でもよかった。これならまだ問題なく戦えるよ」
明るく園子は答える。友奈たちを不安にさせまいと気丈に振る舞っていた。今にも折れそうな彼女の細い体を抱える友奈は分からなくなる。
「乃木さん。どうして乃木さんはそんなに戦えるの？　そんなになってまで戦っても、もう勝てるかどうかも分からないのに」
悲痛な声が園子に問いかける。己を犠牲にしてなぜ戦うのか。どうして心が折れないのか。
「……もう無くさないって」
「え？」

「もう無くさないって、もう何も失いたくないって思ってたの」
ぽつり、ぽつりと園子は語り始める。己の思いを。ずっと誰にも言えず秘めていた想いを。
「勇者の御役目に選ばれた時、初めはとても名誉なことなんだって思った。大人たちはみんなそう言ってた。私もそうなんだって、よく考えずにそうなんだって納得していた」
「同じ様に御役目に選ばれたミノさんやわっしーともお友達になれて、すっごく嬉しかった。友達の出来なかった私に初めて出来た大切なお友達。ずっとお友達でいられるって信じてた」
懐かしい話をする彼女は穏やかなものだった。嬉しい記憶。それは誰にとっても大事な記憶。でも表情は暗転する。
「最初にいなくなっちゃったのはミノさんだった。私やわっしーの力が足りなくてミノさん一人に強い敵の相手をさせてしまって、あいつにミノさんがやられるのを見てるしかできなかった」
「次に消えちゃったのはわっしーだった。ミノさんを失って、もう負けない様に強くなろうって二人で誓って、新しい勇者システムを手に入れて、私たちは強くなった。でもその力自体が私たちから、たくさんのものを奪っていった。体の自由、普通の幸せ、そんな些細な日常を私は失った。私のお友達だった、あのわっしーはもうどこにもいない」
園子の視線は美森に向けられていた。もう誰もがその視線の意味を理解していた。東郷美森はかつて鷲尾須美であった。名前が変わった理由こそ察するを得ないが、美森がかつて、そうであった記憶が失われ、実際のことを知るのは残された園子、ただ一人であった。
「でも最後に一つだけ得られたものがあった。それがみーちゃん。私の三人目のお友達。かつてミノさんを消して、わっしーの記憶が消える戦いを起こして、私たち人間を消そうとした私たちの敵。でもその敵は魂を神樹様に食べられて、その器だけが残された。それがみーちゃん」
「それが禊くんの正体……？」
今までともに時間を共有し、思い出を作ってきた友人。それがこの

戦いを起こした存在であり、人類と敵対する倒すべき敵。今まで手にかけたバーテックスと同じだと言われ、友奈はその言葉を飲み込めずにいた。

対して園子の表情は穏やかなもの。

「みーちゃんはね、あの青い空を見て綺麗だって言ったんだよ？　それまで神樹様の作り出した偽物だって言って、嘲笑ったその口で綺麗だって言って、思ってくれたんだよ？　私たちと同じように感じて思ってくれる命になったんだって私は思って、だから失った私が生まれたみーちゃんを守ろうって決めたの」

「自由がなくなって祀られている私にとって逢いにきて、笑ってくれるみーちゃんが何よりも心地よくて、このまま時間が止まればいいのにってずっと思ってた。でも大赦はそう思ってなかった。みーちゃんを勇者に仕立て上げて、バーテックスと戦うための捨て駒にしようって、もし記憶が戻るようなら私が始末するって決まってた」

「結局、いなくなったはずのあいつが現れて、何もかもがも壊されて、みーちゃんはあっちに行っちゃって、また戦うことになっちゃった。もう私のことも覚えてないみたいだけど、もしみーちゃんが苦しいっていうなら助けたいんだ」

苦笑で園子は想いをしめる。勇者システムの補助を用いて立ち上がり、侵攻を続けるバーテックスと楔を捉える。

「だから私は何度でも立ち向かうよ。またみーちゃんと笑える日常が欲しいんだもん」

そして園子はまたも飛び去っていく。その足取りに迷いは無く、その心に曇りはなかった。

飛び去る園子を眺めて、友奈が立ち上がる。

「……東郷さん、風先輩、樹ちゃん、夏凛ちゃん。私、行くよ」

「どうして？　友奈ちゃんがこんな苦しい目に合わなくてもいいのよ？　勝てるかも分からないのよ？」

行こうとする友奈を美森が止める。勝てるかも分からない、勝てたとしても無事に終わるわけがない。そんな事実が美森を動かす。それに対して友奈は首を振る。

「違うよ。もしここで戦わなかったら、絶対私は後悔する。それだけは間違いないんだ。誰かが苦しむのも辛い目に会うのも嫌なんだ。苦しんでる友達があそこにいるのなら私は行くよ。だって私は勇者だから」

手元のスマートフォンが友奈の決意に反応する。敵に立ち向かう力、誰かを助けるための力。桃色の花が咲いて友奈は勇者装束を身に纏う。もう恐れる気持ちは無い。世界を守るため、みんなを守るため、彼女は立ち上がる。

次に立ち上がったのは夏凛であった。

「全く、友奈のくせにカッコつけすぎよ。私にも見せ場残しておきなさいよ。勇者部は私がいられて、みんながいられる場所なのよ。それを教えてくれたのは他の誰でも無いあいつ。それをあいつ自身に壊させるもんですか。ひっぱたいても連れ戻すわよ」

赤い花が咲いて夏凛は自身の勇者装束を身に纏う。もうそこには自身がそこいる意味を悩む少女はいなかった。仲間のために命をかける少女は立ち上がる。

次に立ち上がったのは樹であった。声の上がらない少女はスケッチブックに思いの丈を記して行く。

『私、勇者部に入って良かったです。声を無くしたことはもうどうしようもなくて、歌手になる夢は諦めるしかなくて。でもこの夢、勇者部に入らなかったら持つことも出来なかった。もしかしたらまた別の夢を将来持てるかもしれない。勇者部は私にとってそんな場所なんです。だから応援してくれた禊先輩が帰って来られるこの場所を私は守ります』

緑色の花が咲いて樹は自身の勇者装束を身に纏う。もう自分には何も無いと思う少女はいない。かつて姉の背に隠れていた少女はいなくなり、夢のため、将来のため、いなくなった少年を救うため、帰る場所を守るため、前へ進む少女はそこにはいた。

次に立ち上がったのは美森であった。

「私、もうこんな世界無くなっちゃえばいいってあの時、本当のことを知らされた時に思ったわ。いつか全てを失って、全てを忘れるくらい

ならいっそいなくなればいいって思ったわ。でもそうじゃなかった。こんな状況でも未来を求めて、諦めない人がいる。だから私はも守るわ、この美しい国を、みんなの帰る場所であるこの国を」

青い花が咲いて美森は自身の勇者装束を身に纏う。一度は絶望して諦めようとした。でも諦めない人が、状況を打破しようと動く人がいる。ならば何故、自分は諦めている。友達を置いて一人諦めるなど出来るはずもない。かつて自身の大切な人、乃木園子の話をする禊を美森は思い出す。あの表情に偽りなどなかった。もし今、自分と同じ様に彼も思い出を失っているのなら、自分がその想いを今度は彼自身に語ろう。無くしてしまったのなら語ってまた思い出にすればいい。過去を振り切って少女は立ち上がる。

最後に立ち上がったのは風であった。

「私、みんなにずっと申し訳ないって思ってた。大赦の御役目と私の復讐にみんなを利用する様なことをして、騙す様な真似をして、結果的に何かを失わせて、ずっと私の責任だって思ってた。それは間違いなく私の責任。でもこれからは責任じゃなくて私自身の理由で戦う。勇者部は私たちの部活で、みんなで揃って初めて勇者部なのよ。誰か一人でも欠けさせるもんですか」

黄色の花が咲いて風は勇者装束を身に纏う。みんなを巻き込んだ責任、妹の夢を失わせた罪悪感、それを全て背負って風は歩き出す。欠けた一員を取り戻して、もう一度初めから勇者部で、みんなで歩き始めるために少女は立ち上がる。

もう誰も迷っていなかった。明日の日々のために、いつもの日常のために少女たちは立ち上がる。

いつだって、神に見初められるのは無垢な少女である。そして多くの場合、その結末は残酷なものなのかもしれない。しかしその少女が結末に絶望して諦めるなど誰が決めたのだろうか？

「よし、行くわよ！　いつもの日常に戻るために、手始めにまずは世界を救うのよ！　勇者部、ファイトー！」

「オオー！」

皆の声が重なる。それだけでこの絶望的な状況でも勇気が途切れ

ない。不安がないといえばそれは嘘だ。でもそれ以上に諦められない理由が折れることがない。
最終決戦、六人の勇者たちは立ち上がる。世界を救うため、未来を守るため、いつもの日常を取り戻すため。神樹に向かうバーテックスを世界を殺そうとする敵を止めるために少女たちは飛び立って行く。
樹海の空。バーテックスたちを送り、接近してくる最強の勇者を迎撃するために小戸禊は静かに佇んでいた。何度目になるのだろうか。もう億劫になる程重ねた満開を展開した乃木園子が飛来する。互いに空中に静止し、静寂が訪れる。
禊は敵を射抜く憎悪の表情で。園子は愛しい人を見つめる恋慕の表情で。
「お前を殺す、勇者。お前を見ていると頭が痛くなる、胸がざわつく、だからこの感情を消すために僕はここにいる」
「連れ戻しに来たよ、みーちゃん。私、みーちゃんに言いたいことがいっぱいあるんだ。だから私は来たよ」
瞬間、二つの影は激突する。憎悪を纏い、敵を滅ぼすための黒い球体いくつもが放たれる。恋慕を乗せた槍が愛しい人を離さないように、？ぎ止めるためにいくつも射出される。
高速での戦いの中、お互いの攻撃はすれ違う。黒い球体が生まれて、槍が貫通してかき消していく。
遠距離では互いに決め手がないと判断すると同時に戦い方が変わる。高速での移動を得意とする方舟と舵の様に展開させた槍を振るう。背の翼を最大限に展開し、バーテックス数万体分のエネルギーを用いて加速力を得る。単純に防御に優れた装甲はされ自体が優れた武器になる。空中で何度も激突を繰り返す。
いくつもの激突を経て、攻撃と防御が素早く交互に入れ替わる。
流れ行く景色の中、禊は園子がこの激しい戦いの中笑っているのを見つける。
「何がそんなに可笑しい！　ふざけているのか！」
「だって私、みーちゃんとケンカするの初めてだよ？　なんだか嬉しくて」

微笑みながら園子の攻撃は緩まることはない。むしろ表情と反比例する様に攻撃は鋭さを増していく。園子との記憶のない禊からすれば意味の分からない発言であった。勢いを増す槍を処理しきれず、少しずつ禊の装甲に傷が生まれていく。
「だいたい、何だそのみーちゃんっていうのは！」
「みーちゃんはみーちゃんだよ。私が作った貴方のあだ名、私が貴方にあげた、人が生まれて最初に貰える名前と言う名の祝福」
「黙れ！　勇者が僕をその名前で呼ぶな！　僕をその名前で呼んでいいのは世界でたった一人、……あれ？　誰だ？」
無意識だった。憎悪するべき勇者に呼ばれたその名前は禊にとって初めて呼ばれたはずのものであった。ならばそのなで己を呼ぶ者などいないはず。
ならばその名前で呼んだのは誰？　分からない、理解できない。なぜその音を愛しいと思うのか禊には分からなかった。理由の分からない気持ち悪さが頭を撫でる。思い出すことを拒む様に全身に走った刻印が点滅し、体を締め付ける。動きが止まる。
「その黒いのがみーちゃんを苦しめるんだね。なら！　受け止めて、みーちゃん！」
頭上を取り、園子が選んだのは激突だった。方舟の先端に槍を使って禊を括り付け、地面に向かって一直線に最高で落ちて行く。そのまま、一切減速することなく、地面に激突する。
思いのありったけを乗せた加速は速度と重みの破壊力を司って衝撃で禊を押しつぶす。
押しつぶされた禊であったが生きていた。接触したことで黒い球体を手の平から発生させる。生み出された球体は方舟を飲み込み、園子の満開が強制的に終わらせられる。散華が行われ、何かが持っていかれる。しかし目も見える、耳も聞こえる、声もまだ出る、ならまだ戦える。躊躇うことはない。
「満開！　まだまだ行くよ、みーちゃん！」
「いい加減、落ちろよ勇者！　その耳障りな声をやめろ、頭が痛くなるんだよ！」

互いに空へ駆け上がり、第二ラウンドが始まる。何度もぶつかり合う二人を遠くからオドは眺めていた。
「おいおい、思ってた展開から随分と離れて来たな。あんな何度も満開して怖くないのかね？」
覚悟を決め、戦う園子を見て疑問を浮かべるオド。その表情は明るくない、かつて見た三ノ輪銀の輝き、その片鱗を園子は纏い始めていた。自分では出せなかったそれを見せる彼女を見て不愉快に感じる。大量に連れてきたバーテックス達も勇者達と戦い、おおよそ互角。数ならば圧倒的に勝っているはずが何故か勝てない。それどころか、むしろ押され始めていた。
好転しない状況に歯噛みしている時にオドが気づく、この場を満たす神樹の力場が乱れ始めている。何かそれに拮抗するものが介入し始めている。それが何かなど、考える必要もない。むしろ何故今になって降臨し始めたのか、そちらの方がオドには疑問だった。
「今更出てくるなんて、よっぽど焦らされたか？　親のくせに我慢の効かないもんだな」
勇者とバーテックスが未来をかけて戦う上空、そこには本来、塗り替えられた世界であり、太陽の様な炎がいくつも噴出しては消えるを繰り返しているはずだった。その炎をかき分ける様に、むしろ炎の海が割れる様に開く。そこから現れたのは巨大な鏡。かの、強大な天の神。その顕現体にして御神体たる八咫鏡を模した強大な姿が現れ始めていた。

第７話　僕の名前は小戸禊

人類とバーテックス、その３００年続く戦いは最終決戦を迎えていた。小戸禊の能力により勇者の経験とシステムをその身に宿したバーテックスは人の形を手に入れ、新たなる種として確立された。無限の個体増殖を繰り返すバーテックス達は質でも量でも勇者達を圧倒している。

神世紀３００年１０月１１日、蛇遣い座のバーテックス、オヒュカス・バーテックスであり、記憶も想いも失った小戸禊は勇者システム搭載型バーテックスを率いて人類への侵攻を開始した。

圧倒的な敵の出現、身を犠牲にすることを強いる勇者システムへの不安から人類を守護するための勇者達は戦うことを躊躇し、戦う意思を示せず勇者へ変身できずにいた。戦えずにいる彼女らを後ろに下がらせ先代勇者、乃木園子は人類を守りため、大切な人を取り戻す為ため単身、決戦に身を投じる。

戦いの中、勇者システムと人間の様に連携するバーテックスに園子は圧倒され、遂には撃墜される。しかしいくら挫けようとも乃木園子は諦めない。体の機能を供物に捧げながら何度も立ち上がる。

身を犠牲にしながらも人類を守るため、禊との明日を手に入れるために諦めない園子の勇姿は勇者部全員の心を動かす。それぞれの理由、それぞれの明日のために勇者達は立ち上がる。もう戦いを恐れる少女は無く、守るために戦う勇者の姿がそこにはあった。

そして小戸禊と乃木園子は対峙する。かつての記憶を全て失い、守りたいと思った園子に力を振るう。胸の奥に何故か湧き上がる温かい身持ちを握りつぶしながら。園子は己の槍と満開の力を振るう。例えどれだけ困難であろうとも諦める事はもう思うはずはなかった。

一方戦場から少し離れた上空、小戸禊の本来の人格であり、神樹の力を一部強奪して顕現したオドは戦場を俯瞰しながら、自身の生みの親である天の神が顕現しようとしていることを察知していた。

勇者とバーテックスの戦いは第二局面を迎えようとしていた。

神樹を滅ぼすため、飛行する鳥の様にＶ字に隊列を組んだバーテッ

クスが樹海化した四国の空を侵攻する。悠然と進むバーテックスに待ったをかける赤い影が一つ。勇者部の一番槍は迷うことなく、バーテックスの集団に襲撃を仕掛ける。
「勇者部部員、三好夏凛ここに参上！　神樹様にたどり着きたいならまずは私たちが相手よ！」
　小回りが利く二本の日本刀で先頭のバーテックスに仕掛ける。しかし連携を獲得したバーテックスにそれは効かない。先頭のバーテックスは素早く一段下がり、次に並んでいた二体のバーテックスが手にした大剣で攻撃を防ぐ。さらに三段目に並んだバーテックスがワイヤーを射出し、夏凛を搦めとる。
「ちょっ、そんなの聞いてないわよ！」
　絡め取られた夏凛を狙って、左腕が狙撃銃に変化したバーテックスが砲撃を繰り出す。あわや一人目撃墜というところで待ったがかかる。バーテックスの放った砲撃は正面から飛来した狙撃によって相殺される。夏凛を縛っていたワイヤーも飛来した数本の小刀によって断ち切られ、夏凛は再び自由を得た。
　突出していた夏凛を風がたしなめる。
「夏凛、一人で前に出過ぎない！　あいつら今までの奴らとは大違い。全員で連携しながら戦うわよ」
「わかったわ、指示を頂戴、部長！」
「任せなさい。全員、お互いを守りながら戦うわよ！」
「了解！」
　みんなの声が重なる。一人ではなく、みんなで。勇者達は強大な敵に立ち向かっていく。まず飛び出したのは友奈であった。
「勇者パンチ！」
　友奈の拳が空中のバーテックスを捉える。強化された膂力と精霊の力を組み合わせ、敵を吹き飛ばす。敵を吹き飛ばし、攻撃の反動でその場に静止する。空中での制止をバーテックスは見逃さず、速やかに迎撃しようと小刀を構えたバーテックスが殺到する。迎え撃とうとする友奈の足元をワイヤーが走ると同時にスマートフォンにメッセージが入る。

『友奈さん。私のワイヤーを足場にしてください！』
「ありがとう、樹ちゃん！」
一度振り返り、樹に礼を言った後、友奈は空中に蜘蛛の巣の様に張り巡らされたワイヤーを伝って走る。空中を泳ぐように飛ぶバーテックスとの機動力の差が埋まる。ワイヤーの上を走り、時には反動を利用することで弾けるように飛ぶ。空中を地面を走る以上に変幻自在に移動し、敵を翻弄しながら、友奈は敵を殴り抜けていく。
協力技を用いて勢いづいた友奈を狙撃銃のバーテックスは見逃さない。変幻自在の機動力で砲撃が当たらないないのなら面での制圧を行えばいい。計、二十体のバーテックスが空中に隊列を組み、同時に砲撃を繰り出し、一面の空間を塗りつぶす様に火砲の光が視界を埋める。
「そんな攻撃、女子力の前には無力！」
風は精霊の力を発揮する。地面に突き刺した大剣はその大きさを変える。精霊の力を成しこまれた大剣はみるみる大きさを変え、巨大な壁にその姿を変え、迫り来る砲弾を全て受け止める。砲撃を終え、弾丸の補充を行うバーテックスに夏凛が迫る。
「今度こそ仕留める！」
「援護するわ、夏凛ちゃん！」
『細かいのは任せてください！』
身軽な身のこなしを生かし、バーテックス達の狙撃銃に形を変えた左腕を半ばで切り落としていく。夏凛を迎撃しようと殺到した拳を強化したバーテックスを美森が正確に頭を打ち抜き、間に合わないものは樹がワイヤーを伸ばして侵攻を阻止、網の様に広げて一つにまとめていく。
「これで一網打尽よ！」
バーテックスが網によって一まとまりになったところで風が巨大化した大剣の持ち手の部分を蹴り飛ばし、大剣はその圧倒的質量でバーテックスを押しつぶす。そして神樹に迫りつつあったバーテックスが一掃された。その様子を見て夏凛がぼやく。
「ねぇ、風。今までずっと気になってたんだけど、何で女子力を込めた

らパワーアップするのよ」
「女子力はね、私の決めゼリフなのよ！　要は気合と根性よ！」
「思ってた以上に女子の華やかさが無かったわ！
　狙撃銃のスコープを覗き込んだ美森は結界の外から迫り来るバーテックス達の応援を確認する。
「夏凜ちゃん、みんな薄々感じていたわ。それより敵、第二陣来ます！」
「ようし！　あんた達覚えときなさいよ。第二ラウンドも気張っていくわよ！」
「了解！」
　一度、集合し仲間の無事を互いに確認する。いつ終わるのかもわからない戦い、それでも勇者達の顔に迷いの表情はない。冗談を言い合えるくらいには気力も満ちていた。勢いは衰えず、それぞれの武器を持って悠然と敵に立ち向かう。その姿は紛れもなく勇者と呼ぶべきであった。
　勇者部が奮戦する一方、禊と園子の戦いも苛烈を極めていた。オヒュカスの能力を駆使し、同胞であるバーテックスと繋がり、指示を出す一方で接続した繋がりからエネルギーを補充し続ける禊。満開を繰り返し、体の機能を幾つも供物に捧げながら、戦闘能力そのものを強化していく園子。両者の戦いは長引けば、長引くほど互いが強くなり、千日手の様相を示し始めていた。戦いの中、園子は諦めることなく禊への呼びかけを続ける。
「もう戦うことをやめよう、みーちゃん！　どうして痛みを消したいと思うのに戦うの⁉？　一緒に帰ろう？」
「お前たち人類さえいなければ、痛みは生まれなかったんだ！　３００年前の因縁はまだ終わらず、続いているんだ！」
　槍の射出に伴う問いに、黒い球体によるすり潰しの返答。押し問答は続いていく。
「お前たち勇者、人間がいなければ、今、僕らが感じている痛みは生まれなかったんだ！　みんなは苦しんでるんだ！　何も悪いことなんてしてないのに！　だから痛みを消して僕は仲間を痛みから救う！」

「それで戦っても、みーちゃんもみんなも苦しむだけだよ！　戦いを止めれば誰も傷つかずに済むよ！　それだけでいいんだよ！」
「勇者がそれを言うのか！　僕らは止まれない！　そういう風に作られたんだ！　それ以外の生き方なんて僕らは選べない！」
　憎悪が拳に乗って園子の方舟を中破させる。破壊された箇所を槍を添え木の様に用いることで飛行能力を維持する。
「思い出して、みーちゃん！　あなたはそんな生き方をしてなかった！　私と一緒にいてくれた！　戦い以外の生き方も選べてた！　あなたの意思で！」
「嘘をつくな！　僕にそんな記憶は無い！僕はオヒュカス！　最後のバーテックスだ！」
「違う！　あなたは小戸禊！　思い出して、みーちゃん！」
　幾度となく、二人は互いの攻撃をぶつけ合う。その時、樹海の中からいくつもの枝が伸びる。伸びた枝は園子を援護する様に禊の足に絡みつき、動きを止める。
「神樹が直接、僕に介入するか！　消えろ！」
　黒い球体を発生させて、絡みついた枝を切り離す。しかし足に絡みついた部分の枝はまだ残っていた。瞬間、禊は足に熱が走るのを感じる。まるで血管に溶かした鉛が流れ込むような感覚が全身を巡る。熱は全身を包み、体の中の何かがその熱に反応する。自分の中に別の誰かが出現する圧迫感、体が裂けるような痛みが全身を走る。しかし不思議と痛烈な痛みより妙なも心地良さがある。
「僕に何をした！　あぁ、気持ち悪い、何だこれは！」
「神樹様の援護？　でも今なら！」
　突如行われた神樹による謎の援護。それは禊に不思議な影響を与え、動きを鈍らせる。それを千載一遇のチャンスと見た園子は果敢に突撃を繰り出す。捕縛用の槍を展開し、禊の体を何ヶ所か貫通、地面に縫い付ける。
　地面に立たせられる様に禊は地面に縫いつけられる。縫いつけたことを確認して方舟から降りて園子は禊の前に立つ。両手で操作していた槍を切り離し、勇者装束の補助を受けながら足で立って、園子

は両手で優しく禊の頬に触れる。
絶体絶命だと禊は思った。全身は自由を奪われ、黒い球体は神樹の流した熱のせいで思うように発生させることができない。彼女がこのまま手に触れた頬を思いっきり捻じ曲げれば頚椎が折れて自分は死ぬ。
仲間達を救うために立ち上がったがここまでのようだ。初めての実践にしてはよく奮闘した方だろうか？諦めて園子に向き直って禊は驚く。今、いつでも己を殺せるはずの勇者、敵は涙を流している。
「ねぇ、みーちゃん？　どうしても戦うことをやめられないの？」
「僕はバーテックス、人類を滅ぼすために戦う天命を受けている。それ以外の生き方をする自由なんて最初から無い」
繰り返すように禊の返答は同じものだった。天命に逆らえば、逆らったバーテックスは命を終える。選択の自由など最初からなかった。
「違うよ。あなたは小戸禊。あなたは自分の生き方を自分で選んでた人。私たちの二年間、あなたは確かにそこにいて、今もこうして私の前にいる」
不思議な響き、そんな呼称で呼ばれたはずがばいはずなのに、記憶が無いはずなのに、耳をなぞる音がなぜか懐かしい。理解できない感覚に混乱し、声が震える。
樹海から伸びたか細い枝が両足に絡みつく。そこから暖かい感覚が流れ込む。知らない記憶、知らない思い出が脳裏をよぎる。包帯に包まれた少女と己が向かい合う。
―はじめまして。私の名前は乃木園子。あなたの名前は？
―分からない。何も思い出せない。僕は誰？
「小戸禊？　それは何？　僕の名前はオヒュカスで、君なんて知らない」
「何度でも言うよ。あなたの名前は小戸禊。大赦はあなたを汚土を禊ぐための存在として使い潰そうと考えて、名前と言う名の呪いをあなたに掛けた。でもそれは違う。最初にあなたの名を呼んだのは私。あなたは隠世から帰ってきた神さまと同じように小戸の地で禊がれ

た存在。過去を捨てて生まれ変わった人、未来のために生まれ変わって欲しいってと願って、私は呪いをあなたに掛けた。みーちゃん、あなたはどちらを選ぶの？」
―あなたの名前は小戸禊。素敵な意味があるあなたの大切な名前。
―小戸禊。僕の名前は小戸禊。そうか、僕は小戸禊なんだね。
禊の中で眠っていた赤い花が花開こうとしていた。一度は摘み取られ、失われた花。しかして土壌を変え、静かに生まれ変わった存在を見守っていた。
二人の様子を見下ろしていたオドは鼻で笑う。
「くだらない。そんな呼びかけが何になる？　俺たちは定められた存在。選ぶ自由なんてない」
『選ぶのはお前だ。もし、お前がそれを選んでくれるのなら、アタシも園子も須美だって、きっと、お前を助けるよ』
優しい声が禊に届く。かつて禊を導き、助言した声が禊の中から聞こえた。聞いたはずがないのに知っている二つの声。記憶も、心も、言葉も、何も覚えていなくても、体の感覚がそれを覚えている。
天の神は非創造物の反逆を許さない。全身を走る刻印が血の様に赤く光り、禊の意思とは関係なくその両腕を動かす。尋常でない力が腕に刺さる槍をへし折り、両手が園子の首を掴む。意思とは関係なく、万力の様な力が園子の呼吸、血の巡りを遮る。園子の体が浮く。
少しすれば命が散る。そんな危機的状態の中、園子は優しく禊に微笑みかける。
「選んで、みーちゃん。私はあなたを信じてる」
何もしなくても、この眼前の勇者は生き絶える。バーテックスであれば喜ぶべきだ、使命を果たし、創造主である天の神に作られた恩義を返せる。喜ぶべきだ。今、頭の中の記憶はそう答えていた。
迷うことなどないはず。勇者を殺せ！記憶はそう叫ぶ。
―そんな訳が無い。
記憶の声を否定する。必死に言う事を聞かない両腕を離そうと動かす。これは違う。望んでいたことはこれじゃない。涙が止まらない。止めて。違う。感情が叫ぶ。僕が望んでいるのはこれじゃない。

こんな事じゃない。必死に体に下される神の詔に逆らう。
「違う……、違うよ。神さま、お願いだ、もうこんな思いをするのはたくさんだ！　お願いだ。誰か、助けて！　僕はもう、戦いたくない！」
バーテックスは戦うため、敵を滅ぼすために作られた存在。それが戦うことを否定した。繋がり、心を共有し、禊の感情を受け取ってしまったバーテックス達は混乱し、動きが止まる。
今、この時に同胞の中から生まれた感情、言葉にバーテックスは存在意義が揺さぶられる。
あの個体は何を言っている？　それはなんだ？　何故そう願う？
答えの帰ってこない疑問ばかりがバーテックスの繋がった心を占めていく。得られない答えを求めてバーテックスたちは禊の元へと飛んでいく。
「あれ？　バーテックスたち、どこを見てるの？」
「みんな、一ヶ所に向かって飛んでいく？」
戦っていた勇者たちは突然動きの止まったバーテックスたちに困惑する。どのバーテックスも侵攻していたはずの神樹には見向きもせず、先ほどまで戦っていた勇者たちを無視して、一点を向いてその方向へ飛んでいく。敵の唐突な行動に困惑した勇者たちもそれを追いかけて跳んでいく。
禊と園子の時間は止まっていた。もう戦いたくない。はっきりと禊はそう叫んだ。その願いを受けてなのか、神樹の根が足元から伸び、禊に刻まれた刻印をなぞっていく。刻印を塗りつぶすように体から牡丹の花が咲いていゆき、刻印が放っていた熱が抜けてゆく。それの同時に体を縛っていた力が消えていく。足元から牡丹の花が咲き乱れ、二人の足元を包んでいく。園子の首にかけられていた両手が離れる。
浮いていた足が地に着く。十数秒の間首を絞められ、体のバランスが崩れる。崩れ落ちようとする園子に禊は慌てて両手を伸ばす。腕を伸ばし、抱きかかえる。
「えへへ、やっとみーちゃん捕まえた。みーちゃんの鼓動、温かいね」
抱きかかえ、その体温が伝わる。それなのに鼓動が伝わらない。心

臓が動いていない。そう、小戸禊はこの他でもない、園子の鼓動を知っている。たとえ記憶がなくても、思い出を失っても、体が、感覚が、感情が、それを知っていると禊に伝える。

園子の首に掛けられた赤いサンゴの首飾りが目に入る。確かに誰かがそこにいた証、小戸禊がかってそこにいた証があった。

「……そうだ。僕は君を知ってる。もう記憶なんて何も残ってないけど、それ以外の全てが伝えてくる。でも分からないんだ僕が誰なのか、思い出せないんだ」

「いいよ、私を使ってみーちゃん。あなたならそれが出来る」

生まれ、与えられた力を振るう。心が繋がる。繋がった感覚から彼女の記憶や思い出が流れ込んでくる。彼女の思い出、そして禊の知らない彼女と禊の思い出がいくつも浮かんでくる。

「あっ！　みーちゃん。今日も来てくれたんだね～」

「うん。今日も来たよ。迷惑だった？」

「ううん、もちろんそんな事ないよ～」

「そっか。ならよかった。今日はね……」

「それで帰って来て、こっちに来たの？」

「うん。やっぱり勇者に選ばれたよ」

「ごめんね。みーちゃんに負担をかけてばかりで……」

「いいんだよ、気にしないで。少なくとも、何もしないのは嫌だったから」

「気持ちよさそうに寝てたけど、そんな夢を見ていたの？」

「見てた夢？　……うん、綺麗な海辺をね、歩いている夢。濡れて少し硬くなった砂浜を鳴らしながら、寄せてくる波を踏んだり、回ったりして波のリズムで踊る夢。珊瑚礁が綺麗でね、……えへへ、少しメルヘンかな？」

「そんなことはないよ。誰だって、見たい夢を見ればいいよ」

「ねぇ、園子？　どうして何も答えてくれないの？」

「ごめんなさい、みーちゃん。今は話せる勇気がないの……。だから、だから少しだけ待っていて欲しいの」

「だからね？　みーちゃん。もう私は本当のことを話さないことをや

めるよ」
「無理はしなくていいんだよ？　もし君が勇気を持てないなら、勇気が持てるまでいつまでも待ってるから」
「だからね？　勇気が欲しいの」
「……ねえ園子」
「みーちゃん、そいつ言うことに耳を傾けないで！　大丈夫、何があっても私はみーちゃんの味方だから……」
「僕は君たちを殺すために作られたの？　君の体がそうなっているのは、君が二十回以上満開したのは僕と戦ったから？」
「待ってよ……、待ってよ、みーちゃん！　私を一人にしないで！」
　二人の思い出が園子を通じて共有される。園子を通して禊は失っていた二人の記憶を取り戻していく。思い出し、涙が頬を伝う。抱きしめ、支える腕に力がこもる。
「……まただ。僕は君を傷つけて、また君から奪った。そんな事、欠片も望んでなかったのに……」
「もういいの。もうそんな事はもうどうでもいいの。ただいまって言って？　私をもう二度と置いていかないで」
「もう……、もう絶対に君を一人にしないよ。ただいま、園子」
　禊の言葉に園子は安堵する。思い出を共有してもう隠す意味もないのだろう。園子は胸の奥に秘めていた思いを口に出す
「みーちゃん、私ずっと怖かった。いつか君が本当のことを知ったら、どこか遠くに行っちゃうんじゃないかって思ったら、本当のことが何も言えずにいた。だって左目と口くらいしか自由にならない女の子だよ？そんな子と好きで一緒にいようなんて思って貰えるか不安で、怖くて」
　園子の胸の内を聞いて禊はそれを否定する。自身の記憶などなくても、感覚と思いが、その言葉を否定して禊の言葉を作る。
「そんな風に言わないでよ。僕はいつだって君に逢いたいからあの病室に行ってたんだ。記憶を取り戻したいって思いもあったけど、それ以上に君が僕の理由だった。例え、君がどんな風になっても僕は間違いなく君に添い遂げるよ」

「ほんとう？」
「ほんとうだよ」
「ほんとうに？」
「ほんとうだよ。例え君が嫌と言っても、もう絶対に離さない」
「……うん！」
もう離さない。その思いだけを込めて禊は園子を抱きしめる。今、確かに感じるこの体温だけは何の嘘偽りないここにいる実感を禊に与える。園子は思う。取り戻すために再び戦いに身を投じ、確かに取り戻せた。今度は守れた。
二人を祝福するように牡丹の花がいくつも咲いていく。二人を取り囲んだ無数のバーテックスは感じる。繋がった心から禊の思いが直に伝わってくる。
優しい感情、愛しいと思う心。今まで感じたことのない心地よさを人を滅ぼすための兵器たちは追体験していく。あそこにいる勇者は滅ぼす敵のはず。しかし、誰もこの感情を消すために動きたいと行動しようとはしなかった。
行動できず、ただじっと眺めているだけのバーテックスたちに禊は振り向く。ただ素直に思いの丈を心から直接でなく、己の言葉に変える。
「ねぇ、みんな？　僕生まれて来てよかったよ。確かに生きてると苦しいこともあった。でも今、僕が感じてるこの嬉しい気持ちもここにいなかったら感じることはなかった。きっとそれが根を張ってここに生きるってことなんだと思う」
目的を与えられて作られたバーテックスが自身でここにいたい理由を持った。確かに今、小戸禊はこの地に生きる一つの命となった。
しかしそれを許さない者もいる。苛立った表情のオドがそこにいた
「めでたい再開のとこ悪いがもう時間切れだよ。俺たちはそんなもん選べないんだよ」
「オド？　君は何を言ってるんだ？」
禊の疑問に答えるように空が大きく変わる。神樹の結界の天井で

ある星のない空を裂くようにそれは現れた。巨大な八咫鏡。天の神の顕現体であるそれは直接、この世に出現していた。バーテックスに任せず、天の神自らが人類を攻撃するという意思表示であった。
鏡が光り、大量の光の矢が降りしきる。数えるのも馬鹿らしくなる数千の矢は神樹の樹海へ降り注ぎ、樹海内にいた全て、勇者もバーテックスも関係なく攻撃していく。バーテックスは大剣を持ったバーテックスが同胞を守ることで攻撃を防ぎ、勇者は精霊のバリアが攻撃を防ぐ。思わず禊も黒い球体を展開して、園子と己を守る。いくつもの光の矢が結界にあたり、少しづつ削ぐように結界を破壊していく。結界を維持するために神樹の力が使われる。矢が当たれば、当たるほど結界の内側に張られていた樹海の根が枯れていく。そして赤い影が結界の中を走った。
それは一瞬のことであった。降り注ぐ光の矢。その光景に気を取られていたことは誰も責めることはできないだろう。気づけば禊の目の前にはオドがいた。胸に痛みが走る。視界を下に下ろす。胸から腕が生えていた。違う、胸に腕が刺さっていた。
「……え？」
「悪いな兄弟。それ、返してもらうわ。お前が戦えないって言うなら、もうそれは俺の役目だ」
胸を貫く腕から体に満ちていた力が流れ出るのを感じる。纏っていた白い鎧が解除され、着ていた学生服が露わになる。体の力が抜け、崩れ落ちる。胸に空いた穴から止めどなく血が流れる。
「みーちゃん！　大丈夫⁉？　ねえ、大丈夫だよね⁉？」
力が抜け体が崩れ落ちる。園子は反射的に槍をあるだけ射出し、オドを牽制する。槍を放たれたオドは大きく後ろに飛び、バーテックスとしての白色の鎧を纏っていた。バーテックスとしての立場が禊からオドへ移った証であった。
空中に飛び上がり、オドは右手を向け。黒い球体を放って二人を消そうとする。少し残念そうにオドは呟く。
「さようなら、兄弟。お前がそっちに着かなかったら、こんな事にはならなかったんだがな。だがこれが俺たちの生き方だ。これ縛られて

るんだよ、俺たちは！」
吐き捨てるような台詞と共に視界が黒で染まっていく。物体の強度に関係なくねじ切る黒い球体が二人に迫る。どうやってもこのままでは回避しようもない。もう力が抜けていく体を引っ張って禊は園子を庇うように抱きしめる。
その時、咲いていた牡丹の花たちが黒い球体に呼応するように光る。その赤い光は神樹から、そして今まさに二人を消そうとするオドの内側の両方から発していた。
突如現れた光と共にオドは困惑と胸の痛みを感じる。
「何が起こっている。今更なんだって言うんだ！」
「二人はやらせない！　アタシの大事な仲間をもう誰も傷つかせない！」
少女の声がオドの内側から響く。止まることのない胸の痛み。オドは、園子は、禊はこの声を知っている。忘れるはずがない。バーテックスに心を知るきっかけを、小戸禊が生まれるきっかけを作り出した勇者を。
禊の中に残留していた因子とオドと一体化した魂がオドの接収によって今ひとつに戻った。神樹の後押しを経て、失われた肉体が神樹の力を使って再構築される。
先程オドが禊の胸を貫いたのとは逆に体の内側から腕が突き出る。その腕が纏うのは赤い勇者装束。白色の鎧に牡丹の花が咲く。突き破って、飛び出て、彼女は園子と禊を守るように着地してオドに向き合う。
確かに自身の両の足で立った後ろ姿を二人は見た。忘れるはずがないその後ろ姿を二年の時を経て二人は再び見つめる。二年前に見た時とは少しだけ変わっていた。三人の中で一番低かった背は伸び、短く後ろでまとめていた髪は女性らしく背中まで伸びていた。でも変わらない屈託のない笑みで彼女は振り返る。
「ただいま、園子。助けに来たよ」
「ミノさんなの？　本当に？」
忘れるはずもない。初めてできた友達の顔を忘れ得るはずがない。

それでも思わず聞いてしまう。消えてしまったと思っていた存在が今、こうして自身の目の前にいる。奇跡と呼ばずして何と呼べば良いのだろう。

再開を喜んでいたかったが状況はその時間を与えてくれない。銀は正面を飛ぶオドに向きなおる。こちらも二年ぶりの再会。向き合う互いの表情は親しいものに向けるものではない。

「まさか、俺みたいに神樹の力で肉体を再構築できるとはな。何をしに来た？お前たち人間はこれから滅びる。今更一人増えたところで神には勝てない」

「2年前の借り、利子も付けて返させてもらう。須美も園子も禊も全部アタシが守る。もうお前に好きになんてさせない！」

白色の鎧と牡丹の花が激突する。2年前の再開であるように両者は持てる全てを出し切って戦う。自身が神樹に近づいた事により獲得した高い親和性に加え、禊のために用意された最新型の勇者システムを纏い、銀は戦う。癒着こそしっかりとしたものではないが、元来の攻撃力の高さはより磨かれ、オドに接戦する。

二人の戦いが白熱する中、バーテックスたちはそれに見向きもしなかった。見上げるものと見下ろすもの。その二つに分かれていた。

見上げるバーテックスたちは見た。神樹の結界に阻まれながらもこちらを攻撃し続ける天の神を。どうやら天の神にとってバーテックスたちが樹海の結界の中にいることは気に止めるようなことではないようであり、どこかのバーテックスはそれを悲しいと思った。一体がそう思えばオヒュカスによって編まれた心の伝達網を伝って全体にその思うが広がっていく。

見下ろしたバーテックスたちは見た。先ほどまでオヒュカスとして全体を牽引していた個体は胸に空いた穴から止めどなく血が流れ、その命の灯火が消えようとしていた。同胞を守ろうと立ち上がり、戦った個体が寸分違わない同一個体に胸を貫かれ、敵であるはずの勇者に介抱されていた。消えゆくその命、命が失われることを悲しいとどこかのバーテックスは思った。一体がそう思えばオヒュカスによって編まれた心の伝達網を伝って全体にその思いが広がっていく。

園子の悲痛な声が樹海内に響く。それを嘲笑うように天の神は攻撃の手をやめない。神樹の全てを薙ぎ払うように極光が天から降り注ぐ。人々を守るため、神樹は結界を広げて内側を守る。降り注ぐ極光が結界を削り、少しづつ神樹の力を削っていく。広がっていた神樹の枝は枯れ始め、神樹の残り少ない寿命を示していた。

神樹の寿命と言う名のタイムリミットはもう残り僅かであった。

息も絶え絶えになりながら、禊は空を見上げていた。

少しづつ薄くなっていく神樹の結界。ぶつかり合うオドと銀。このまま見ていれば結界は破れ、降り注ぐ滅びの光は神樹諸共、人間も、バーテックスも、世界も終わらせてしまうのだろう。

視界の端からさらに駆けつけて来たバーテックスたちが目に入る。一緒にやって来た勇者たちは胸に穴を開けた禊とそれを介抱する園子を見て驚愕し、側に駆け寄る。

「禊くん⁉？　大丈夫⁉？」

「友奈ちゃん、あの傷はまずいわ。樹ちゃん、ワイヤーで止血できる？」

『任せてください！』

ワイヤーを伸ばし、胴に巻きつける。包帯のように巻かれたワイヤーではあるが、すでに足元はおびただしい量の血によって赤く染められていた。それでもなんとか助けようと風が両手で傷口を抑える。それでも禊の顔は血の気がなくなり、白くなり始めていた。上空にある神樹の結界も破れ始め、少しずつ漏れ出した光が樹海を焼く。反応が薄くなり始めた禊に風は焦りを感じ、呼びかける。

「ちょっと！　禊！　何に死にそうになってんのよ！　誰も欠けさせないわよ！　みんなで生き残るのよ！」

「風！　まずいわ、神樹様の結界がもう持たない！　とりあえず、禊をどこか安全なところに運ばないと」

焦る気持ちとは関係なく、無情にも神樹の結界は破れる。結界を貫

通した熱量が空を焼きながら地上に迫る。このままでは全滅になってしまう。勇者たちは覚悟をもう一度決める。誰からと言うことなく、溜まった満開のゲージを消費しようと立ち上がる。

それと同時に、勇者たちの先を行くようにいくつもの白い影が上空へ飛び立っていく。白い影の正体はバーテックスであった。神樹を滅ぼすために集結したバーテックス数万体が天の神の放つ光と神樹の間に集結する。それぞれが全身を大きく開き、隙間を埋めるように広がる。迫っていた熱量はバーテックスという壁によって阻まれ、神樹を守る。炭化し、力尽きた個体が落下し、流れ星のように樹海に降っていく。

突如行われたバーテックスたちの行動に戦っていたオドと銀は困惑する。

「お前たち、何をやっている。お前たちが守っているのは敵なんだぞ！」

「……バーテックスが神樹様を守ってる？」

誰に命令されたわけでもない、自発的に行われたバーテックスの行動は神樹を守る。勇者たちと禊はただ下からその光景を見つめていた。敵であるはずのバーテックスが神樹を守る。誰もが何が起きているかを理解できずにいた。禊を除いて。

彼らの選択を禊は嬉しいと思った。痛いと感じる声が聞こえた。苦しいと感じる声が聞こえた。しかしそれらを感じていても諦めようとする声は聞こえなかった。

「みんな……、それを選んでくれるんだね。……なら、もう後僕ができるのはこれだけか」

禊は少し悲しそうに自身の空いた胸に手を当てる。禊は知っている。この状況を、勇者とバーテックスが世界を守るためにその身を削いでいく状況をどうにかできる手段を。空いた手で樹海の根に手を触れる。

「……神樹様？　僕の声が聞こえるかい？　……このままじゃあ、君も、僕も、みんなも消えて無くなってしまう。それだけは嫌なんだ。だから神樹様、僕を使え。僕を君が生きるために使え！」

肺もほとんど潰れているはずなのに禊は力強く宣言する。本来の製造目的の一つ、神の養分として使われる新人類としての力。器である禊にはその力があった。それを天の神のためでなく、敵である神樹に自身を生かすために使えと禊は言う。

禊の言葉に答えるように樹海全体が光を放つ。自身と神樹とが繋がり出したのを禊は感覚を通して感知する。体が光り始め、それを見ていた周囲は驚愕する。明らかに禊に起きていることは無事で済むことのようには見えなかった。園子には取り戻した禊がまたどこかへ行ってしまうような気がした。不安で声が震える。

「みーちゃん、何をしてるの！　やめてよ。もう、いなくならないって約束したよね！」

「あはは……、ごめんね園子。また君との約束、破りそうになっちゃった。でも大丈夫、僕は一度神樹様と一つになる。一つになってみんなを助ける。その後必ず、君の元に帰る。必ず帰るから信じてくれるかな？」

「怖いよ、帰って来られる保証なんてどこにも無いんだよ？　……でも、信じてるから、絶対帰ってくるって信じてるから。それまで、みんなでここを守るから」

「ありがとう、園子。風部長、みんな、僕が帰ってくるまでの時間稼ぎをお願いしてもいい？」

「分かったわよ、信じてるから絶対帰ってくるのよ？」

周囲の誰も、禊がいなくならないいう言葉を信じていた。それを見て安心した禊は瞳を閉じる。自身と神樹の境界が曖昧になっていくのを感じる。曖昧さに身を委ね、意識が落ちていく。そこで禊の意識は途絶えた。途絶える直前、禊は願った。

「また、みんなに会いたい。そんな未来が僕は欲しい」

周囲は禊を見ていた。禊が目を閉じると石が割れていくように体に亀裂が入っていく。バーテックスとして生まれた小戸禊がその製造目的を果たし、その命が朽ち果てる。

でもそれは終わりでは無い。世界を存続させるためにその身を使

い、小戸禊という命は花が朽ちるように土に還っていく。
完成された神の養分である禊を取り込んだ神樹はその姿を変える。大樹であったその体を崩し、広がっていく。広がり続ける神樹は四国を包んでいた結界を超え、結界の外である炎の海へ広がっていく。樹木は火に触れてしまえば燃えて無くなる。しかし広がる神樹はその炎を塗りつぶす様に広がる。天の神が生み出した炎の海の領域が神樹のものに塗り替えられていく。それまであった神樹と天の神の力関係が逆転し、神樹が広がっていく。広がり続け、炎の海であったそこは小さな苗が芽吹く土地に変わっていた。後に残ったのは空に鎮座する天の神と地に広がった神樹であった。
バーテックスとして生まれた小戸禊という存在は消え、その命は世界の礎となった。

最終話　小戸禊は勇者になる

禊の体は土に還り、その遺骸は神樹の糧になった。禊を取り込んだことで神樹はその力を大きく増す。神樹はその形を大きく変えていく。大樹であったその本体は形を変え、新芽の芽吹く大地へと姿を変えていく。芽吹く大地は広がり続け、結界の外の炎の海である天の神に支配された大地を禊ぎ、ただの土地に変えていく。奪い返すのではなく、禊いでいく。それはその土地が神の支配から解放され、どちらの神にも属していない大地になった証だった。

小戸禊を一部に変え、その心を受け止めて神樹は答える。炎の海であった外界が元の大地に戻り、その土地に神樹を構成する神々が溶けていく。

どれほど天の神が抵抗しようとも、大気に溶けた神々がバリアを張って大地を守る。

穢れのない大地が広がり続け、ついには炎の海はその姿を消した。遠い空の向こうから見れば地球という星が命の芽吹かぬ死の星から新芽が芽吹こうとする命の星へと生まれ変わっていく。神の加護などない、ただ命に満ちた星へ。

変わっていく星に思うことはそれぞれ違った。

勇者たちは初めて見えた本物の星空を綺麗だと思った。それまでの樹海の空には星は一切存在していなかった。生まれて初めて見る夜空は胸が詰まるほど美しかった。

バーテックスたちは初めて触れた大地を綺麗だと思った。命が芽吹き、広がる大地はどこまでも命を内包していた。直に触れ、大地が脈動し、命が鼓動することを確かめる。未熟な情緒で理解する。これは美しいものだ。禊に繋がり、変われた者たちは一様にそう思った。

そしてそれを良しとしないものが二つ。困惑と怒りの表情をしたオドと未だ攻撃を続ける天の神であった。おどの絶叫が響く。

「なんだこれは、こんなことあっていいはずがない！　神が支配を自ら投げ捨てる？　挙げ句の果てに星と一体化して無に還る？　ふざけるな、そんな事させるものか！」

翼を広げ、オドは急加速する。樹海の最奥に未だ残っている神樹の本体を潰すために空を裂いていく。それに追いつく花が二つ。蓮子と牡丹。満開を展開した園子とそれに乗った銀がオドに追いつく。槍を射出し、銀が飛び出し、上からオドを叩く。黒い球体を防御のために展開し、迫り来る無数の槍を防ぐ。戦斧の力を解放し、それを推進力に空中を駆け下りながら銀はオドに迫る。

「みーちゃんがやってることの邪魔はさせない！」

「どうしてまだ戦う！　もう戦いは終わっただろう！」

「黙れ！　まだ俺が残っている。天の神が残っている。ならまだ戦いは終わらない、終われないんだよ、俺は！　そうじゃなければ生かされない命なんだよ！」

振るわれる銀の戦斧をオドは殴り飛ばす。止まるわけにはいかない。戦うことを定められた生き方を行わなければ命が途絶えてしまう。現に逆らったバーテックスたちは少しずつその命を終えようとしていた。体に刻まれた天の刻印が体を蝕んでバーテックスの命を枯らす。選択の余地は無かった。生きるために戦う。それをオドは選ばされる。

言葉は平行線をたどり、意味のない拳が交わる。

最後残された天の神。それは止まることなく攻撃を続けていた。光の槍、光の矢。十二星座のバーテックスを模した攻撃がいくつも大地に向かって降り降ろされる。迫り来るそれを星と一体化しつつある神樹がバリアを張って防ぐ。

そして最後に放たれた最後の攻撃、業火を周囲に放ち続ける太陽が空から落ちてくる。太陽はバリアに触れ、落下を一度止める。しかし太陽は消えることなく落下を続ける。太陽に触れたバリアが軋み始める。如何に大きく力を増そうと神樹と天の神では地力に大きな差がある。そして今、神樹は星と一体化するためにそのリソースを大きく割いていた。そのため、バリアでも防ぎきるのにも限度があった。今、神樹以外で動けるものは僅かしかいない。しかし動かないものは一人もいなかった。

「私たちが時間を稼ぐ。満開！」

五つの花が大きく空に咲く。もう誰も散華による欠損を恐れてはいなかった。五つの花が空に飛び上がり、迫り来る太陽に全力で正面から受け止める。天命に逆らい、消えかけているバーテックスたちが見上げていた。

「勇者は諦めない！」

それは誰が発した言葉か分からなかった。何故なら皆がそう思っていたから。今更、誰が言ったかなんてどうでもいい事だった。

絶望などしない。勝てるかも分からないなんて、諦める理由にはならなかった。世界を守るため、勇者たちは奮闘する。

二つの戦い。守ろうとする地の力と滅ぼそうとする天の力がぶつかり合う。神樹と一体化した禊はそれを見て、感じていた。体はとうに失っている。それでも戻らなくてはならなかった。戻りたかった。

「みんな守ろうと必死に戦ってる。でも、どうしたらいい？　ここから出来ることは何？」

禊には自身が何が出来るか分からなかった。周囲を見渡してもそこは何もない。神樹と一体化したために感覚が二重になっていた。片方の感覚は結界内の様子を伝え、みんなの戦いを禊に教えていた。もう一つは元からあったはずの感覚。しかしその感覚は禊に何も伝えず、重力も上下もない、空間にいるようだと禊に教えていた。

目を開く。その両目が見たのは何もない空間ではなく、いつも禊が夢に見ていた水底の世界を映していた。一つだけ、それまで何もなかった暗い水底に一つだけ変化があった。水の底、何もなかった地に芽が葉を出そうと芽吹き始めていた。

「ずっと、お前を見ていた。お前の誕生、そして今日までの成長と選択を」

誰もいないはずの水底で禊にかけられる声があった。禊が振り返る。禊を挟んで二つの空間が広がっていた。片方は見慣れた夢の中の水底。そしてもう一つは山桜がいくつも咲き誇り、澄んだ海の上を橋が伸びていた。伸びた橋は瀬戸大橋によく似ていた。その橋の中心、一人の少女が禊を見て立っていた。

禊を見て立つ少女に禊は見覚え、正しくはよく知る少女の面影が

あった。
「君は園子の何？」
「私はかつて、乃木若葉であった存在、その記憶。神樹が見てきたそれらは今もここにいる」
「乃木って事は君は園子のご先祖様？」
「そうだ、私は乃木若葉。かつて勇者としてこの地を守った六人の一人。神樹様が見てきた情報がここにはある。神樹様は全てを覚えている」
　言い終えると風が吹き、咲いていた山桜の花びらが橋を包むように舞う。舞っていた花びらが集まり、人の形を成していく。風が落ち着くとそこには幾人もの少女たちがそこにはいた。それぞれが勇者の装束、もしくは巫女服を纏っていた。歴代の世界を守るために命を賭した少女たちの記憶、樹海の記憶が形を成して禊と対峙していた。
　その中には幼い美森や園子、銀の姿もあった。今も戦う勇者部のみんなの姿もそこにはあった。彼女らの姿を借りて神樹は禊へ問いかける。
「小戸禊。お前によって私達は変わった。守りの存在であった神樹は消え、これからお前たちはお前たちだけの力で歩む事になる。そのための下地として神樹は星そのものになり、人が生きていくだけの恵みを生み出すことが最後の役目になる」
「神樹様が星と一つになって僕らは生きていく？　でも天の神はどうするの？　あれをどうにかしないと皆が消えてしまう。勇者部の皆も、バーテックスの皆も、園子も！」
「あぁ、だから私達がお前に問う事は一つ。小戸禊、お前はどうやって彼らと戦う？　必要であればこの生太刀を貸そう」
　そう若葉は問いかけると自身の腰にさした日本刀を禊に差し出す。それに倣うようにいくつもの勇者の武装が禊に差し出される。それぞれが神に抗うため、勇者に与えられた力であった。強大な天の神、それに抗うのには力が必要である。ここにはその歴史の全てがあった。強大化した神樹の力であればいくらでも作り出す事は可能であろう。

一つ、一つ目を通していく。いずれにも物語があり、守るために戦った無垢な少女たちの戦いの記憶。一体化した事で彼女らの感情が禊に流れ込んでくる。
過程は様々であった。しかし一様に世界を守りたいと思う気持ちは同じだった。その上でみな、禊に自身の力を貸そうとしていた。
一つ、一つの戦うための力を見終えて、禊は若葉に向き直る。
「答えは決まったか？　それでは、お前はどれを選ぶ？」
禊の返答は首を横に振る事だった。禊は答える。
「戦う力だけではダメなんだ。僕はみんなを救いたい。勇者も、バーテックスも、神樹様も、オドも、天の神も、全て助けたいんだ。だから戦う力だけではそれが叶わない」
禊は歩き出し若葉たちの横を通り抜け、咲いていた山桜の枝の一つに手を伸ばす。手を伸ばすと山桜は禊に答えるようにその枝の一つを自ら切り離す。切り離された枝はそっと伸ばされた禊の両の手のひらに落ちて、そこに収まる。手の中の枝を大事そうに抱えながら禊は彼女らに振り返る。
「戦う力はいらない。僕が欲しいのは救う力。生まれてきて、たくさんの事を知ったよ。嬉しい事、悲しい事、取り返しのつかない事、いくつもあった。痛みがいくつもあった。それは悲しくて、寂しくて、だから僕はそれを癒してあげたい。穢れを禊ぐ力が欲しいんだ。そのために僕は勇者になりたいんだ。ここで生きていたいんだ！」
禊の答えを聞いて少女たちはうつむく。それは彼女らの戦いそのものの否定であった。人類を守るために戦った彼女らに対し、禊はそれではダメだと言う。戦うだけではどちらかが消えるだけ。だからこそ、禊は戦うための力でなく、救うための力を求める。
禊の言葉を聞いて少女たちは黙ったままでいる。
「フフッ……、アーッハッハッハ！」
沈黙を裂いたのは他の誰でもない、乃木若葉その人の笑い声であった。たしなめるように横から注意する声がかかる。
「もう、若葉ちゃん！　せっかくいい感じの空気だったのにどうして最後まで我慢できなかったですか！　禊くんポカーンってしてます

よ！　どうするんですか、この空気を！」
「いやあ。すまん、ひなた。でも私たちが残した思いが、どうか生きてほしいという願いがこうして実を結んで、敵であるはずのバーテックスだった彼がこうして願ってくれるんだぞ？　どうして嬉しくない？」
「それでどうして笑っちゃうんですか！　ここでしっかり彼を送り出しておけばいかにも初代勇者っぽさを演出してカッコいい若葉ちゃんでフィニッシュだったんですよ！」
「そもそも、彼を試すこと必要自体が不要だったろう？」
「あーもう！　若葉ばっかりズルいぞ！　タマだってなー、カッコいいセリフの一つも言いたかったんだぞう！　リーダーだからってセリフのひとりじめはズルいぞ！」
「タマっち先輩ってば！　みんなで話したらまとまりがないって話になったから若葉さんに任せようって話になったんでしょう？」
「……まあ、その乃木さんが思いっきり空気をぶち壊した以上、どっちでも一緒だった訳だけど？」
「ぐんちゃん！　若葉ちゃんだって嬉しいのを我慢して途中まで頑張ってたんだよ！　もう台無しだけど、そこはちゃんと見てあげないと！」
　急にそれまで黙っていた少女たちは堰を切ったように好き放題に話し始めた。禊は彼女らを見ながら呆然としていた。手元の神樹の枝が慰めるように発光していた。ひとしきり、話せたことに満足したのか、若葉が音頭を取って全員が黙って禊に向き直る。
「お前を試すような真似をしてすまない、禊。しかしこれで皆の同意も得られただろう。禊、私たちは今日までのお前の全てをこの神樹の中から見てきた。お前は敵であるはずのバーテックスでありながら、命が失われることを悲しいと感じ、人と共に生きていたいと願った最初の個体。戦うことでは世界を救いきれなかった私たち勇者にとっての新たなる可能性。共存の可能性だった」
「僕が可能性？」
「そうだ。戦う以外の道をお前は私たちに示した。人と同じように感

じる。それまではなかったそれに私たちは賭けた。そしてお前は見事に人間とバーテックス、両方を救うことを願ってくれた。どうかただ生きて欲しいと願った私の思いに応え、それ以上の未来を提示してくれたお前に私は感謝したい」

「僕はそこまで考えていないよ。ただ傷ついていくみんなを助けたいと思って、そのみんなには人もバーテックスも入っていて、それだけだよ。僕はそんな大した奴じゃないよ」

「いや、違う。白鳥歌野から始まった勇気のバトンが幾人にも受け継がれ、そして終着点でお前と言う実を結んだ。他でもない、戦う以外の道を選んだお前だからこそ、そんなお前だからこそ、私たちは託したい。」

言い終えると若葉は両手を差し伸べる。戦うための力の象徴である生太刀はなく、少しの土とそこに芽生えようとする小さな新芽がそこにあった。生まれ変わった神樹の全て、それがそこにはあった。前へ歩み、両手を禊の両手に重ねる。そっと手を開き、手の中の新芽は禊に譲渡された。受け継がれた神樹の枝とこれから芽吹こうとする新芽が禊の両手の中にあった。

「これからの未来をどうか頼む。大丈夫だ、不安になるかもしれない。しかしお前は一人ではない。それは他の誰でもないお前自身が知っているはずだ。」

託したいものを託し終えると歴代の勇者と巫女たちは桜の花びらに戻っていく。託されたものをそっと禊は抱きしめる。神樹に蓄積されていた者たちも思い、記憶が禊の中を通り過ぎていく。

その中には禊自身の記憶もあった。失われた記憶をもう一度体験していく。

神樹が覚えていた禊の記憶が禊の前に立つ。

「さあ、思いだそう僕。僕の思い出を持って、ここからもう一度始めるために」

初めて見た蒼い空。初めて出来た友達。勇者部との思い出。園子との日々。そして未だ天の神に束縛されるもう一人の自分自身。全てが禊には大事なものだった。記憶の禊は笑う。

「結局のところ、僕らは最初から神樹様に祝福されていたんだよね。そうじゃなきゃ、バーテックスが四国の中にいて樹海化が起きていなかったことはおかしいだろう？」
「そうか、そうだよね」
「誇るといいよ。僕らは神樹様に直接人間だって認められていたんだ。だからもう何も恐れるものは何もないよ」
「大丈夫。もう忘れない。僕はもう一度また園子に逢いたい。行こう、神樹様。大事なもの全てを救いに」

神樹の中、満たされていた思いの全てが禊を中心に集っていく。全てを救うために、もう一度立ち上がるために。
場面は変わり、樹海の中。いくつもの力がぶつかり合っていた。
天の神の放つ極点の太陽を防がんと勇者たちは奮闘する。数回の満開を繰り返し、それぞれが体の一部の機能を欠損し続けている。もう目が見えない者、もう耳が聞こえない者、症状は様々であったが少なくとも今まで通りの生活は困難であろう。それでも彼女たちは満開を繰り返す。待っていてくれと言った彼を信じて。恐怖は勇気に打ち砕かれる。
同じように戦い少女が二人。もう一本の普通の樹木のサイズにまで縮小した神樹を消そうと迫るオドとそれを止め、禊の帰りを待つ園子と銀。何度も力が激突する。
「邪魔をするな！」
「踏ん張れ、園子！　あと少しだ！」
「分かってるよ、ミノさん！」
迫る黒い球体、オド自身を何度も撃ち返し、追い払い、園子と銀は奮闘する。その表情に一点の曇りすらない。迷い一つない彼女らにオドは苛立ちを募らせる。
「何故そうまでして、アイツを信じられる！　何もない、命すら借り物のアイツを！」
「私が知ってる！　みーちゃんはもういなくならない、私をもう離さないって！」

「同じ小戸でもお前とアイツはやっぱり別人だよ！　それが分かってる私らが信じないでどうする！」
「分かったような口を利くな！」
　戦斧を振るう銀を拳でなぎ払い、加速力をかけて体当たりし、園子を方舟ごと神樹の近くに叩き落とす。衝撃で方舟から投げ出され、園子は神樹の近くにまで転がっていく。痛む体を起き上がらせると怒りに満ちた表情のオドが目の前にいた。
　オドは片手を掲げてその先に黒い球体を生み始める。
「もういい、俺ごと神樹もお前も消してやるよ！」
「園子、避けろ！」
　銀の叫びが遠くから響く。しかしそれと同時に黒い球体に園子も神樹も、オド自身も飲み込まれる。心中のように三つの存在が重力の加圧に押し潰されようとしていた。
「園子は消させない！　神樹様も、君もだ！」
　禊の声が樹海の中に響き渡る。樹海の中の芽生え始めていた新芽が光を放ち始めた。芽生え始めていた新芽は光を放ち続けながら成長し、その芽が成長していき、樹海を埋め尽くすように向日葵の花が咲いていく。園子の感じていた重力の加圧が少しずつ弱まっていく。弱まっていき、そして激しい荒波のような力は凪いでいった。
　黒い球体が消え、神樹の前には座り込む園子とオド、そして園子と神樹を守るように、オドに正面から向き合う禊がいた。その身にはもう白色の鎧も、中途半端に生まれた蒲葡の鎧もなかった。纏うは黒い勇者装束。禊が神樹の勇者として認められ、加護を与えられた事を表していた。禊が纏って咲いている花は天に向かって開いていく花。彼が天の側にも目を逸らさない事を表していた。
　オドは問う。
「今更、何をしに来た？　神樹の加護を受けて俺たちを滅ぼしに来たか？」
「全てを救いに戻ってきた」
　言うや否や、オドは幾つもの黒い球体を放って禊を潰しながら、距離を開ける。迫るそれらに禊は手をかざしていく。光がいくつも生

まれ、敵意を禊いでいく。禊がれた力は方向性を失い霧散していく。オドを追いかけるために少し浮き上がり、一度禊は園子に振り返る。そして笑って言う。
「ただいま、園子」
「おかえりなさい、みーちゃん」
「行ってくるよ、みんなを止めに。それがきっとここに僕がいて、神樹様に背中を押されて、みんなに帰る場所を守ってもらって僕が出来る、僕が一番やりたい事だから」
「うん、行ってらっしゃい、みーちゃん」
園子に送り出され、禊は飛び出す。飛び出してオドを追いかけて空を飛行する。その途中で天の神の攻撃によって焼け焦げ、命が消えかけている幾つものバーテックスを見つける。
「大丈夫、みんな。今、僕がみんなを助けるよ」
地に伏す彼らをに向けて手をかざしていく。バーテックスたちが光に包まれ、体の傷が禊がれていく。すぐに動ける状態ではないが、少なくとも命を失うことはない。それを確認するとオドを追いかけて禊は飛んでいく。
オドを追いかけて、禊は落ちてくる太陽の近くまで来る。追いつかれ、オドは禊を迎撃する。空中で二人の拳がぶつかり、離れていく。ふり返り、もう一度二人は激突する。幾度もぶつかろうとも禊はその都度、自身とオドを禊いでいき、互いの傷を癒していく。何度も傷つけ合おうとも、傷を癒すことで戦う事を否定する。
「なぜ俺を癒す？　お前自身だけを癒していればいずれはお前が勝つだろうに！　何故そんな無駄な事をする！」
「助けたいんだ、何もかも！　君も！」
必死に新たに創造された自身の力を振るい、自身とオドの両方を守ろうとする禊。その必死な様子にオドはかつての三ノ輪銀の輝き、人の放つ眩い輝きを見出す。自身から分離し、発生した禊がそれを放つ事でオドの怒りは露わになる。
「何だそれは！　どうしてお前がそんな風に輝ける！　何でだ！　俺と同じ存在だろ？　お前は！」

「違う！　僕は小戸禊だ！　確かに僕は十三体目のバーテックスとして生み出された。でも今、僕の生き方を選んでいるのは僕だ！　他の誰でもない、僕自身だ！」

思いを込めた禊の拳がオドの纏う白色の鎧を砕く。バーテックスとしての象徴であったそれが砕け、オド自身が露出する。翼を失い、浮力を失ったオドが地に向かって落ちようとするところで禊が抱き抱えてそれを支える。オドを、かつての自分を抱きしめて禊は言う。

「僕らは人を滅ぼすために生まれた。それは確かに事実だよ。でも僕の生き方は僕が決める。僕がそうしたいから、みんなとの未来を僕自身が欲しているから。その気持ちは確かに僕が生きてきたからこそ得られたものだよ」

「いいよな、そう言う生き方。そういう人間の生き方はきっと輝いてるよな。そうだ、告白しよう。俺はそういう人間の生き方、生き様に憧れた。神に決められた生き方しか選べない俺では見ることしかできないそれに」

「選べるよ、僕は君で、君は僕だ。でもそれでいて僕は僕で、君は君だ。同じ生まれの僕がこうして今ここにいるのは君がいたから。でも今はもう僕らは別の存在。君は君が生きたいように生きればいいんだよ」

抱きしめていたオドを禊はその体を包んでいた天の神の刻印と言う名の呪いを禊いでいく。オドを始めに、それはバーテックスの伝達網を伝わってバーテックス全体に広がっていく。バーテックスと天の神の繋がりが断たれ、それぞれが一つの独立した命へと生まれ変わっていく。

樹海に広がった向日葵がその命の誕生を祝福するように咲いて光を放っていく。小戸禊と言う名の土壌にバーテックスと言う名の命の種が花を芽吹かせていく。新しい命として旅立っていく、それが禊が彼らに与える祝福だった。

一つ、一つの向日葵が放つ光が天から降る太陽に向かって集っていく。集まった光は太陽を包み込む。光は禊の祝福。それは絶える事ない炎の熱をなだめ、祓い、禊いでいく。生まれた太陽は少しづつ小

さくなり、そして形を維持できなくなって崩壊した。崩壊した太陽から小さな熱が飛び出し、空を駆けていく。それはまるで向日葵の花が空に咲いたようであった。

拮抗していた太陽が消えた事で勇者たちは地に降りていく。地に降りて一息つき、樹海が向日葵に満たされ、空の一点に戻ってきた禊がいることに気づく。

押し花が趣味であった友奈はそれを見て、向日葵の花言葉を思い出す。輝き、愛の告白。

そして向日葵はその本数で花言葉を変える花。９９９本あれば、その意味は何度生まれ変わっても貴方を愛すること。

一度は存在が分離して生まれ、記憶をなくし敵になり、それでも自信を取り戻し、今度は神樹の力によって勇者になって何度も園子の元へ帰る。そんな禊の在り方を示しているようであった。

オドとバーテックスを天の神の呪縛から解き放ち、禊は地に降りていく。遠くからは園子の方舟に乗った園子と銀が禊と勇者部に合流する。

禊に放され、オドが仰向けに倒れて星空を眺める。その表情は初めて見る星空に遠い星を想像する子供の様であった。そんなオドに禊は安堵するとふり返り、彼を待っていた勇者たちに言う。

「ただいま、みんな」

「おかえりなさい！」

禊の言葉への返事に皆の声が重なる。やっと戻ってきたのだと禊は実感する。

「神樹様の中で今までの勇者たちに会ってきたよ。いろんな事を託された。そのために今やらなくちゃいけないことがまだある」

そう言って禊は上空にいる天の神を見上げる。天の神は神樹に満ちた星を再び炎の海に戻すためにかつて放った天沼矛を再び放とうとしていた。あれが放たれてしまえば、神樹も星もどうなってしまうか誰にも分からなかった。だからこそ止めに行かなくてはならなかった。

そして皆の顔を見て禊は確固たる言葉を紡いでいく。

「神様を説得してくるよ。だから、これで最後、みんな待ってて」
皆を置いて飛び立とうとした時、禊の腕が掴まれる。振り返ると園子が腕を掴んでいた。
「一人じゃないよ、みーちゃん。みんな一緒だよ」
「そうだったね。一人じゃない。みんな一緒に行ってくれる？」

禊の言葉に皆が頷く。
「行こう、みんなで！」
全員で園子の方舟に乗り、空へ飛び立っていく。ぐんぐんと方舟は空を駆け上がり、登っていく。迫り来る勇者たちに天の神も黙ってはいない。持てる全ての力を振るい、勇者たちを打ち払おうとする。降り注ぐ光の矢、大矢、強烈な音、小さな太陽、幾つもの障害が立ちはだかる。
「勇者部、ファイトー！」
園子の方舟から勇者部と銀が飛び立ち、それぞれの方法で方舟を攻撃から守る。
「勇者部、五箇条！　一つ、挨拶はきちんと！」
拳で払い、
「一つ、なるべく諦めない！」
狙撃して撃ち落とし、
「一つ、よく寝て、よく食べる！」
巨大化した剣で防ぎ、
「一つ、悩んだら相談！」
ワイヤーで方舟を包み、
「一つ、なせば大抵なんとかなる！」
増やした日本刀で迎撃し、
「これが人間のたましいってやつだ！」
炎を纏った戦斧を振って道を作る。
全ての障害を障害を乗り越え、禊を天の神まで送り届けることを終えて方舟は消え去っていく。
「行って、みーちゃん！」

道を作ってくれた皆を一瞥すると禊は天の神に届く。
その手が神に触れる。触れた手から神の一部が流入する。激しい憎悪、怒り。負の感情が噴出し、禊の中を染めていく。しかし禊はそれに染まらない。自信を染めようとする憎悪を払い、禊いでいく。それでも憎悪を現す神に両手で触れ、自分が心の中で思うことを伝える。
「神様、僕は生まれてきたことが嬉しいんだ。今ここにいて、明日を生きようって思えるんだ」
「君の怒りがが分かったよ。人は間違いを起こしてしまう生き物だ。でもその間違いを乗り越えて正しく生きていける生き物なんだ。だから信じて欲しい。君たちが生み出した人間は今もこうして生きているんだ」
「生きたいんだ！人として、ここにある命を持って、明日を生きたいんだ」
生まれて感じたことを言葉にして禊は思うの丈を神にぶつける。禊の光が大地に根付いた神樹の向日葵から伸び、天の神を包んでいく。
それでいいと一柱の神は思った。生まれた命が生まれたことに感謝し、生きていたいと願う。それは生み出した命が意味を持って生きるということ。人を生み出し、育てる神はその願いを否定することはできなかった。禊の存在を認めた神々は次々と天の神から離れていく。
複数の神の構成体であった天の神が崩れていく。離れた神々は流れ星のように地に落ち、星と一体化しつつある神樹に合流して無に帰っていく。
天の神が崩れ落ち、空にあった鏡が崩れ、神の持っていた悪意だけが形を残す。悪意はそれでも人を滅ぼそうと天沼矛を地に放つ。
「下には行かせない！」
禊は手を伸ばし、地に落ちていく矛を光で包む。禊ぐ力によって大部分が削がれる。そのまま落ち、神樹の生み出すバリアが矛を防ぐ。轟音と破砕音を出しながら、何重もの層になったバリアを破りながら

矛が落ちていく。星を一つ炎の海に変える矛はそれだけ強力なものであった。神樹の後押しを受けた禊をもってしても完全には消し去れない。後一手、最後の一手が足りていなかった。

そしてその最後の一手はもうすでに打たれていた。急激に神樹がその力を増し、大地に根付いた向日葵がその光を強める。急激に神樹が力を強めた原因がわからず禊は見えるところ全てを見渡し、それを見つけた。

大地に残し、星空を見上げていたオドがいた。その身体は樹木のようになり、人の形を保てないでいた。救ったはずのオドが平常ではないことを理解した禊が叫ぶ。

「何をしているのオド⁉？　どうして君が⁉？」

神樹と同化し始めたオドの声が神樹を経由して禊に伝わる。それだけ彼が個体としての独立を失っていることの証だった。

「お前がしたことと同じことをしてるだけさ。お前は器、つまりは肉体だ。なら魂の部分であるはずの俺でも同じことができるはずだ」

「でも、どうして？　君はそんなことをする理由はないはずだ」

「お前の記憶に触れ、お前の言葉を受け取って思ったんだ。もしかしたら、俺も変われるんじゃないかって。だからこうしてやってみた」

オドの魂という御霊を失ってオドの体は元の神樹の一部に還っていく。体のほとんどは植物に戻り、魂だけが神樹の一部になり始めていた。

「なあ、禊。俺は今まで選ぼうとはしなかった。でも今はこうして、これを選んでお前たちを守っている。これが人間らしく生きてるってことなのかな？」

その言葉は不安そうだった。初めて聞くオドの声に禊はただ肯定する。嬉しいことだった。選ばなかった片割れが自身と同じように思い、同じように行動してくれたこと。それはきっと人間らしい行動なんだと禊は思った。

「きっと変われるよ。守ることを選んでくれた君が何よりの証だよ」

「そっか……、なら思い残すこともないか。なぁ禊？　もしまた俺が生まれ変わることがあるのなら、また会えるといいな？」

「うん、僕もそう思うよ」
天沼矛が強化された神樹のバリアに弾き返され、天の神の残った悪意は禊によって禊がれた。神樹はこれ以上自信を必要ないと感じ、完全に変化の移行を完了させる。神樹が星と一体化し、その存在は星と言う名の巨大な無に帰っていく。
神樹が消失したことで樹海化は維持できなくなり、強制的に解除される。向日葵の花が舞い、世界が最後の神樹の光に包まれる。
光が収まると禊は波のさざめきを聞いた。起き上がるとそこは大橋の近くにある砂浜、かつて園子に出会い、いつか二人で行った砂浜であった。
「みーちゃん？　そこにいるの？」
声が聞こえた。振り返ると砂浜にへたり込んだ園子を見つけた。驚いて園子の元へ駆け出して、禊は気づく。体が動かず、病院のベットから離れられなかった園子が弱々しくも己の力で体を起こしていた。

「園子、どうして身体が？　どうなってるの？」
禊の口が動く。本人の意思とは関係なく言葉が紡がれていく。それは消えゆく神樹の中に残ったオドの最後の思考。
「俺を形作ってた神樹の一部だけどさ。もう神樹が星と一体化して大樹がないせいで帰る場所がないから、お前たちの体の欠損に使わせてもらったよ。どうせ禊が帰る場所にお前たちはいるわけだし、なら悲しいことは少ない方がいいもんな」
そして途絶える。神樹に残っていたオドの記憶が星に還ったのを理解した。
「兄さん、どうして最後でこんな風なのさ、勝手に消えないでよ」
唯一の肉親が消え、禊の頬を涙が伝う。まだ上手く足が動かない園子が足を引きずりながら動き、禊を包むように抱きしめる。
「あの人はみーちゃんを通じて、こうして選べたんだよ。それはみーちゃんがいたから変えれた事。最後にあの人はみーちゃんの帰る場所を守ったんだよ？」

人を滅ぼすための存在であったバーテックス。それが人の帰る場所を守るためにその持てる全てを使う。それは確かに変われたと言うべきだろう。そこに人間らしい心に従った行動があるのなら。

小戸禊というきっかけから多くが変わった。バーテックスは天の神に使われる存在から一つの独立した命に、十三体のバーテックスであったオヒュカス・バーテックスは小戸禊という一人の人間に、乃木園子を始めとする勇者たちはその運命から解放され、人を守るために集結した神樹という神は人を見守る星に、そして神の時代は終わり、人が己自身の足で歩いて生きていく時代に変わった。

そしてここにまた一つ、変われた存在があった。砂浜のさざ波の音に混じって小さな声が聞こえる。はじめに気づいたのは禊であった。周囲を見て、オドが元いたであろう場所を見つけた。そこには人間大の大きさの樹木が根付いていた。その根元から小さな声が聞こえる。

まだ体が十全でない園子を支えながら、二人は声の主の元へ進む。そこで見つけた。新たに芽吹いた命がそこにはあった。大赦の神官服をおくるみにして小さく泣いている新しい命があった。その赤子を見て、禊は直感的に理解する。思わず笑ってしまう。嬉しい時は思わず笑ってしまうものだ。赤子を抱え上げ、顔を覗き込む。確かに彼の面影がその子にはあった。でも確かに別の新しい存在に、新しい命になって彼はここに生まれた。

「なんだ、兄さん。随分と早い再会じゃないか」

「わ～、可愛い。名前はどうしようかな、みーちゃん？」

二人で赤子を抱いていると大きな黒い影が砂浜を隠す。見上げるとかつての魚座のピスケスに似た大型のバーテックスが海の上を飛びながら四国の外へ向かっているところであった。その上には何体ものバーテックスが乗り、乗り切れないものたちは自力で飛んでついて行っていた。

「みーちゃん、あの子達はどこに行くのかな？」

「多分、どこか人のいないところだよ。心を理解してバーテックスは悲しみを覚えた。だから彼らは人が彼を見たらどうなってしまうか理解している。だからこそ彼らは外の人のいないところへ向かって

るんだと思う」
「せっかく同じように心を持ってくれたのに行っちゃうの？」
「同じになったからこそ、今まで流れた両方の血の意味を彼らは知っていて、禍根がまだ互いに残っている。でも大丈夫だよ、いつかきっと彼らとも共存する日がくるよ。いつかは分からない。でも彼らもこの星に生きる同じ命なんだ、できない事じゃないよ」
「いつかそうなるといいね。きっと、来るよ。だってみーちゃんは帰ってきてくれたんだもの。不可能なんてないよ」
新天地へ、命を芽吹かせる場所を求めてバーテックスたちは旅立っていく。新たに生まれた命を抱きながら、禊と園子は見えなくなるまで彼らを見送った。その旅路が幸多くあらんと天の空と地の海が交わる水平線を見つめながら願った。
こうして神の時代は終わりを告げた。いくつもの血を流し、痛みを生み出しながらも最後には共存という可能性を残した人が自身の足だけで歩んでいく未来を選び出した。
僕の名前は小戸禊。かつては血を流すために生まれ、今はこうして生きることを望んだ命の一つ。生まれ落ちた理由は定められたものでも生き方は自分で見出した。勇者のもどきとして戦って、勇者として戦う力を捨てて、人として戦いを終わらせた。
拳ではなく、手のひらで誰かを救えるのならきっとそれがいいのだろう。僕はそんな人を勇者であると言いたい。
これから生まれてくる命が幸いに明日の日々を願えるのならそれ以上の幸福はないのだろう。生きていく上で苦しいことは絶えることがない。それでも確かに最善の安らぎが誰にでもあることを僕は覚えている。それを知り、今日を生きようとする者は誰でも勇者であると僕は思う。